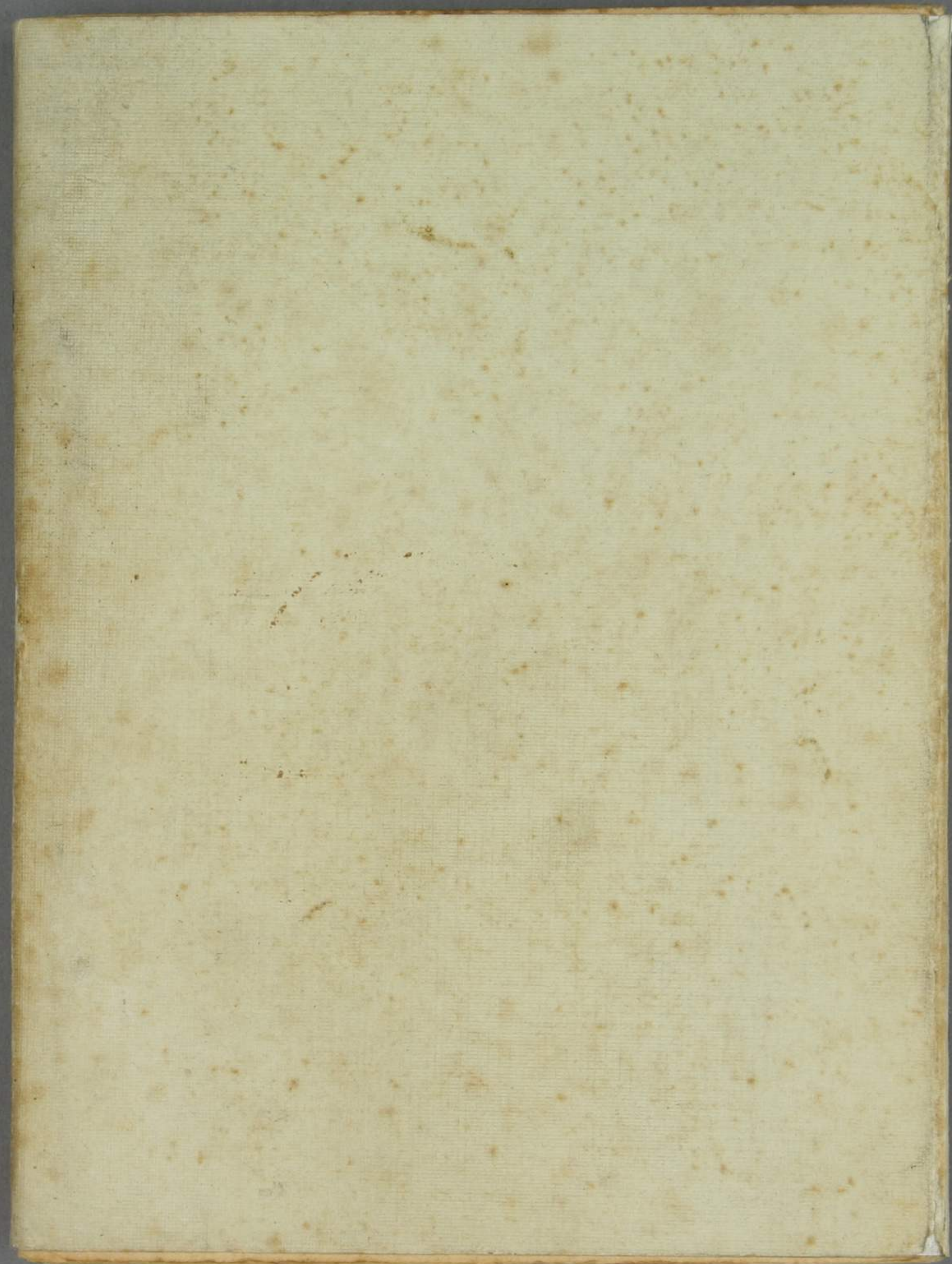


鳥

島村抱月書

雲

島村抱月著



和



島村抱月著

雲

島村抱月著

40

45

50

55

60

65

70

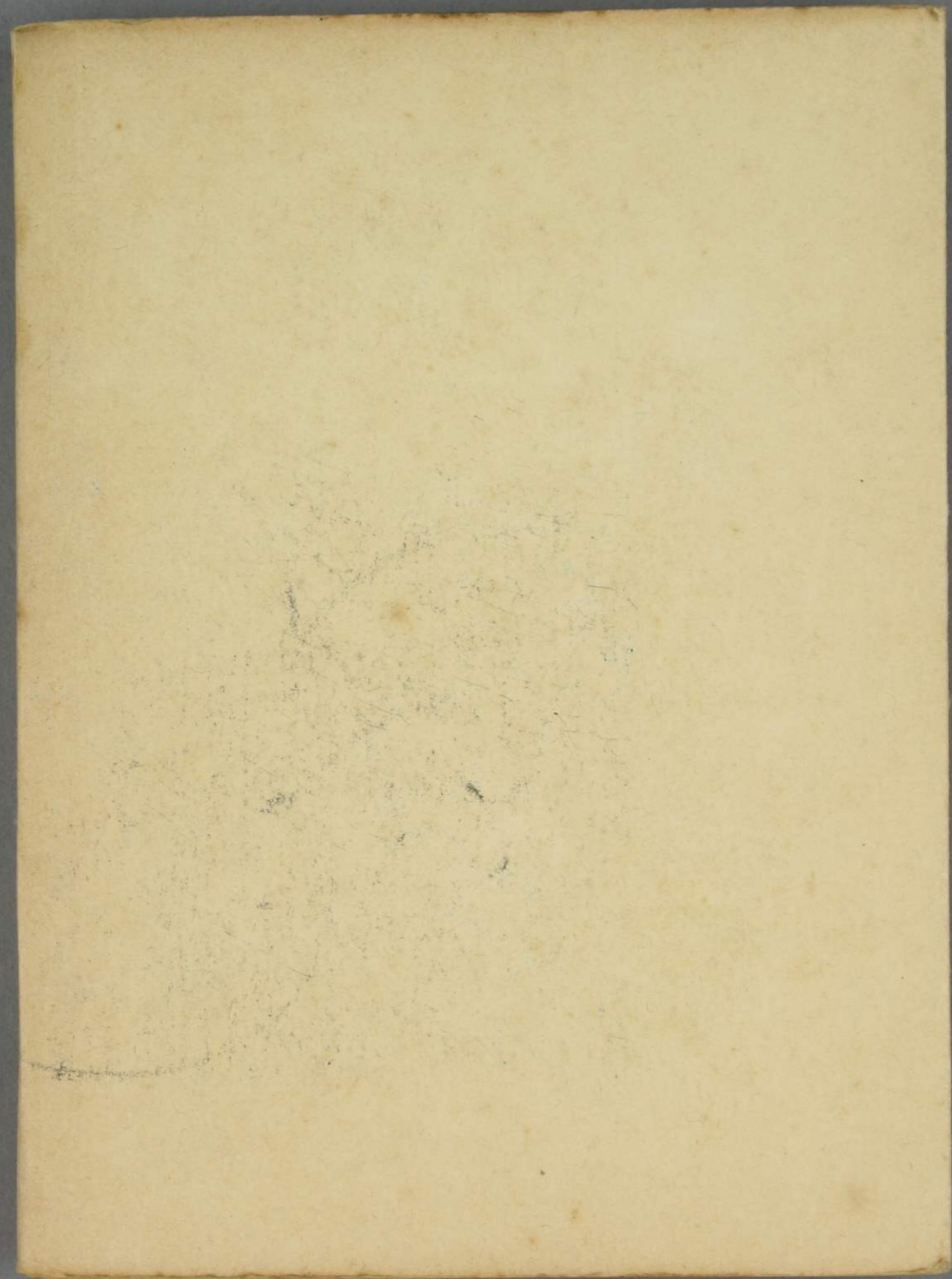
75

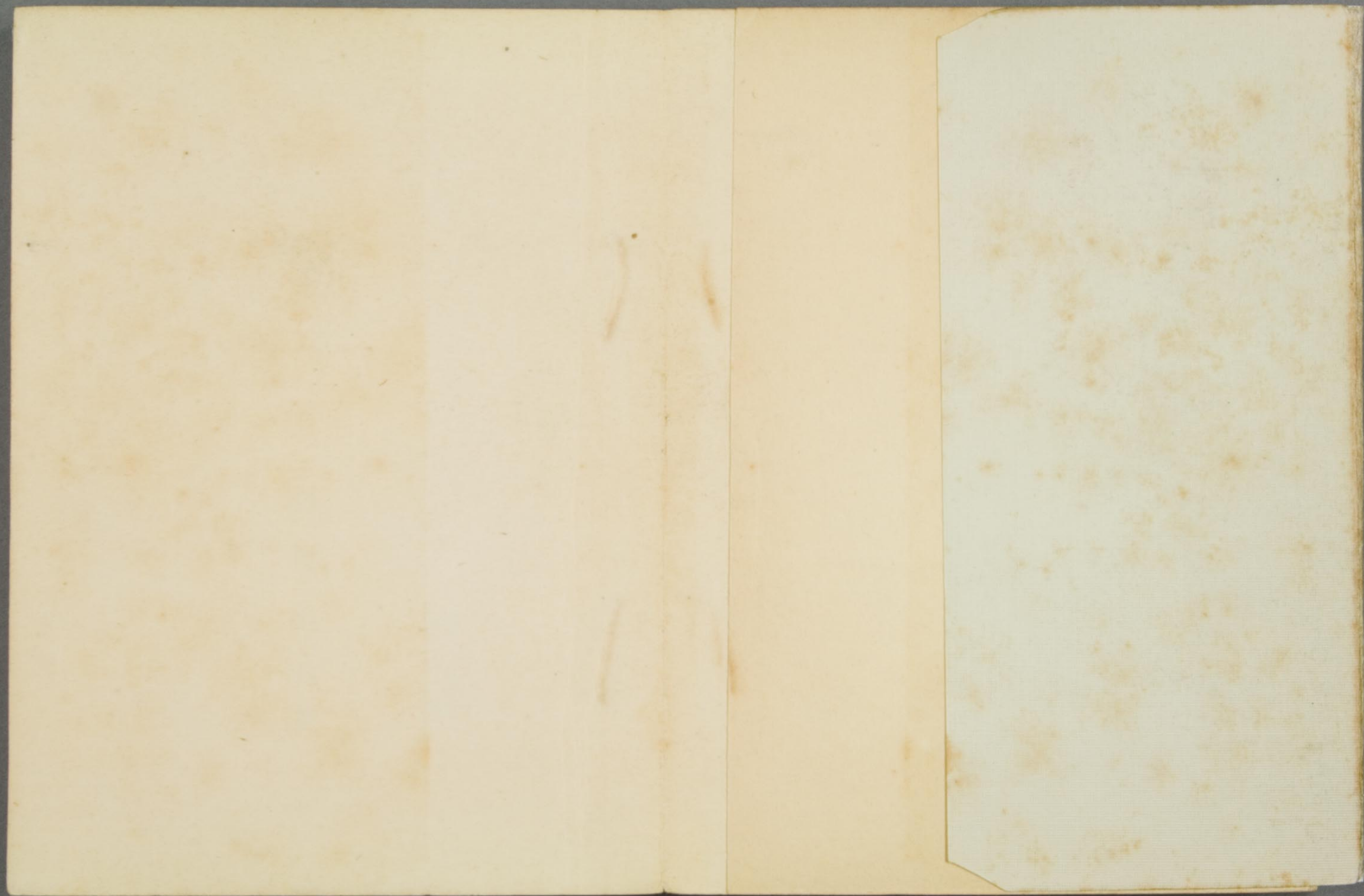
雨下



零

島村抱月著





零

島村抱月著

現代小品叢書
第六編

序

過去四五年間の私の小品や紀行や雑評や歌やを集めたものが此の冊子である。葉末からこぼれ落ちる程のものでも、私に取ってはみな一度心の中を傳つて來た生活の雫である。

文章はすべて『讀賣』『大阪毎日』『文章世界』『新日本』『早稻田文學』等に掲げたも

のである。茲に是等の諸新聞雜誌社
に對し、謹んで再録のお許しを乞ふ。

藝術座の事務所で

大正二年十一月 抱月生

目次

奈良より(大正元年十一月).....	二
京都より(同上).....	三
名古屋紀行(明治四十年八月).....	六
幻滅の一日(大正元年十一月).....	二七
書卓の上(明治四十四年).....	四八
故郷の父(明治四十三年).....	五八
宅地(明治四十三年).....	六三
一夜(明治四十四年九月).....	六八
私の好きな文章(明治四十三年).....	七五
ミロー、ヅキーナスの秘密(明治四十一年九月).....	八一

目 次

明治文學と徳川文學の交替(明治四十四年)	一九七
題言(明治四十四、五年)	二〇九
心の影(明治四十五年)	二二六
トルストイの藝術と思想	二二六
國學の前途(明治四十四年)	二四八
翻譯劇の事(大正元年十一月)	二五八
桐一葉の藝の印象(明治四十三年十月)	二六五
演劇の保護(明治四十二年三月)	二七一
藝術になつた劇(明治四十四年六月)	二八一
歌舞伎座問題(明治四十四年八月)	二八七
現代の青年に與ふる書(明治四十四年十二月)	二九六

集

奈良より

第一信

奈良に来て二日目の十一月六日、その暖かさはシャツや外套の冬仕度が耻かしいやうである。黄いろい光りに包まれた南都の秋を、自分はこれから何う受取るであらうか。

正倉院寶物の曝涼はこの十日頃までだといふ。もつとも之れは平民には見られないものである。それを無位無官の自分等が拜觀

させて貰ひたいといふのだから、むつかしいのは當然である。けれども自分の専門學は美術に關したものであるし、一方には例の文藝委員會などいふものもあるのだから、何とかしたら見られまいものでもない。そこで早速文部省へも御助勢を頼んで、願書を出して見た。そして奈良へ来てその返事を待つてゐると、やつぱりいけないといふ。少々氣ぬけの氣味である。日本といふ國では、雲上からさす直接の榮光はとこしなへに、平民の上を照さない仕掛に出來てゐる。しかたがない。行つて春日野の鹿に餌でも買つてやつて、羞かしさうな眼をする額でも撫でてやらう。

と思つてゐるうちに天氣模様が變りかけて來た。少くも四五日

はゆつくりと此の土地に親しんで見ようと思つたのが、何だか荒んだ氣持になつて来る。今の自分には、一つところに長く留つてゐられるかどうか問題である。二三日したら京都邊へでも行かう。或は二十年ぶりに故郷の石州へでも這入つて見ようか。體がぢつとしてゐれば頭が働く。西へ東へと休むひまのないほど飄泊してゐたら却つて心がやすまるかも知れない。受働的でしかも痛烈な刺戟を絶えず神經に受けてゐたい。それには奈良はあまりに穩和である、鈍角である。懷古の情味をそれみづから、自分には昔ほどの濃やかな心持を齎さない。十年以前、はじめて一度この地を訪うた時は、あの猿澤の池の邊まで來ると、何とは知らず感謝

第二信

の涙が眼頭ににじんだのをおぼえてゐる。自分の心が荒んだのか。あの時のナイーヴな情味を今いちど呼び返すことが出来るだらうか。少くともこゝ二三日は此の土地に居て見よう。十時、この原稿をポストに入れながら、雨の覺悟をして出かける。

自分は奈良の契點を嫩草山に置いて見る。此の山の氣分が奈良のシムボルである。此の土地で最も氣に入つたものは此の山である。

二月堂、三月堂の邊に小半日を過して、春日神社の方へ抜
 ようとすると、すぐ左手に明るく眼をあいだやうな嫩草山が坐つ
 てゐる。右は春日山、左は手向山、いづれも鬱蒼とした中に燃え
 るやうな紅葉の錦をかけてゐる。其のあひだに挟まつて、此の山
 一つが肌を脱いだやうに柔かである。山といふよりも丘である。
 かけ上ればすぐ頂に達せられさうに見える。圓みを持つた輪廓を
 のびくと西南にひろげて、其の裾が自分の今通つてゐる道であ
 る。曇つてゐた空がちやうど此のころから晴れて來て、小春日の
 暖い日光が一面に此の山に流れかゝつてゐる。中腹に殊さらら
 しく松の大木が三四本立つてゐる外、立木といふものは一本もな

い。秋草の黄いろに枯れたのが、しなやかな毛織物のやうに全山
 を蔽うてゐる。その勾配のなだらかな、廣々とした裾野には鹿が
 遊んでゐる、掛茶屋がある、白い手拭を姉さまかぶりにして手甲
 をかけた草の根搔の女がある。時たまに茶屋の女が客を呼ぶ聲の
 外物音一つも聞こえない。掛茶屋に腰をおろしてうつとりしてゐ
 ると、いつの間にか、うつらくと眠くなるやうな氣分である。
 鹿は雌鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは、大抵顔を日の方へ
 向け、まぶしさうに眼を細めて、口をもぐぐくさせてゐる。立つ
 てゐるのは其の涙ぐんだ大きな黒い柔和な眼をちつとさせて、物
 を考へるでもなく考へぬでもない様子をしてゐる。或は絶えず何

物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでも逃げないでもないといふ態度で寄つて来る。一皿二錢の餌を一つくつまんで口に含ませてやると、しまひにはみんな懐いて来る。前の一疋にやつてゐると、右の奴は外套の袖を喰へて引つぱる。後の奴は裾を喰へて引つぱる、自分等にも呉れといふ催促である。兒鹿は遠慮して離れてゐる。雄鹿も其のいかめしい角の手前、すまして後の方にゐる。やはり人なつこいのは雌鹿である。と思つてゐると、あとの方にゐた一疋の雄鹿が自分等の方へ餌の廻つて来ないのを憤つたと見えて、其の角の生際の邊を振り立て、傍にゐた雌鹿の横腹をどんと突き倒した。今まで静であつた一群が忽

ち動揺しはじめる。併し騒ぎはそれだけで、また元の平和に戻つてしまつたが、穩な彼等の世界にも、波瀾はあるのである。茶屋の女が出した木熟しの柿の甘いのを一つ二つ剥いで食ふ。鹿が前へ来てしきりにお辭儀をしてゐる。皮やへたを投げてやると、みな喰つて了ふ。

山は一面に黄色な芝草を地として、卓いでゐる草に薄がある草萩がある。薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする軽やかな穂を出して、かすかな風に揺れて見せる。草萩も花はもう無いが、折り取つて見ると小鳥の脚のやうに赤い水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戦つてゐるのが

無殘である。

しばらく、草の上に坐つて此の山と親しんで見る。秋の嫩草山を人化したら、二十五六の美女の尼が、黄絹の袈裟ころもを著て端坐した心持である。

第三信

二月堂と三月堂とは手向山のすぐ下に隣して立つてゐるが、奈良の古堂塔の中で最も境地のすぐれてゐるのは此の邊である。興福寺の五重塔は、偉觀には相違ないが人家に接しすぎてゐる。東

大寺金堂の大佛殿は大きいは大きいが、唯の寺構である。ひとり二月堂三月堂四月堂等の一群がかけ離れて周囲との調和に特殊の意味を現はしてゐる。中でも三月堂が其の意味の中心を代表してゐる。眞に千年以上の古堂院に接するときの畏れと静寂と神祕とは、此の建物の前に立つた時に感ぜられる。

三月堂は千一二百年前の造營にかゝり、奈良最古の建物であるといふ。之に隣つて、半ば山に據り雄大の構をなしてゐるのは二月堂である。二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死の對照である。而してこの古都に古寺院を觀んとする自分等にとつては、現在の榮と生との如何に殺風景にして、寂と死との如何に高貴なること

よ。二月堂の観音は今も諸人の信仰厚く、石段の兩側に立ち並んだ夜燈の寄進者は多く藝妓である。本堂で御みくじも出ればお札も出る。堂めぐりのお百度も踏む。お水取りの儀式もある。要するに眼をあい生きて繁昌してゐるのが二月堂である。

三月堂は其の傍の平地に立つた儘千年の戸はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。奈良へ来て觀る寺は、斯うでなくてはならないと思ふ。松、杉、檜の巨木に色々の紅葉を綾どつた背景や翼景に圍まれて白く打ち開いた寺地には、折しもの薄れ日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。屋根瓦の苔、金物の錆、柱の朱の剝げの淋しさ、軒裏の胡粉は後朝に残る

女の頸白粉のやう。木材の朽ち黒み細つた木地の荒れ。薄暗い光の落ち込む堂内には、大香爐の上に積もる埃が冷たさうである。そこを離れて石段に腰をかけ目をつぶつてゐると寂寞の氣が人を襲うて來る。二月堂との間に落ちる水の音も次第に消えて行き、刹那の寂寞の中からは全く別な世界がひろがつて來る。千餘年の昔こんな大建築のプランを細かい一線一畫の末までも頭の中に描いた、其人の頭と今の吾々の頭との働らき工合など比べて考へて見ると、斯うして茫然としてゐる十餘分間は貴い時間であつた。其内後の山で、手斧を擔いだ男と商人風の男とが、大きな立木を距てて調子はづれの聲で「五十錢や。三貫にしなはれ。飽かん。買ほ

か」といふやうな會話をはじめた。其の響が木だまを返してゐる。

第四信

奈良ももう見飽たやうである。大佛の前は何度通つたか知れないが、昨日まで這入つて見る氣になれなかつた。あの境内は門の前から見るのが一番いゝ。本堂の前に來て見るのが其次にいゝ。中へ這入つて見るのが一番つまらない。それもたつた一人、陰影のやうな堂内の空氣の中で、あの時代の巨大趣味と妄想趣味との結合した怪物とも見るべき此の巨像のまはりを徘徊してゐたら、

そこに特殊の心持も味へるであらうが、今は修繕中である。掛橋を上つて行つて、雑沓の中を正面から拜んで來たのでは愈々つまらぬ。此のほか塔にはたしかに面白いのがある。佛寺の塔はちやうどヨーロッパ中世のゴシック寺院の尖塔と同じく、人間が天に向つて高まらんとする心を現はしてゐる。古佛寺の一面の趣味たる静寂、死滅に對しては、むしろそれを裏切り、若しくはそれ以上を示してゐる氣味がある。之れに對して奈良最古の建築の一と言はれる唐招提寺金堂の全景のプロポーションは何といふ静寂であらう。多くの寺院の屋根の如くむやみと上に向つて延びないでしつとりと下に落ちついて、心安らかに棟を横たへ、軒を伸べた

感じは、静止そのものである、安定そのものである、クラシカル
デキグニチーそのものである。たゞ修繕したらしい瓦の色生々
しいのが僅に趣味の調和を破つてゐる。

唐招提寺と一緒に見たうちには、業平、菅家、横笛などのローマ
ンスに富んだ舊蹟もあつたが、舊都大極殿の跡が一番心を惹いた。
高田學長も來合はされ、久しく土地に在る岡本社長、高田教諭な
どが同道して案内して呉られる。お蔭で地理的變遷などもよく
分かつた。昔の宮城から真正面、朱雀大路を下つた邊は、今の奈
良の町から外れてゐたといふ。大極殿を中心にした宮城址は一面
に打ち開いた田の中に點在してゐる。二三尺も土の盛り上つたま

まに、芝草、小笹、其の他の雜草の茂みが枯れ残つて、野菊、提
灯草などの黄や紫やの小さな花が秋の日を受け、つゝましやかに
咲いてゐる。諸方の門や廻廊やの跡は小さな土饅頭に過ぎないが、
大極殿跡は廣い長方形の土臺である。その上に立つて、底寒い秋
の風に吹かれながら昔の事を想像して見ると、型の通りの懐古の
情が起る。奈良朝式の風俗をした大宮人の洒落者等が、リファイ
ンされた綺麗な顔立の中に、どこか惻潑と陰忍の影を藏して、併
しまだ平安の子女程には神経が細らないで、そこらをぶらぶらし
てゐたらうと思はれる。そこが今はもう田の稻も大かた刈取られ
て、秋もさんぐくに老けたといふ風情である。土地の言ひ傳へに

よると、古來此の地點に鐵を入れると屹度疲病にかゝるといふので、周圍は残らず田になつて以來千年であるに拘らず、此の地點だけ農夫の破壊力から遁れて保存せられたといふ。よくある例であるが、ちやうど蟲類が毒粉やそれに連想するやうな色を身につけて、自己保存をやるのと似た自然の保存法である。此等の地域が迷信の宗教的威力を借りて自己の逆保護色としたのである。少くとも十九世紀以前の歴史にあつては、文明の最も永久な保存者は宗教力であつた例が、此地盤の上にも見られるのである。けれどもマツスの中にすら斯うした宗教的威力の漸く消えて行く今は、何が最も強い永久力になるのであらうか。

斯んな事を書き出しては果てしが無い。奈良の事はこゝに止めて、少しく遠出をして見る。

第五信

今日は畝傍、多武峰、三輪、長谷寺を見るために同じく高田學長と岡本氏と三人で出かけ、時間の都合で三輪だけを省いて、順に初瀬の長谷寺まで来た時は、もう薄暮である。長い廻廊形の屋根で蔽うた急勾配の石段を登つて行くと、泊瀬山の山腹に據つた本堂及び舞臺の構へがまづ観音だといふ輪廓を與へる。元來

數ある御佛のうちでは、觀音が最も凡夫に親しい佛である。從つてまた最も繁榮するのも觀音である。俗といへば俗だが、そこに人情の味の豊かな所がうれしい。迷信も願がけも、誠でさへあれば黙つて聽いて下さる、温い血の通つた佛といふ感じがする。その觀音の寺院では、淺草の淺草寺や信州の善光寺のやうに雜沓の巷に降りて來てゐるのと、京都の清水やこの長谷寺のやうに、山の中腹に舞臺を構へたのと二通あるやうである。そして同じく山に臨んで舞臺を構へた中では、清水は華手で長谷寺はじみである。じみなだけに大和の山中に立つた觀音堂として、蒼古なところがよく纏つた氣分を持つてゐる。舞臺の上から見おろすと、下の谷

合からかけて初瀬の旅籠屋町の屋根はもう夕暮の靄で黒ずんでゐるが、左右に迫つた山の側面は、今が紅葉の眞盛りである。峰を越して僅に残つてゐた夕日が、見てゐるうちに消えて行く。欄干によつてしばらく無言のまゝに見送つてゐたものが、溜息をして向き直ると、本堂の暗い中にはもう燈明が上つてゐる。本尊を拜した後この管長某氏は早稻田の校友であるといふので、名刺を残して山を下つた。長谷寺と清水とは、恐らく此の式の觀音の雙壁であらう。それを寫したといふ鎌倉の長谷と上野の清水とのおもちや式たるは言ふまでもない。

長谷寺へ行く前に廻つたのが多武峰の談山神社である。之れは

關西の日光だと謂ふ。日光ほどの華麗豊富は無いが、徳川氏の廟社に對する藤原氏の廟社といふ比較の興味がある。高山の奥にこれ程の莊麗な殿社を構へたのは、關西第一の名に負かないものであらう。日光ほど燦爛としてはゐないが、其の代り何處か上品な貴族的な落つきを見せてゐる。傍らに十三層塔の見事なのがある。所謂檜皮葺の厚い屋根が十三重に盛つてゐる角度と直線の調和が特殊の印象をおしつける。之れが我が邦に於ける此の種の塔の魁であるといふ。また此の社の奥に鎌足の墓があつて、事變のあるたびに破裂するといふので、御破裂山といふ、珍しい名前である。社殿までの山道、兩側はすべて二三百年を経た大杉や大檜の立派

なのが日も透さないほどに競ひ立つて、此の神社の威嚴を守つてゐる。兎も角も日本の文明に第一回の澤布巾をかけて之れを美しいものにして呉れた藤原氏の祖先が、斯うして靜に此の山の奥に鎮まつてゐるのだと思へば、感謝の念が湧かぬでもない。西洋ではマースよりもヴキーナスの力で政權を張つたのが一頃のオーストリアだといふが、日本では藤原氏がちやうどそれである。當時の美人は凡て藤原氏の出であつたのだから堪らない。といふやうな高田學長の話を聞きながら山を出た。

第六信

畝傍の神武陵及び橿原神宮は、歴史の上から言へば名所舊蹟の中
でも日本第一に位すべきものであるが、其の割には道路等の設備
も、所在地の構へも行届いてゐない。あらゆる意味に於いてもつ
と壯大であつてよい譯だ。日本に於ける神話と歴史との分割線は
こゝである。古代にあつては、交通といふことよりも、先づ其の
反對に阻隔的な地形が自家を衛るに便宜と考へられたであらう。
従つて外との交通路となるべき海港など、いふ觀念は國都を選ぶ
上にさしたる要素とはならなかつた。寧ろ自然の大城壁を周らし
たやうな山脈が三方を取り圍んで、一方に打ち開いた口がある。

其の口は成るべく南面して日光の豊かな所であつて欲しい。斯やう
な條件に合ふものとして大和の山間の平地はおのづから古代の人
の好みに適したらうと察せられる。勿論この好みたゞ一つが定都
の條件であつたか否かは別問題であるが、少くとも之れが上代人
の居都を卜するサイコロジに最も重大な一作用をなしてゐたこ
とは想像せられる。而して此の好みの最も完全に大規模に現はれ
たのが大和では奈良の平野、山城では平安の平野であつた。彼等
が先づ奈良に明白に其最大理想的居城を認めるまでは、其附近の
山間に、其時代の程度に應じて比較的小規模の平野を見つけ、そ
こを彼れから是と移つてゐた。其最初のもものが即ち神武帝の畝傍

附近である。

今の畝傍驛から橿原の帝都跡までは車を走らせる。途に飛鳥川を渡る。淵瀬常無しと詠せられた此の川も、此の邊は川幅二間にも足りない溝のやうな川である。細砂の川牀で、少しばかりの水が白ちやけてゐて、一向に歌の譬に引かれさうにも無い。それよりも此の邊の興味はやはり畝傍山を中心にした地勢の上にある。見わたすと遙に生駒、金剛、葛城の諸山脈が、一瞬間もちつとして居ないやうな其の不安規則の輪廓に高く青空を限つてゐる。其の中の平野の一部にすぐ手近く畝傍、耳成、天香山の三山が鼎立して、さも人間と親しみ易い様子をしてゐる。吾等の祖先が何

ゆるゑに山と特別な親しみを持つてゐたかは別として、彼等は朝夕此の愛らしい小山や彼の天空を限つて近づき難い大山脈やを仰ぎ見、めぐり見して、人間と自然との間に一路の感應を通じてゐた。に違ひない。今日我々の硬ばつた精神や感覺には、自然は多く死んだ外形の面が觸れて来る。併し古代人の新鮮な精神や感覺には自然の生きた方面が一層赤裸々に感觸せられたであらう。神話時代に近づくに従つて、山川も段々生物に近よつて来る。神話時代の人間には、山にも川にも靈があつて、我等と相互に感應し行動するのが常である。我々の祖先と此の邊の山ともまた其の通りであつた。其の神話の遺物の最も著しいのが三山である。

畝傍と耳成と天香山とは其の小さい愛くるしい山で且つ箇々平野の中に孤立してゐる點が、いかにも人間に親しみ易いと共に、其山の意義は決して莊嚴とか強大とか神秘とかいふものでなく、優美な可憐な平明單純なものである。であるから此三山が神話に這入つて、彼の「耳成と女を争」つた傳説となつた。すべて神話には多く人間以上の超越力が要素となるものであるが、三山の女争ひの如きはむしろ人間的である、神話としては極めて平明單純な可憐な神話である、優しい神話、特色のある神話である。此點が面白と思ふ。殊に三山の女争ひといへば、直に近世の文藝の世界を想はせる。近代の社會悲劇の最好題目は所謂三角關係である。

之をマーテルリンクで言へば、女一人に男二人の關係から生ずる「ペレアスとメリサンド」の悲劇か、さもなければ男一人に女二人の關係から生ずる「アグラヴェーンとセリセット」の悲劇かである。嘗に近代のみでなく、昔に溯つても、最も痛切な人間の悲劇は常に此三角關係から生ずる。「寂しき人々」「アンナ、カレニナ」から、「小春治兵衛」「バオロとフランチェスカ」に至るまで皆三角文藝で、而も已がたい人生悲劇の根柢に突入つたものである。茲まで來れば人生はたゞ涙と嘆息の外はない。此の見地から見た三角文藝の端緒がこの三山の神話にまで溯つてゐるのである。三山の三角關係は大様な古代の神話であるから喜劇的趣味であるが、

其の同じ流れが文明の變化に従つて後世の三角悲劇（時としては三角喜劇）を成すに外ならない。此の意味から見て、三山はなつかしい山である。

こんな事を考へながら畝傍山の麓まで來ると、流石に此の山は三山の中でも最も威容に富んでゐる。東北（？）から見ればやゝ笠を伏せたやうな形になる、其の下が神武帝の御陵である。西南側は脚の開いた机を傾けて据ゑた形で、其下に檀原の宮がある。畝傍山には若い赤松などが茂つてゐて、要するに美しい山である。昔はどんな木が茂つてゐたか知らないが、此の山を目標にして神武帝が其の宮城地を卜し給うたのは所以あることであらう。耳成

山は小さく端麗である。天香山の形にはそれ程の特色が無いやうである。

「奈良より」の紀行はこゝに止めて、題をかへて其の後の事どもを書きつける。

京都より

その一

京都市の生活は、今が丁度新舊の混亂期なのではないか。東京はもう是れで新店を張り通したといふ氣味である。新しいなり、不秩序なりに、一定した所がある。京都は之れに反して纏つた感じの得難い所である。少くとも其の外形に於いて、雜然とし過ぎてる。靜なものと騒しいもの、のろいものとせつかちなもの、

澄んだものと濁つたものが、もつれ合つてごた／＼してゐる。だから若し昔からの京都といふ概念に合するやうな經驗を得ようとするには、此の外形的現實の京都生活を通して、電燈の影のささない邊へもぐるか、電車の音の聞こえない處へでも出なければ纏まつた感じには觸れられない。それかと言つて新京都市といふものには、まだ是れといふ特色が出てゐないで、徒らにごた／＼してゐる。到るところに生々しい不調和の跡が見える。四條通りは京都第一の新式な町だといふが、なる程大丸をはじめ洋風の家並もある代りに、思ひ切つて古風な低い家造も残つてゐる。同じ日本家屋でも、高貴な御殿風にせよ、くすんだ町家風にせよ、東京

の大通りなどにある日本造りとは違つた味である。言はゞ一層純
日本式だ、従つて西洋造りとの不調和がはげしい。それに町をあ
るいてゐる人間がいよゝ新式の町と調和しない。見わたした所
帽子を頂いた人は群衆の二分か三分で、大多数はみな裸頭の人で
ある。すでに帽子を被らないくらゐだから、風俗萬端がそれに準
じて不揃で、且つあらゆる意味に於いて新式でない。

晴れた日の京都の空氣はいかにも透明なのであらう、山の色な
ども際だつて見える。所謂山紫水明の本場である。今自分のゐる
宿なども、すぐ加茂川を隔て、比叡山から如意嶽一帯の山々を軒
先のやうに見てゐる。併し其の實この邊にはもう諸種の製造場な

どが遠慮なく大きな烟突を竝べて、紫の山の中腹に灰墨色の煤烟
を流しかけてゐる。町はづれの諸方角から、大きな古い寺で撞き
出す鐘の音が夕暮の靄に瀟されて此の大都市へ渦巻き込んで来る
感じは、到底東京などで味はれないものであるし、加茂河原に夜
風ふけて千鳥の聲を聞く心持も古い京都の特有のものである。け
れどもすぐ其のあとから、一定の時刻が来ると度はづれな汽笛の
うめき聲が耳の鼓膜をしびらせる。何が何だか分らない。要する
に必然の大勢として、今に千鳥の聲も聞けなくなるだらう、鐘の
音にもあんな餘韻はなくなるだらう、山紫水明も是迄のやうでは
なくなるかも知れない。さうなり切れば、それでまた新しい京都

の特色が出て来る。新陳代謝は已むを得ない。たゞ現在の京都は
 中途半端である。古いものが新しいものに無残に荒されてゐると
 いふ感じを人に與へる。東京でも土著の人などに、二十年三十
 年前まではまだ同じ感じが強かつたに違ひないが、今日では大勢
 に於いて新東京の勝利が定まつて了つた。丸の内に煉瓦の大通り
 が出来るのを誰れも不思議とは思はない。之れに反して京都のや
 うな歴史を持つた古都では、今日の状態はむしろ慘ましいといふ
 感じを人に與へる。反抗的にも古いものゝ味方になりたくなる。
 けれども此の都市が生活を超越して國寶的都市にでもならない限
 り、斯うなるのは自然の勢である。生活は常に變ずる。生活を含

んだ都市の變化は何うすることも出来ない。今のうちに、亡び行
 く古いものゝ味ひを、味ひたい人が味つて置くより外しかたが無
 い。

その二

京都の落ついた味を髣髴しようとするには、新しい破壊力の及
 んでゐない所にもぐり込むのがよいといふ。けれども人間の心が
 すでに荒んでゐるのだから、其の人間の出這入る限り、大抵のと
 ころは、既に精神に於いて破壊せられてゐて、外形の幾分が残つ

てゐるに過ぎない。吾々はたゞ其の殘骸を見て、在りし昔を想像する外はない。瓢亭の料理も昔の味ではないといふ。一方は祇園の大通りを遠慮して横に入口を改築するのだといふ、其の赤塀の中だつて、客が今様で藝妓舞妓が今様で、三百年の傳統なんぞは死んだ器具類に名残を留めてゐる位のものである。でも、京極の裏を抜ければ、狸の穴のやうに曲りくねつた暗がり小路に、秘密そのものを私語いてゐるかと思はれる小さな軒燈が今もぼやけてゐる。祇園の茶屋が軍隊組織とでも言つた風に、圓い軒燈を規律正しく掛けつらねたに拘らず、小座敷に電燈をよけて、蠟燭の火の眼ばたきに、陰影のゆたかな、赤いうるんだ明りを見せて呉

元

れるといふ。島原の角屋に茶を飲んで太夫の引附を見て歸るだけでも、芝居や儀式を見るくらゐには昔の豪華の面影が忍ばれるといふ。が、今一つの興味は京都の町全體を靄に包んで、正體の知れない距離から見えてゐるところである。それには夜三條の大橋邊に立つて裏から平たく見るのも一興であるが、夕暮に清水の舞臺から大きく廣く見おろした景色が絶勝である。遙に西を限つた山脈が地平線に沈んで、其の上に春きかけた夕日の光線が、薄雲の切れ目から眼もあやな貴い輝きを京外れの村々に射かけてゐる。其のあたりの村一帯は光榮に染つて光つてゐる。それが京都の市街に近づく

三元

に從つて次第に黒んで來る。そして此の光りの村から夕靄の都への移目あたりに東寺の五重の塔がふはりと浮んでゐる。塔の下半分はもう靄の中に溶け込んで、見わたす限りの町と共に夕暮の神祕の中に沈んで了ふ。あとはたゞ一面に薄紫の海を展べて、少女の秘密のやうにひそやかに、靜に柔かである。それでゐる所々に圖ぬけて大きい寺の屋根が怪物の如く蒼白く光つて聳え立つてゐる。ちら／＼と見えはじめた町の灯が、空氣のせゐか、其の隣つたやうに美しい赤の色や、神經的に鋭い白の色に特殊な光澤を持つて輝く。——總體京都の裸灯は、遠くから見ると涙ぐんだ美しい眼のやうに艶な光澤を持つてゐる。——斯うして京の町は次第に暮れて行く。

舞臺からすぐ下はと見ると、灰色に乾いた一筋の路が紅葉の中を分けてゐる。紅葉は青から橄欖に黄に紅に緋に、そして爛れて赤黒くなるまでの盛衰の色をすべて一目に集めて、更に其の色と色との間に重なる光線の明暗を無限に複雑にしてゐる。それが夕暮に近づくにつれて更に色調を變へて見せる。其紅葉の中にビール會社の宴遊會のやうな旗をかけた赤毛氈の茶店が竝んでゐて、つい先程その一つから出た三人連の客は、商人風の三十男が一人と若い女が二人、其一人の女はほつてりした肉附の色が際だつて白かつた。それが酒に酔つて眼の下を眞赤にしてゐる。よろけな

がら大聲で男に甘つたれくして紅葉の谷に隠れて了つた。はつきり見えた人顔は之を最後にして、清水の山もまた暮れて行く。何處か遠くでわつといふ聲は聞えるが、それはたゞ車馬の音やあらゆる人間の音響が一つに溶け合つた總高だけである。あたりも次第に静になつて来る。御堂には蠟燭の灯や種油の灯が暗い蔭のなかにぼつりく々と赤い波紋を描いてゐる。夜風がさすがに寒い。

薄紫の海と見えた眼界がいつか黒い夕の影を深めて、市街は燈火の林に變る。そして夕暮の京都は夜の京都に移るのである。更に京都の夕暮を豊富にするものは鐘の音である。圓く内に卷

き込んで、無限に細く長く空氣の間を舞ひ行くあの響は、到底東京などで聞かれないものである。ちつと眼をつむつて聞いてゐると、古來此の世を去つた幾千萬の靈魂の祕密と惱みとを直ちに我の靈魂に傳へるといふ、其の鐘の音である。それが一面の夕闇の中から、あちらに一筋、こちらに一筋と渦き上つて来る。其の音を本へくと辿つて行つたら、皆何百年といふ由來を持つた寺の鐘樓に淋しく吊されてゐる、銘と鏽とのゆかしい大梵鐘なのであらう。そしてそれらの鐘の後には、女人の恨み、若僧の涙といふやうな様々のローマンスが餘韻を引いてゐるのでないか。

斯やうな光景が相寄つて、夕暮の京都はセンチメンタルなもの

になる。

その三

京都にせよ奈良にせよ、過去の生命が佛都として最も多く残つてゐるのは言ふまでもない。凡ての遺跡の中心は寺院である。つまり後に傳はるべき精神文明の吸集點が佛敎にあつたからである。それと共に、江戸、大阪、鎌倉が覇者の遺跡であるのに對し、京都、奈良は王者の遺跡であるのも勿論である。其意味でおのづから今日に残つてゐる空氣が違ふとも見られる。覇者の中で、徳

川の江戸、豊臣の大阪、源氏の鎌倉を除けば、京都には藤原、平家、足利等がゐるに拘らず、藤原氏はむしろ奈良が本家のやうに思はれ、平家は殆ど京都に深い足跡を留めないで亡びて了つた。勿論散布せられた文明の中に平家時代のものがあるのは當然であるが、纏まつた遺址といふやうなもので平家そのものをそこに集めて見ることの出来るものは殆ど無い。其の點から言へばまだ足利の遺跡は比較的多く保存せられてゐる。是は一つには政治上趣味上の關係からでもあり、又藤原氏平氏はまだ準覇者たるに止まつて、多く王室の蔭に蔽はれる氣味であつたに拘らず、足利氏はすでに純然たる覇府をなして、却つて王室を其の蔭に蔽うてゐた爲

でもあらうが、今一つは當時に於ける唯美趣味、デカダン趣味、世紀末趣味の中心が政權の中心點と結合して其の方面に強い足跡を印した爲である。足利義滿等の如き一種のデカダンの出現と共に、感覺方面趣味方面に耽溺的な、極端な鋭敏性を發展せしめた結果に外ならぬ。兎に角此等種々の理由からして、足利といふものゝ足跡は王都、佛都たる京都にも獨立して残つた。例へば銀閣、金閣、乃至足利の菩提寺たる等持院等が其の主なるものである。此の意味で此等の舊跡は京都に特殊の地位を有してゐる。

金閣寺と等持院とは近いところにある。金閣寺には寶物、古畫の類も可なりあるし、金閣そのものゝ建築、箔の残つた三階、楠

の一枚天井、庭の茶の水、茶室の好みから其の所謂南天牀柱のたぐひに至るまで、案内者が喋り立て、呉れる材料は随分ある。庭園の樹木は若い、様式は昔の面影を崩さない所があるのであらう。茶室までを含めた庭園美術の研究は京都に於いて殊に此の時代前後のものによい材料が多い。おもしろい新研究が出来るとおもふ。

金閣と等持院とを通じて一番強く心に残つた印象の一つは、足利家の人々の彫像である。何れも木彫の等身に近い坐像であるが、はじめ金閣寺に義滿の像を見て其の顔に特色のあるのが面白いと思つた。殊に眼尻の下つた、頬から口のあたりにセンジュアル、

タツチのある所に義満らしい感じがあると思つた。けれどもこれは或は義満その人の寫實的特色といふよりも、刻彫者の手法の特色なのかも知れない、像としては昔の多くの場合の如く空想の中から理想化して捏つち上げたものに過ぎないのかも知れない。さう思つて等持院へ行くと、茲には夫の維新の際志士のために首を落されて、修復したのだといふ尊氏の像をはじめ、歴代の木像が大袈裟に竝んでゐる。其の中の初代尊氏と三代の義満との間には顔相に遺傳とも見られる類似が、著しくあらはれてゐて、それが曩に金閣で見た義満のそれと同型である。是れだけ見て自分は何となく無意味な像でないやうな氣がした。よし後世の彫刻家が想像

で大部分を作つたにせよ、顔だけには寫實的根據があるに違ひない。まだ其の邊の事實を突きとめるまでの研究の餘地はないが、若し全然何時代かの作者の想像であるとすれば、想像し得て義満といふ人格の一面の眞實に到達したものである。像全體としては姿勢などに例の如く形式的虚偽が多く、顔面にも部分々々には眞實でない所もあらうが、前に述べた諸特色が際だつて初見の印象を統一する所に、顔全體の生命が個性的に見はれて来る。此の義満を中心にした特殊の表情は、其の他の像にも一代おき二代おき位に影を見せ、何となく足利文明に貫流している片よつた意味を思はせる。

その四

奈良の正倉院の御物が有位者有官者の或者以外に拜觀が許されないとは、此の前も書いた通り、規則上の不備であるが、それを補正するのは、先頃の「讀賣」第一面に出てゐた黒田鵬心氏の意見の如く、極簡単な事である。條文は何とあるか知らないが、其の資格箇條の下へ、學藝の研究に資する目的のものは身分詮衡の上で許すといふ意味を追加すればよいのである。是れは是非來年から改良して貰ひたいと思ふ。實地に就いて聞くと、現行規則の結

果は種々の滑稽となつて見はれてゐる。何でも許可證には同行者家族一名となつてゐるさうだ。そしてその家族といふのは西洋式に妻君の事であるといふので、同じ家族でも、親を連れることは許されない、子を連れること兄弟を連れることは許されない。妻君孝行は許されて、親孝行は許されないのである。それが立法者の本意でないことは察せられる。それはまだよいとして、不心得の拜觀者は、妻君だと號して藝妓を同道したり宿屋の女中を同道したりする實例がしばしばあるといふ。門衛もそれをまで一々觀破する譯には行かない。また西洋人なら妻君はおろか親子兄弟ぞろぞろと引つれて行く。行くに不思議はないので、本來なら貴人

も行き蕪蕪の徒も行き得るのでありがたいのである。規則はたゞ中間に立つてそれを取扱ふ人々の便宜で設けられたのであらうから、改良の必要があつたら成るべく面倒な事にしないで改良して貰ひたい。規則の末がいろ／＼滑稽な結果になるのも、多くの場合がそんなものだから、決して咎めはしない。

「讀賣」で私へ宛てた吉村繁俊氏の公開状は、近頃やはらかな手ざはりの文章である。去年大阪の中座で、ハムレット公演の樂屋から「早稻田文學」へ寄せられた文章以來、久しぶりで君特有の調子に接した氣がする。ウキルキー一座のキャンデキダの批評は、あのあとを今少し精しく聞きたかつた。此二十九日から京都でも同

じ一座が出演する。都合がつけば最終日のサロメだけは見ようかとも思つてゐる。見たら何かの批評にもならう。

一夜、京極の大正座といふ、有樂座式の新小劇場で女優中心の新劇を見た。一番目山崎紫紅氏の「島の女」の結末、榎本あい子といふ女優が幕を切る所から見て二番目「バンカラ」三番目「女心」とを見て歸つた。二番目三番目は中村春雨氏の「新歸朝者」「眞夏」の改題であるといふ。こゝでは花浦咲子といふ女優が中心である。白のアクセントが地方訛のせゐるか舊劇の祟りか知らないが、まだ「眞」に歸つてゐない。あれを一度全くの自然に引き戻した上でなければ其れ以上の問題に這入るまい。

その五

ウキリアム、アーチャー氏の日本劇に對する意見は、其の歌舞伎劇を罵つた點に於いて反對論を呼び起こしてゐるやうである。「警賣」に出た服部嘉香氏の説なども其一つと思ふが、尤も服部氏のは歌舞伎劇を日本劇の全部のやうに見ずして、むしろ新劇を主とした意見が聞きたかつたといふ趣意であらう。ちやうど畫の分つた西洋人から日本の新畫洋畫の批評が聞きたいのと同じことである。ところが新劇となると、白劇に近づいて來るから言葉の通

じない外人には批評が困難になつて來る。且つあまり多くその種の劇を見る機會が無かつた爲か、アーチャー氏は此の方面の批評をあまり精しくしなかつた。是れから後に出るかも知れないが（氏は大阪で見た人形芝居に餘程多くの興味を持つたらしいが、其の意見などもまだ發表されてゐない）今までの所では、たゞ文藝協會で見た「運命の人」は上出來であつたとか、帝劇で見た現代喜劇は巧妙であつたとかいふ程度に止まつてゐる。是れは一つはお世辭もあらうが、一つは實際批評するのが困難なからである。殊に帝劇式の喜劇などになると、女優などが殆ど素で行くやうなシア、リアリズムは、言語の通じない外國人に、其の微妙なアクセ

ントから来る虚實の境目などが感じ分けられるものでない。たゞ一つらに巧みだと見られたに違ひない。恰も吾々が西洋人の演ずる西洋喜劇を見て、其の外形的寫實は西洋人が西洋人に扮するのだからどれもこれももうまいといふのと同じである。其の以上の鑑別はむつかしくなる。若し望むべくばそこからせめて脚本の批評に這入つてほしかつた。今の一般的な日本喜劇はちやうどイギリスでジョーンズの喜劇を中心にした時代、若しくはピネロが後期の眞面目な社會劇に移る以前までの劇壇、乃至現在でも、少數の純劇を除いた一般的な喜劇で劇壇の群衆趣味を繋いで行くのと同じ所を歩んでゐる。人生の上面を愉快にふざけて通つて、純劇の

美

起らない時、若しくは一般公衆の娛樂機關を要する時に、其の穴を埋めるものは何處でも此の種の劇である。此の點から日本の現代喜劇を見ても一つの批評になつたであらう。

アーチャー氏の日本舊劇論に含まれてゐる眞理は音樂といふものに對する根本的疑問と過度の形式美に溺れた舊劇趣味の弊とである。一方から言へば歌舞伎劇のすぐれたものが吾々に生きた感興を傳へるのは、たゞそれが音樂としてである。音樂としてといふのは、必ずしも床の淨瑠璃のみといふのではない。衣裳も動作も言語も背景もみな一つに合して音樂的情調を形づくる。而してその基調音は床の淨瑠璃にあつて、時々其の特有な三味線樂や聲

樂を投げ込んで、基調を引きしめて行く。幕のあくそもく、か
ら、たいかりそめに太棹の音をしめる音が聞こえても、もうそれ
だけで吾々日本人の神経には一種の耽美的衝動を覚える。初めか
ら酔つてかゝるのである。そして其の酔はず力は疑ひもなく音楽
である。全體を通じて音楽の酔の醒めない限り、その音楽的情調
にすべての荒誕と誇張と無智とを隠してゐる限り、歌舞伎劇には
一種の感興が生き残つてゐる。

けれども音楽の力には根本的疑問がある。日本の音楽趣味と西
洋の音楽趣味とは種類の違ひであるか優劣の違ひであるか殆ど分
らない程離れてゐる。西洋人並に西洋音楽をやつた日本人の多く

には、日本音楽は概して音楽をなしてゐないと聞こえる。それが
多数の日本人には魔酔劑のやうな魅力を持つてゐる。これはどち
らも事實である。従つて西洋人に歌舞伎劇を音楽的統一の感じて
鑑賞せよといつても、それは不可能の事に屬する。併し之れは西
洋人が狭いのであつて、修養さへすれば日本人と同じくこゝにも
美人に酔ふ方を感じ得べきであるが、それとも日本人の方がおく
れてゐるのであつて、結局は必ず西洋音楽の今日の趣味に化せら
れ行くのであるか、疑問はこゝに残るのである。

今一つの問題は舊劇が過度の形式美に溺れてゐるといふことであ
る。

その六

過度の形式美に溺れてゐるといふ問題は、嘗に歌舞伎劇のみならず、其の姉妹藝術たる能にも舞踊にもある。けれども舞踊は言ふに反ばず、能にしても、歌舞伎劇よりは遙に音樂に近いものであるから、音樂に合する約束の上からも一層多く形式を洗練する必要がある。だから形式過多といふことは、やはり主として劇の上論せられるのが至當である。それと共に或點では能にも舞踊にも（特に舞踊に）通じた問題であるのも事實である。

劇の動作といへば、言ふまでもなく言語感想の意味に應じた表情であるから、是れには形式美の問題は伴はない、身體手足の動作に見はれる形式それみづからが内容精神から獨立して特殊の美を現はすことの不條理であることは言ふまでもない。ちやうど散文の文章が其の中の感想と無關係に辭句のみを華麗にすることを許さないのと同じである。けれども舊劇は散文以上であつて、むしろ詩になつてゐるのだから、勢ひ形式のみの洗練も加はつて來た。歌舞伎劇の動作が自然な散文的動作以上に詩的、音樂的、形式的な動作を多分に調合してゐることは言ふを待たない。而して今の問題は此の形式的動作の行き過ぎといふことである。

歌舞伎劇、能、舞踊に通じた形式的動作は、之れを四つの點から眺めてよい（茲には衣裳や光線から來る色彩上の形式美は這入つてゐない、専ら動作の上の形式論である）第一は音樂的運動、第二は線形の調整、第三は表情的姿態、第四は輕業的熟練、このうち第一は手足身體の運動が音樂に合して節奏的調和的に行はれるのであり、第二は其の手足身體の靜止した時の輪廓が直線曲線の配合及び形態の釣合の上に形式上の快感を呼び起すのであるから、是等はむしろ舞踊、能等に重きをなして、劇には或る特殊な瞬間の外、問題になるほど用ひられてゐない。歌舞伎劇を中心として見るときの形式的動作は、主として第三第四にある。第三は

俳優や舞手が、或る感情の高潮に達した瞬間を其のまゝ、ちつと彫刻的に留置せしめんとするもので、つまり感情に應じて姿態を作つて行くのである。ポスチュアリングである。所謂見え、その他種々の形式で、舞踊、能、歌舞伎に好んで用ひられる、最も重要な要素の一つである。

アーチャー氏も文藝協會で舞踊を見た時には、第一にこの點を認めてゐた。然るに歌舞伎劇では之れを認めなかつた。歌舞伎劇でこの重要な表情的姿態を唯ロビソン、クルーソーが海を見てゐるやうだといふ風に軽く見去つたのが、アーチャー氏の評の一つの落度である。併し之れは無理のないことである。あんまりいゝ

芝居を見たのでもなければ、いゝ俳優の藝を見たのでもないのだから、たゞ夫だけを見ての評なら、日本人だつて同じ感じを持つかも知れない。それに言語習慣の違ふため前後の意味や感情もしつくりと纏まつて領會せられてはゐなかつたらうから、其のボスチユアリングが十分の味を齎らさなかつたのは當然のことである。

斯んな風にして、いよゝの問題は最後の一つ、すなはち輕業的熟練といふことに歸する。是れを明白に言ひ切つたのはアーチヤー氏の慧眼である。日本の歌舞伎劇にも舞踊にも、たしかに是れを濫用してゐる所がある。形式の美が段々行きすぎて、根本内

容から離れて、終に枝先の邊で別の藝當をして喜ぶやうになる。その時が輕業である、舞臺の上の立廻りや舞扇の受渡しの類をはじめとし、輕業の分子が多分に侵入してゐることは、争へない事實である。輕業師と俳優とが區別されてゐないといふ一語で之れを諷したのは、適切といはざるを得ない。勿論是れにも條件は附けられる。舞臺上の立廻りで、實際に撲りあつてはならないから、撲つやうに見せて實際は撲たないだけの豫備習練がある。けれども其の豫備習練のおもしろみに釣り込まれて、二三合ですむところを十合も二十合も立ち廻らせて、立廻りそれみづからの滑かに進行することに興味を持たせようとする

六

るときに輕業師となるのである。問題は精神的内容を離れないと離れると、周圍に調和するとならないとにある。また舊來の舞踊や音樂は雜藝寄席藝といふ格式を脱しないために種々の手事や輕業を點綴して其の藝を花やかにして異まなかつたといふ理由もある。それが劇に入つて償ふべからざる累となつたのである。

すべて藝術は未熟といふことから未熟を生ずるが、老熟といふことから缺點を生ずる。未熟は下へぬけるし、老熟は上へ通りぬけて了ふ。老熟した藝術味は動もすれば細かい形式の味に耽けるやうになる。いろいろの理由はつけて見るが、要するに藝術の眞生命から遠ざかるものたることは争へない。過度の形式美に

溺れるものである。歌舞伎其の他の舊藝術に浸入してゐる此の弊が外人の眼につくのは、もつともこの事と思ふ。

其のほか純正な形式的要素たる表情的姿態、線形の調整、音樂的運動等が、其のグロテスクな誇張になつたり、無意味な形態や運動になつたりすると否とでは是非の論は定まるのである。またそれらのものを劇に用ふるの可否から言へば、歌舞伎劇と純劇との違同が問題になるのである。これらはおのづから別の論である。

その七

七

過去の京都には、實用でなく趣味の上から、加茂川が今よりも遙かに重大な關係を持つてゐたらうと思ふ。實用の上からは、氣候や水蒸氣の具合はどうか知らないが今では別に舟の便があるのでもなく、たゞ三條の橋下で大根を洗つたり、上の方で河原の砂利を掘つたり、洒し物をしたりする位のものである。昔も似たものであつたらう、加茂川はやはり實用を離れて京都の生命の一部をなしてゐる、東京の隅田川とは意味が違ふ。隅田川にも實用以外、趣味の方面は勿論あらうが、それすらあの通り、水量の多い濁川であるから、すべて複雑な大きい趣味に傾く、淺くとも清き流れのすみ田川とは、昔の江戸女の意氣にすぎないので、隅田川

の事實と風趣とは之れに反してゐる、濁つた水がゆるく流れる情味は寧ろ耽溺的、頽廢的の調子に近い。清淺なのは却つて加茂川の特色である。

併し現今の加茂川は清淺を通り越して汚ない衰へた川になつてゐる。白河法皇が朕の意の如くならずといはれた昔の加茂川は、水量も今日より多かつたであらうが、今では水がいかにも涸れぐである上に、川牀が汚ない、殊に河原の荒されてゐるさまは慘ましいやうである、水は少くとも、それが綺麗な河原に自然の瀬や淵をなして流れてゐるのだと美しいが實際はさうなつてゐない、砂利を取るために所きらはす穴を掘る、水勢が亂れる、堰を

する、足場をつくる、埃がたまる、腐つた溜水が出来る。一つは
 今が京都の道普請橋普請の最中であるからかも知れないが、加茂
 川そのものは成るべく實用よりも趣味の立場から自然に則つて手
 入をしてやる必要がある、折角のこの美しい河をあゝして荒して
 やるのは可哀さうだ。

一丁の餘もあらうと思はれる川幅の大部分は河原になつてゐ
 て、粒を揃へたやうな白、黒、青の小石砂利が一杯に盛り上つて
 ゐる、其あひだに所々草の生えた箇所が島の如く點在して、月見
 草などの咲く夕景色を思はせる。そのひろくとした河原を幾筋
 かの白い水が自然の回みに従つて分れたり縫れたりして遙に下鴨

の森の邊から流れて来る。そして橋の下あたりへ來ると、驚いた
 やうに列を亂して瀨の音を立てる、それが静まると今度は鳥渡し
 た淵になつて、悠々として下つて行く。水は概して澄み切つてゐて
 ちら／＼する子バエの腸まで見え透くほどだが、所によつては青
 く薄濁りを帯びてゐる。日中はあちらこちらで乾す友禪の反物が
 赤やら黄やらの雲のやうに河原の風に動いてゐる。これから歳の
 暮へかけて最も盛んであるといふ。

三條の橋の欄干にもたれて見てゐるとやがて、夕暮の色が川下
 からも川上からも迫つて來て、水の上面だけが遠明の反射に光つ
 て見える、同時に岸に臨んだ家の火影がちら／＼と流れに落ち

る。向ふの橋には車の灯ばかりが急がしげに駆る。橋は京都が本場である、四條大橋は洋式に改築中であるが、三條五條の兩大橋は新しいながら舊形を保存してゐる。殊に三條大橋がいゝ。擬寶珠欄干つきで、廣々と大様に反を打つたところは、横から見て美しく、橋の手前から見ても美しい。その上を心まかせに歩いて渡ることそれみづからが趣味であるやうな感じを興へる。忙がしく電車や自轉車で通りぬけるだけが目的の普通の鐵橋などとは違つた意義を持つてゐる。

加茂川の夜は、夕涼みをはじめとし、螢に河鹿に夏の風情が主なのであらうが、冬の夜は月にも闇にも寂しい。つめたい風が川

面から吹いて来て、暗い中に底光りのする水が、灯影をちかくと顫はせる、川瀬の音が石を摺るやうに聞える。さういふ夜が更けて、夜半に近くなると、はじめて名物の千鳥の聲が「ちゝゝ」とも「びゝゝ」とも聞こえて来る。河原を飛んで行く姿は見られないが、風の寒くなるにつれて鳴く聲が澄んで来る、絃歌の聲と紅い燈火とを流し去つた後の、冬の夜の加茂川はやはり此鳥を主人公にした世界である。

その八

今日は嵐山を書いて見る。京都はもう北山に雪が見えて、時雨まじりの落葉が頻りに窓の障子を打つてゐる。冬の嵐山、殊に懐かしいあの大堰川の水も、今日あたりは此の暗い雲の色を映していかに淋しく光つてゐることか、自分がはじめて嵐山を見たのは十年前、春もまだ早い三月の初めであつたが、當時の記憶は今跡かたも無く消えてゐる。身は嵐山にあつても心は遠く海の外を望んでゐた十年前の自分が、今年夏から冬にかけて三たび同じ山水のほとりにさまようて、我が世我が心の移りゆく姿を遠く薄暮の雲の行方にながめやうとは豫期しなかつたことである。

嵐山は勿論春がシーズンであらう。自分は不幸にしてまだ春の

齒

盛りの嵐山を見ない。けれども嵐山そのものよりも、お室から嵯峨へかけての野の景色がどうしても春の盛りを思はせる。春も梅や櫻ではない、黄いろい菜の花と赤い桃の花とぽか／＼する春の日の永さである。群青で塗り立てたやうな見事な竹藪を通り越すと、ぱつと打ち開いた畑からは、一面に黄色な陽炎が燃え立つかと思える、その向ふにあの際だつて影の深い嵐山が静かに浮び出て、はじめて此の邊の景色が整ふのであらう。嵯峨、お室はど

うしても菜の花桃の花の情調である。
嵐山は櫻もよからうが、夏もいゝ、秋もいゝ、そして冬枯の寂しさも捨てがたい風情である。此の山が、あの邊の連山に擁せら

壺

れて、くつきりと豊かな翠の影を盛り上げてある趣は、乏しい赤毛頭の中に濡羽の光澤を持つた黒髪を捌いたやうに目に立つ。すくすくと延びた赤松の林の強い青色と濃い陰影との埋高い中へ、すべての光線を吸ひ込んで了つて、山はいつもしつとりと霑つたやうな味を持つてゐる。この濃かな色調だけは夏冬ともに變らないで、たゞそれが一日中の光線の具合で、紫が、つたり、黒みが、つたり、錆色にぼかされたりするのみである。此の山のおのづからにして秀る一徳はこゝにある。

翠の地色の中に雲の模様の如く織り込まれてゐるのは櫻と楓で、春と秋との調子を變へるのは、言ふまでもなく是らの樹であ

夫

る。そして夏は彼等も一色の翠を捧げて、烈しい太陽の光りを和げることに協力するが、冬は我れから先に衰へて、力の無い枝を川風に戦かす。斯うして移り行く情合のゆかしさを見せるものは櫻と楓である。強い松を仕手にして、優しい櫻楓を脇にした嵐

山は、役者から言つても名木ぞろひである。嵐山といへば、裾を巻いてゐる大堰川は其の中に含まれてゐる。其の水の清くて美しいことは加茂川、宇治川など、同じであるが、加茂川のやうな浅瀬川でもなく、それかと言つて宇治川ほどの大河でもなく、ちやうど嵐山の麓に沿うて或時は大河の位を備へた淵ともなり、或時は山間の急流の趣を持つた瀬ともなり、巖があ

手、冷たかりし其の手よ。半日を興にまかせて谷の奥、岩の蔭と舟の行くところまで行かせ、大悲閣の下では半時間ばかり舟をすて、山に親しみ、下り舟も飽かず同じやうな事をして、夕暮に此山水と別れた。その夏の記憶を尋ねて、十一月の中ごろ秋の嵐山に來て見れば、人出で、まるでお祭のやうな騒ぎである。紅葉の色は念つた程赤くないが、酔つたやうな、熟したやうな調子を持つてゐる。くすんで古色を帯びた所に落ちついた重味がある。暫く茶店に休んだのち、なつかしきもの、形見と、橋の袂に立つてゐた楓の葉の赤いのと黄色なのを摘取つて歸つた。此の行は、高田學長その他の人々と一緒であつて。

さらに十二月の差し入りに、冬の嵐山が見たくなつて、ひとり曇りがちな淋しい日の午後から出かけた

その九

山も川も自然はいつも真剣であるが、周囲の設備などは、季節が過ぎると。もうすぐ見るかげもなく變つてしまふ。電車をおりると、渡月橋を前に見て、掛茶屋の店の閉ぢられたのが、そこらの通りを亡びた町のやうに感じさせる。開いてゐる店もがらんとして寒さうである、貸ボートの立看板が無残に引き倒されて、空

屋の壁に投げかけられてゐる。川端に出ると、茶店の縁臺はがら明きで、赤毛氈のけばくしいのだけが目につく。そこらの別荘の二階も戸がしまつてゐて、橋の上には人影が杜絶えてゐる。此の前にくらべて何といふ荒涼の景色であらう。橋に立つて川下を見ると、山奥から切り出した材木の筏が、寒水に浸つたまゝ一杯に繋ぎとめてある。上を見れば、ちやうど嵐山の上あたりから時々弱い日光が黄いろな夢のやうに川面、川原、橋板と反射の強さうな所だけを明るくしてゐる。瀬の音も、川原の砂利も、堰の棒杭も、みな白ちやけてゐる、淵の水だけが微な濁りを帯びたやうに青ずんで、のろく流れてゐる。この水の青みは山の色が映る

からであるが、夏は澄んだ空を見る如くすき通つてゐて、身も心も浸りたいと思ふ程であつた。それが今日見れば何所かに暗い影を沈めてゐて、何だかもの凄い。その上を寒い風が落として來ると、一時に小皺が立つて、ぞつとするやうである。けれども今斯うして橋の上に立つてゐる自分は、飽くまで此荒んだ光景に胸を抉ぐらせて、それに耽つてゐたいと思ふ氣分である。自分の心もこの名所の冬景色の荒涼たるが如くに荒しつくして見たいと思つた。

橋を渡つて、例の山の裾を川上へと辿る。小學校の兒どもが二人私を追ひ越して歸つて行つた後は、誰れも通らない。道には

朽たの、赤いの、黄なの紅葉が、深く積つてゐて、踏むたびに
 吸つてる水がじとじとと滲み出る。右手の川には、枝を出した木
 の下にボートや小舟が二三艘つなぎすてゝある。その中にも松、
 楓が一杯の落葉をして、舟は竝んだまゝ、水の揺れるなりに緩く軋
 り合つて動いてゐる。左は山の傾斜に添うてすらりと丈の揃つた
 松林を下から見上げて通る。楓はもう大抵焦げた葉をちぢらせて
 あるが、でも松の下に隠れて、ところ／＼日の射したやうに明る
 く黄な色を若やがせてゐるのがある。冬の衰への中に、せめて秋
 だけの若さでも、こつそり身に留めて楽しんでゐるのであらう。す
 ぐそばの山と山との谷間に落ちる水の音も、今日は耳にしみつい

合

て、その奥から吹いて来る風は鋼のやうに冷たい。上の方では山
 がら、みそさざえの鳴く聲が僅に冬の山の沈黙を破る。そのうち
 に段々夕暮ぢかくなつて、眼の前の山までが黒く霞んで来た。想
 ひ出のある所では、五分間もちつと佇んで暮れ行く水面を見てお
 ると、涙がにじんで来る。河原で鳴く鶴鴿の聲に驚かされては、
 また歩き出す。大悲閣下まで来た時は、もう五時近くであつた。
 そこからは丁度舟があつたので、それを出させ、茶店から正宗の
 瓶詰と嵐山土産の杯とを入れさせて、船頭と假りそめの酔を買ひ
 ながら、寂しい川面を、山蔭の夕靄の中から橋の方へ漕ぎ下らせ
 た。途中から秋田の衆といふ夫婦ものも便乗させたが、話はない。

膝を抱いてつくねんと夕雲の空をながめてゐると、舟はいつか山
 と反對の側の降場に著いた。寒い風の出た中を、自分も夫婦もの
 も、三人ながら黙つて考へ込んだ顔をして河原道から往還の方へ
 抜けた。跡を見ると、嵐山も、もう暮れてゐる。舟宿の後の暗い
 松林の中で二人の男が差し向ひで焚火をしてゐる。其赤い火ばか
 りがとろく、とろくと動いて見えた。之れが自分の此の山に
 別れた最後である。さらば、嵐山よ。

その十

京都のこの頃は、殆ど毎日、二三分おきに時雨たり晴れたりし
 て、日によると、暗い霧が一日町を掩うてゐる。川向の岸の枯柳
 と片側町だけを残して、あとは一ぱいに霧の幕が灰色の空と果て
 もなく續く。その中に東山の輪廓だけが薄く透けて見える。下手
 の欄干橋の上を、すらりとした姿の京女がコートの袖を重ね、
 蛇の目の傘をさして通るのが繪のやうだ。曇まじりの寒い雨
 がまた一しきり降つて來た。こんな日には外へ出る氣にもなれな
 い。小さい部屋に置炬燵でもしてゐるのが一番いゝ、京都の冬は
 どう考へても炬燵式だ。この邊の古いしもたや町を見ると、紅殻
 塗のくすんだ細目格子を狭い間口に立てきつて、三尺を二つ割に

した潜り戸から身を横にして這入つて行く。奥へくと穴のやうに竝んだ室が多くて、二階や突當りの、加茂川原に面した部屋にでも通ると、もう表へ出るよりは、其の部屋の裏窓から世間を眺めて、炬燵にでもあたつてゐる方がよくなる。表はまるで生物の氣もないほど、薄暗く立てきつて、奥へくと明るくして行つてそこから一家團欒の氣合ひもすれば、低い三味の音の漏れて来る家もある。商家や花柳街以外、斯ういふしもたやの情味の多く残つてゐるのは東三本木邊である。但しこの邊は今では衰退した京都の部類に屬する。ちやうど城下の士族屋敷の衰へたのを見るやうに、此のあたりは昔の榮華の荒んだ跡といふ、ひっそりした趣

を持つてゐる。どこか寂しい、荒廢した空氣が漂つてゐる。昔の東三本木の榮華は、今の木屋町よりも、もつと複雑なものであつたらう。艶であると共に雅であつた。絃歌の町であると共に文藝の町でもあり、また政治の町でもあつた。明治維新の際の若い志士連が、妓を擁し酒をあほつて天下の安危を論じたのは、多くこゝであつたといふ。思ふに戦争と政權と酒と戀との間に放浪し得るものゝ生活は最も緊張した生活、最も幸福な生活の一つである。之れを歴史家が表面から型に入れて讚美する時に、國事にある。之れを歴史家が表面から型に入れて讚美する時に、國事に奔走し生死の間に出入した者といふ事になる。其多幸な人々の口マンチックな生活の舞臺が此の邊にあつたのである。木戸孝允の

夫人となつた人の家、孝允が其の家の天井にかくまはれて一命を免れたといふ妓樓の跡もこゝにある。すぐ後の河原では宴席を襲はれた志士の一人が裏へ逃げた爲に待ち受けて見事に斬られた。今この附近でさゝやかな旅館や料理屋をしてゐる家の前身には、大抵斯ういふ歴史がついてゐる。また自分が今ゐる今の二三軒さきには、夫の山陽の遺跡がある。表は幾棟かの貸家になつて、やはり頼家の所有であるといふ、其奥庭の中に茶室式な一棟の庵が保存せられてゐて、山陽はそこで筆硯に親しんだのである。舊藩主淺野氏の當主が謙遜な態度で、山紫水明處の額を掲げてゐるのは、感じである。前は加茂川を隔て、東山に對し、後は元の母

ち

屋の庭形を保存して、立木、石、谿の配置など、その頃のまゝであるといふ。不斷はしめ切つたまゝ、殆ど訪ふ人もなく、京都名所の數にも這入つてゐない。亭の掃除は借家人が引受けるのだといふ。自分等を案内して呉れたのも其の家の娘さんであらう。白い美しい顔が、山茶花か何かの淋しい青木の蔭から見えて、横手の枝折戸を明けて呉れた。山陽の硯の墨汁でも磨つてゐさうな人だといふ感じが、同行の高田學長と自分との胸に期せずして起こつた。

山陽の家のちやうど眞向ふあたりに、川を隔て、梁川星巖夫妻の家もあつたが、今は取りこぼたれて跡もない、道普請の假小屋

になつてゐる所ださうだ。よく夫婦喧嘩をしたものだといふことが、土地の老人の話に残つてゐる。

斯んな風で、東三本木の今のさびれは言ふまでもないが、其のかはり、夜などは實に静かである。今宵も、もう十時を過ぎた。橋を渡る人音も絶えて、ざあ／＼といふ川瀬の音が、風につれ、遠く近く、空間をいっぱいに充たしてゐる。置炬燵の上にひとり頬杖をついてランプの火影を見つめてゐると、心は全く空になつてその跡へ悠久の淋しさといふやうなものが、微な愁を滲ませて來る。十一時少し前、いつもより稍おくれて、例の千鳥が鳴いて通つた。今夜の聲は川原の石に染み入るやうに鋭い。昔の戀人等が

やるせない「別れの夜」を想ひ出す。

ね、別れませうね。

どうせ添はれる仲ぢやないんだから、

.....

別れてゐても、

お互の心は信じ合ひませうね。

.....

ね、ね、もう私の言ふことが聞えませんか、

まだそんなに離れてはゐないでせう？、

私はね、

遠い／＼向ふに、

かあすかに、

極かすかだけれど、

光るものを見てゐます、

それをたよつて行きますよ、

生きてる限りたよつて行きますよ、

道が怖い？ 暗い？

かまひませんわ、

どんな事でも忍びますわ、

だから、だから、

ね、あなた、

あなたは其の光る所を動かさずに居て下さい、

ちつとしてゐて下さい、

ちつとして、ね、

ちつとして、ね、

幾百年の昔から「別れの女」が斯ういふ夜半に斯ういふ涙を幾度くり返したやら。

名古屋紀行

(一)

今度學校の用事で初めて名古屋へ行つた。歸りは伊勢に廻はるといふので幾らか觀光の餘暇もあらうと、出發の前夜、吉田東伍氏の『地名辭書』や田山花袋氏の『新漫遊案内』やそれから近頃出た『東海道車窓名勝』とかいふ本、古い所で『東海道名所圖會』など手元にあり合はすもの、拾ひ讀みをした。熱田神宮の由來から、名

矣

古屋城の草創、金の鯨は鱗の數が何枚あつて、加藤清正の献する所だといふ事まで記憶して、そして清正が斯んな事をした當時の心理まで相像して見た。

一方にはまだ明日名古屋でやる筈の講演の腹案がうまく纏まらないうで居る。地方で土地の有力者といはれる實業家、官吏、教師、學生、商人などいふ雑多の人を集めて、さて文學の講話をする。今日の我が社會状態では是れほどやりづらい仕事はたんとあるまい。一行の中には國際法の大家もあれば、支那通の大家も圖書の大家もある。此等の諸家の演じてゐられるのを聴くと、如何にも心安さうで羨ましい、例へば「今日の我が外交」と一言言つて

も聴衆は其の言葉の背景を理解して聴耳を立てる。處が我々の發する言葉になると此等多數の聴衆には最初は唯空しい音に過ぎない。「文藝が」と言ふ前に先づ「文藝とは」と説き出して其の言葉の背景から説明してかゝらなくてはならない。骨が折れて折り榮のしないことである。是れを思ふと、東京がなつかしく、學校の講堂や周圍の人々がなつかしくなる。

廿四日朝八時卅分發の急行列車が名古屋に著いたのは四時何分かであつた。熱田の森の見える頃から夕立ともザア／＼降ともつかず、薄日の中に細い雨が斜に縞目のやうに一しきり通り過ぎた。何となく柔かいやうな雨だと思つた。やがて列車が止まつて、一

行は名古屋停車場に著く。ブラットフオムーに降り立つと、今まで咽ぶやうな車中の暑さに醗酔させられてゐた頭腦が、一時人込の中に吸込まれて、自分も何がなし愴愴い氣持で、一緒になだれを打つて改札口へと流れ出る。

重さうな大飽を、赤帽も頼まず引きずるやうにして持替へく行く若い婦人や、同車したドイツ夫婦の漫遊者らしいのが、瘡せた通辯をつれて、男は思ひ切り大股に、女に軽く小走りに引き添うて行き過ぎる。ふと見ると自分の一行はもう柵の所にかゝつてゐる。あわてゝ追つかけるやうにして其の跡についた。但し荷物萬端の世話は一行のガブナーたる田中氏始め出迎の校友諸氏

が焼いて呉れられ、改札口を出ると、旅館の番頭が待ち受けて居て、用意の人力車で千秋樓へと送り込む。旅の面倒といふものゝ、無い旅行だ。

此の度の用務といふのは名古屋及び津で開く早稻田大學の校友會及び巡回講話に出るためといふので、朝の列車には自分の外、市島氏、田中氏、また國府津迄は大隈伯も別荘行で同車せられ、有賀、青柳の兩氏は夕の列車で出發の手筈であつた。

(二)

名古屋の人力車の幌の綾繻子張なのが目についた。是れは上方風なのだから何うだか知らないが、兎に角東京とは違つてゐる。宿へつくと、『名古屋新聞』の記者が見えて、何が一番目に留つたかと問はれたから、是れを眞つ先に舉げて置いたが、東京の護謨引布に比べて、著しく柔かに見える。圓くしなやかに見える。繻子張の蝙蝠傘といふ形だが、背後の垂の風にピラ／＼する所などは優しい上方式を發揮してゐる。但し新しい内は善ささうだが、古くなるも如何にも薄ぎたなく、だらしなく、よぼ／＼して見える、是れも上方式だか何うだかは知らない。

停車場の前から一直線に大通りを上つて行くと、兩側の建物が

低いから、殊に町幅が広く見えて、真中の電車路、兩側の街樹の列、それを透して遙の行當りに日清戦争の記念碑とか立つてる所は、町の位取が頗る西洋めいて、東京といふよりも、ずっと飛んでベルリンあたりにもありさうな構である。さうかと思ふと兩側の建物が、殊に停車場附近など、概して舊式な平たい疲れた家並で、張り盛んな色や線は一つもなく、灰色が、つた舊日本の面影を留めたものであるから、何となく不調和に感ぜられた。戦捷記念碑といふのが、たい大きな砲弾か何かを臺の上に立てた恰好なのは、藝術が無さ過ぎて、是れはまたヨーロッパ式でも無いプロゼイツクな日本の一面を現はしたものだ。

旅館は榮町の千秋樓と言つて、先年大隈伯が來名せられた折に復活した家だといふ、玄關であつたかに前島密氏揮毫の樓名の額が掛けてある。

奥まつた東南明の二室を打ち通した部屋に導かれて、何よりも先づ上著を脱ぎすて、額や頸ににじんだ煤まじりの油汗を拭うて一休みと思ふ所へ、もう出迎へられた諸君や待受けられた校友が續々見えて、挨拶が一巡型の如く濟む。湯が沸いてゐるといふので、御免を蒙つて湯殿へ飛んで行く。湯船の檜の香のまだ失せなゝいのに八分目の湯を湛へた中へジツと身を沈めると、痛快な新湯の刺戟が疲れた神経を蘇へらせる。一風呂浴びて、頭に石鹼の泡

を思ふさま揉みつけ、水道栓の口金をねちて、心ゆくばかり冷水に其の頭を打たせるときの樂みは又格別である。(其の實水道栓は水道でなくて井戸の水を汲み上げるのだといふ、水の出が吝くさ。湯槽の中なども肩まで入れ、ば溢れるほどの湯が張てあつて欲しい。アバンドダンスの味が無い、是れだけの大都市に水道が無いとは驚いた)是れで兎も角も悪夢に襲はれたやうな一日の汽車旅とあの咽るやうな隧道の重苦しさを洗ひ流し、廣袖の浴衣に團扇の風を含ませながら座敷に戻る。

座には氷の打碎にサイダー、平野水、生菓子、麥湯などが出てゐて、コップの氷に葛饅頭を冷したのを突つきながら居住を崩して

て談笑するといふ有様、自分には殆んど凡て初對面であるが、一行の他の諸氏には永い懇意の人々が多いと見えて、如何にも親しさうで、傍で聞いて居る自分まで善い心持になる。同窓同學といふことも他の愛の力と同じく、時を隔て處を隔て、始めて其の覇絆力を現はして來るのだ。嫉妬もあれ、排斥もあれ、競争もあれ、此等のあらゆる社會事情と對立して、校友といふ一句が持ち來たす一種の平等的情味は、斯んな場合に最もよく顯はれる。地方に出で校友の世話になるといふ事の愉快な一面を自分は今度はしめて經驗した。座中に名古屋新聞の社長といふ一紳士があつて盛に談笑する、相變らず御盛でせうと市島氏が言は、先へさう言はれ

ると何とも早や御挨拶のしやうが無くなる。カラ〜と笑ふ。
 其の顔をじつと見てゐると、今まで丸で記憶に無かつた面ざしがぼんやり心に浮んで来て、何うも見たやうな人だと思ふ、名を聞いて始めて小山松壽君といふ昔の暴れ者であつたと知れた。自分とは同年期頃の寄宿舎仲間（どうねんきごうきしやくしやなかま）で法科の人、賄征伐のチャムピオンであつたのだ。それから色々とその頃の昔話が出て、十四五年前の若い夢を辿る、現に一行のガヴナーたる田中氏は、其頃すでに寄宿舎の舎監であつて、その人から屢々嚴責をも蒙り、箱辨當の申渡をも受けたのだといふ。自分はまた寄宿費の足り無い爲に此の人の役室へ何度行つて延期を嘆願したかも知れぬ。そして結局規

則の表は枉げられぬとあつて表面一時退舎したことになる。自分の部屋へは錠をかけて置いて、必要な道具だけ持つて、金の届くまで他所の下宿に引移る。斯んな事が二度や三度はあつた其頃の事を思ひ出すのである。

(III)

着いた晩が商業會議所での校友會、夜の十一時頃宿に戻つて、市島田中の二氏は明日の要務の準備に忙しく、自分は電燈の下に腹這になつて、名古屋の地圖など取り寄せて見る。凡て地圖を見

るといふ事は、自分には最も興味ある業の一つだが、殊にそれが是れから遊覧しやうといふ市街の圖などである場合には、興味は一層實際的になつて來る。案内者を待たないで、自分で地圖によつて、目ざす所を探し當てるのは愉快なものだ。ヨーロッパ旅行の際なども其の方針を取つて、根氣よく地圖と首つ引をするので同行の小山温君を驚かした。名古屋も一つ同じ筆法で一見しやうと思ひ付たのである。所か見物案内の項目に擧てあるもので、是れは見たいといふやうなものは一つも無い。勿論縣廳だつて、紀念碑だつて、見やうによつて面白くないことも無からうが、自分には見る氣になれない。殊に此暑さと、飛脚のやうに忙しい旅行

ではそんなものは丸で算中に入らない。第一に見たいと思ふのは大須觀音の夜町が千日前式だといふから覗いて見やう。次に例のお城が兎も角もある。それから此の邊は一帶に眞宗の土地だから本願寺の別院といふのを次手に見やう。あとは町の光景、人情風俗といふやうなものだが、是れは一瞥くらゐでは分りさうもない名古屋料理と西川流の踊りとは明晩の河文の懇親會で見られるだらう。

斯んな事だ寢についたのは十二時過であつた。有賀青柳の二氏は今夜一時過に着く筈だから、麥酒を冷して、湯を沸かして、停車場へ迎に行つて呉れ、忘れるなよと田中氏が女中に念を押す。大

きな蚊帳の中へは市島氏と田中氏、自分は眠れない恐れがあるからと、小さい蚊帳に一人、座敷を並べて寝たが、何うも眠れない電氣もすつかり消して見たが、寝苦しい。さうなると考へ出すのは明日の講演の腹案だ。是れがまだ一向に纏つてゐない。

日本在來の趣味が徳川期に極まつて小化單化美化された経歴と、西洋のギリシヤ趣味キリスト教趣味などの對比から、今後の趣味を何う導くべきかといふやうな題で話すつもりにはなつてゐるが、一般聴衆に分かつて、面白くて、纏まりがつくやうに行くか何うだか、頗る疑はしい。あの例をあそこへ箝めて、あの理論はあれ位に止めてなどと、工風して見るがうまく行かない。まあ是

れだけの材料で、取捨長短は其の場に臨んで何うともするさ、自分の演説は何時もその流儀だと思つて諦める。其のうち表座敷の方で人聲がする、廊下を通ふ女中の足音が忙しげに聞える。着いたのだなと思ふ。

田中氏もまだ眠らなかつたと見えて、起きて世話を焼きに行つたやうだ。幹事の役も容易ぢやない。何處かの部屋で二時の時計が鳴るのを聞いて、しばらくして眠つたと見える。

七時頃に眼を覺ますと、半ば繰つた戸の隙から朝日がさし込んで、暑苦しい。前後して皆起きた。顔を洗ふ廊下で青柳氏有賀氏に會ふ。お疲れでせう、といふやうな挨拶を交はして、朝日の差さない横手の座敷に戻ると、庭の青葉が齎らす朝冷の氣が心地よい。全體に家の造りが例の奥深い、細々として、密やかな風で、庭なども狭い地坪の向ふは直ぐ九尺の板塀で、其の上部一二尺許りが格子になつてゐる、其の前へ松、楓を始め大柄の樹木を軒に攻めつけて植ゑ込み、石を惜氣もなく置いた合間々々の地面は、苔を着て、濕氣の香ひを絶ないといふ詭へである。椽先へ座蒲團を持ち出して、團扇を使ひながら茶を啜つて東京及び此の地の新

聞を讀む。不斷は何の興味をも覺えない地方新聞が、其の地に來ると不思議に好奇心を刺戟する、却つて東京の新聞よりも先にそれを讀む。論説から、市會の話から、東京のですらさして興味の無い記事までが、皆意味を持つて其の地を説明して呉れるやうに思ふ。一行の事を書いた記事も無論讀んだ。そして其の書き振りの精粗確不確の上に其の新聞紙の性質技倆意志等をも揣摩して見る。

今朝はじめて名古屋の調膳に向ふ。茄子の實の味噌汁、茶碗盛はまづい。鮎の鹽卷に酢をかけて喰ふ、之れは自分には始めて、ちよつと變つた味だ。百合の甘煮、梅干の巻いたのに砂糖をかけ

た猪口。

今日の講演には暑中だから精を養つて置く必要があるといふので、生卵の要求が大分あつたが、自分は家で手飼の鶏の卵を食ひ馴れてから、買ひ卵の黴くさいのを吸ふ氣になれなくなつたので止めた。其の代り晝食には名物の蟹を食はせられた。青柳君は更に其生肝をまで吸つて元氣をつけて居た。

八時半、市島、田中の二氏は基金募集方面の要務を辨ずるために外出、有賀氏は疲労のため宿に残り、青柳氏と自分とは此の半日の暇で名古屋を見物することにした。先づ電車で熱田へ行かうとの説もあつたが、時間の都合で止め、兎も角も城を一見しやう

と思ふ。それには例の地圖主義で、徒歩しやう、とも思つたが、何にせよ九十何度の大暑に焼けた地いきりが恐ろしく、人力車で行くことになつた。浴衣がけで、久しぶりで寫真機を肩にかけた。途中の店でフィルムの手札形十二枚巻を買ふと、一圓七十五錢だといふ。歸朝してからフィルムは一度も用ひなかつた爲、相場は知らないが、馬鹿に高いと思つた。

途々車夫がうるさく説明をして呉れる。石垣の裾の空濠から、三の丸、二の丸、お天守、大手門と聞きつゝ、正面の、最も樓に近い所まで来て車が止まる。降り立つて見物した。遠見に見た金の鯨、名古屋人士の誇りとする城樓の棟は、稍近く見られたが、

併し位置が極めて悪い。城全體のかゝりも見えなければ、それか
と言つて、鯨だけが鮮かに見えるほど近くもない。もう是れから
内へは這入れない。城内を見物するには位階何等とか以上でなく
ては願つても駄目だといふ。例の通り無官のものは國民扱にさ
れてゐないので。つまらない氣持がして、引きかへさうかと思つ
たが、今少し離れて、全體の形勝でも見て置かうと、跡戻りして
右手の練兵場へ廻つた。

茲からは、ちやうど日を負うて城を見る形になる。うんと踏ん
張つた石垣の幾重かの上に、例のクラシカルな、冷え切つた色や
線が、威壓力其のものゝ權化のやうに積み重ねられてゐる。如何

にも静で如何にも重い。面白味は此の全體の輪廓に存する。金の
鯨の、日光に反射する賑な色が、果して城の印象に調和するか否
かは疑問だ。茲で青柳氏を圖中に入れて寫真を取る。

(五)

東本願寺も流石に大きな構へだ。履物を下足番に托して置いて
恐ろしく汚ない階を上り、本堂の中に這入ると、寺に通有な一種
の重たい空氣が頭を押へつける。向ふの柱の根に、萎び切つた一
人の婆さんが、尼のやうに禿た頭を垂れ、體を二重にして一心に

拜み入つてゐる。間が廣いために豆ほどの大きさにしか見えないが、舊い誠の信仰の、是れらが最後の一粒なのだらうと思ふと、おもしろい光景だ。堂の右手の破風の下にあるのは左甚五郎の彫つた何だとか聞いたが、仰見るさへ目がぐらくする此の炎天にそんな由緒が我等に何の刺戟を興へやう。瓦や土の照りかへしの烈しい門内を逃げるやうに出て車に飛び乗てもう何處へも寄るなと命じて、一直線に宿へ歸つた。十一時過ぎだつたらう。

名古屋見物はこれだけであつたが、その以上見たいと思ふ所もなかつた。たゞ夜の町景色だけとは思つたが、それも其の夜は暇が無くて、翌朝はもう出發といふ事になつて了つた。是だけは惜

かつた。

午後一時から縣會議事堂で講演會が開かれ、午後六時から再び商業會議所で經濟會の招待といふのがあり、九時頃から此の地第一流の河文といふ料理店に懇親會が催された。斯う忙しいと、人間はたしかに思想の動物でなくなつて了ふ。

此の日午前に來訪せられた人々には『名古屋新聞』の記者、また二三年前早稻田の文科に居た中村孤月君(『新愛知』に居る)などがある。中村君は特に自分の講演を期待してゐる聽者の種類などを擧げて、寧ろそれらの人々を満足させるやうにと親切な注意を興へられたが、この度の講演會の一般的な性質上、何うもそれ

が思ふやうに行かなかつた。

河文の記事で此の文を終らう。

入口は小さいが、奥へ行くに従つて、庭樹の生ひ茂つた間を殆ど迷宮的に廣がつてゐるのが此の有名な料理屋の構造である。恐らく晝でも薄暗いやうな小座敷が幾つもあつて、淺酌低唱の聲がそこら中から聞えるといふ趣味なのであらう。

會は表の大廣間で開かれた。自分等一行を正座に据えて、市の有志、校友、何れも粒選りの紳士諸君が六十餘人の大一座である座中には早い頃慶應義塾を出て今は此の地の三井系に要地を占め會話の中に巧に英語を挿む半禿頭の好紳士もあれば、早稻田を明

治十八九年頃に出で、現に市會議長の要職を帯びる上遠野氏などもゐる。其の他似たやうな人が大分ゐる。斯ういふ人々と一座するたびに、自分は一面に新代の誇りといふやうなものをも感ずると共に、一面、年處世故の上に弱輩であるといふ小さきをも感ぜざるを得ない。二つの感じが混合した揅つたいやうな變な氣持になる。

今夜はくつろげといふので、禮服を貸浴衣にかへ、一風呂浴びて來た頃から膳が出て、酒が一巡めぐり、發起人側の挨拶、それに對して、市島氏が、お禮に早稻田大學第二期計畫の要點を綯ひ交せて述べられる。辭令は中々老鍊なものだ。それが終ると、も

うそろ／＼杯の交換がはじまる。座中に酒の氣氣が漲るにつれ、お客の野太いバス聲と藝妓の華奢なソプラノの聲とが一緒になつて潮のやうに湧き立つ。

大分上機嫌になつて來た一行中には、型の通り名古屋女のタイプに就いての議論も始まつた。現物を前に据えて置いての論だから間違つことはないが、概して關東の張のあるのと上方の人形式なのとの中間だらうといふこと、但しそれにしては七分まで上方式なのが純名古屋で、關東式の分子の加はるにつれ、近代化し若しくは雜種化したのだらうといふ説であつた。別に新しい説とも思はんが、そんな事かと謹聽して居た。すると側の方で名古屋特有

のものを何か一つ聽かして呉れといふ注文が出る。「桑名の殿様」々々々々といふ聲がかかる。侍つてゐた蝶吉とかいふ老妓、これがおのづから一同を率ゐて居て、踊は西川石松門下の名取、先達つて遙々有樂座へ上ぼつた中の一人であるといふ、それが傍の紳士と頻りに妥協をしてゐる。あれ一つだけ抜いてなら、やりますといふ事に話が纏まつて、蝶吉を始め、四人の舞妓 袖を連ねて、桑名の殿様何うとやら、しぐれで茶漬を召上る、といふやうな四曲つゞきの手踊に大喝采を博した。實は五曲一續で、歌も曲も振も大同小異であるが、其の中の一つだけ因州因幡式の猥がはしい所がある爲に省いたといふ。跡の分で見ると、さう卑しい物

ぢやない。伊勢音頭、乃至普通の盆踊的な無細工なものでもなく、それかと言つて繊細巧緻な振事的なシンとしたものでもなく、或程度まで日本特有の舞踊の味が残つてゐて、それで全體には盆踊よりずつとリファインされたもの、四人手を揃へて踊る趣は寧ろ西洋のバレエなどで見る活動的、統一的な所の加はつたものである。單純だけれども、それだけ東西折衷の味があつて、一種中間的な手踊の好例と見られる。跡で友人に此の話をすると、友人は、大に笑つて、君も桑名の殿様なんぞ捉まへて野暮な事を言ふものだと言つた。けれ共兎に角おもしろかつた、踊る方が先づ名手であつた爲もあらうが、自分は今度の名古屋見物の興味の中心を此の

踊りに置く。

料理は成程うまい。自分の鈍い舌にも、東京の強い味でなく、京都の淡い味でなく、濃厚といふのも當るまいが、まづ婉倭な味舌に媚びつく味といつたものだと思つた。

座の亂れた頃、小山氏が三味線弾を連れて来て、自慢の歌澤を聞かせた、賄征伐の撰手と歌澤、二つの點の間には餘程の距離がある。其の距離を此人は一足飛びに越したのだらうか、それとも一步步に埋めて行つたのだらうか、などと考へてる間に、片方では、年輩の上遠野氏が、胸毛の邊まで眞赤になつて、障子に寄りかゝつたまゝ、お國名物の秋田甚句を二三番、さびた聲に蠻味

を交へて聞かせた、是れには一同が喝采する。老武者が久しぶりに若返つての歡待ぶりだと思つた。

着物は先に送らせ借浴衣のまゝ、車に揺られて、酔つた肌を一抔に風に吹せつゝ、宿に歸つたのが十二時頃であつた。明日はもう伊勢へ立たねばならぬ。忙しいことだと思ひながら寢に就く。

繪團扇に鳴海絞の香かな

(完)

幻滅の一日

(一)

奈良の大佛、奈良潰、奈良人形と名物の多い中には、今流行つてゐる浪花節の奈良丸も勿論土地の誇りの一つだと云ふ。この雑誌店などを覗くと、奈良丸講演集といふのが目立ち易い場所に飾つてあつて、同人の語物を速記した活版刷の小冊子である、之れは京阪の書店にも折々出てゐる。そして店番の小僧などが、暇

のときには、その中の一節を、いきみ聲を殺して朗誦してゐるこ
とがある。

奈良では之れも名物の刃物店が春日神社の横あたりに軒を並べ
てゐる。或日の午後であつた、その取りつきの一軒で、構へも可
なり大きい家の近くまで來ると、ちやうど通行人の斷え間で、あ
たりは森閑としてゐるが、斜に秋の日の射し入つた店先から、變
な聲が聞えて來る。何の氣なしに覗き込んで通ると、店の手代ら
しいのが、下駄をつつかけたまゝ、店の框に腰をかけて一心に『奈
良丸講演集』を朗讀してゐる。見れば當世風の若い男で、それが
浪花節をやつたからと言つて、別に氣にとめる程の事でも無いか

ら、其のまゝ通り過ぎやうとすると、私を見つけた其の男は、い
きなり『講演集』を投げ出し、入口に飛んで出て、くの字なりに腰
を曲げ、右の手を伸べて自分の横手後の方を指しながら、底力の
あるいかめしい口調で熱心に辯じはじめた。あとさきは忘れたが
「え、手前は三條小鍛冶何近、刃劔刃物類一切の御用を承りま
す。ちよつと寄つて御覽になるだけはお差支ございません。御
覽だけを願います。手前も祖先が打ちました名刀、残らずあれ
に陳列してございます。新刀古刀、色々お目にかけます。切味の
ところも御覽に入れます。たゞ御覽になるだけでもよろしうござ
います。」

といふやうな趣意で、その滑な、型に入つたところは淺草の居合拔を連想するが、聲柄は若いに似ず錆のある、野太い響を持つて下品な、しかし人を脅す力のあるものであつた。

いかさま古い店と見えて、木柱も黒びかりがしてゐる。奥の薄暗い邊に刀掛などがあつて、一筋流れ込んだ秋の日光がそこに漂ふ陰影を僅に破つてゐる。むかし街道の上り下りに立よつた田舎の武家たちが、あの中で澄み切つた秋の水のやうな刀身を抜きさくばめ、憧憬の眼を輝かしながら鍰元から見上げ見おろしてゐたかと思ふと、覺えず足が止まつて、其の家の前に立つた。すると手代は占めたといふ風に座敷へかけ上り、手早く奥から品物を持ち

出して來たが、上り口に伏せてあつた『奈良丸講演集』を見事に二三間蹶飛ばした。書物は一直線に飛んで來て、私の立つてゐる足元に落ちた。今度は抱へてゐた品物を投げるやうに下に置いて、先とは別人かと思はれるほど優しい聲で、

「是はどうも」。

とあはて、降りて來た手代の白い額を見ると、私はぶツと吹き出したくなつたが、何だか氣の毒な氣がして、黙つて其の書物を拾つてやつたまゝ、すたゝと逃げるやうに通りぬけて了つた。手代も、さすがに二度とは刀を見よと言はなかつた。

その先幾軒か同じやうな店の前を過ぎて、神社から三條の通りの方へ來ると、町の取りつきがだら／＼とした降坂になる。其右手には高く興福寺の五重の塔が見えて、左手に降り込んだ所が猿澤の池である。猿澤の池は奈良でも感じのよい場所の一つだが併し大した景色があるのではない、たゞ何となし、いゝ感じのする所である。はじめて此の土地へ這入つて來て殺風景な停車場通りを出はづれると、ぱつと開いたやうな明るい中に、一方高手に塔を見ながら、一方この池の水が柳の木の間から鈍色に光つて見え

る。むかし一人の采女が寵の衰へたのを嘆いて身を投げたといふその采女の寝くれた髪に似た柳の枝が、時々ゆらり／＼と物憂さうに揺れて半ば黄色になつた葉が一つ二つづゝ散つて行く。縁におり立つて見わたすと、三町ばかりの周圍はぐるりと道でかこまれて、其の側がすぐ人家である。それでゐて、じつと眺めてゐると日の永いやうな、のびやかな氣持になる。この中で死んだ采女の死姿はどんなに美しかつたらうと思はれる。そのうちに少し冷い風が吹いて通つた。柳の葉がばら／＼と池の上に落ちて、鯉が浮いて來る。頭を撫でて垂れかゝる枝を、指先に絡んで引つぱつて見ると、今度はとめどもなく黄ばんだ葉が

散つた。池の縁を一めぐりして、高手の往來へあがり、櫻の樹の
 并んだ間々に木の切株をいくつも据えてベンチの代りにしたのに
 腰をおろすと、池はすぐ眼の下に見える。そこからまた暫く眺め
 てゐた。柳の枝もやはり時々ゆらいでゐる。水の面にもかすかな
 漣波が走つてゐる。私の心にもどかな中にうつすりと物哀しい
 愁の影が滲んでゐた。

二つ三つ隔てた隣の切株を見ると、頬の白ちやけた、灰色の髪
 のそけた婆さんが一人、池の方に背を向けて腰をかけてゐる。
 何ともいへぬむづかしい顔をして窪んだ眼をじつとつぶり、口は
 時々つぶやくやうに動いてはまた固く結んでしまふ。うか／＼と

往來をあるいてゐる人々とはまるで違つて何かの暗示のためには
 つりと茲に据えられた彫像かと思はれる様子をしてゐる。ちやう
 ど吾々が田舎道のあるいてゐて、無名の彫刻師が刻んだ飄逸な石
 佛や神人獣の混合した奇怪な石像やを路傍に見たとき、まるで類
 のかはつた表情に打たれて不思議な驚きを感じるのと同じ象徴
 的な婆さんである。

私は神秘なものをでも見る氣持で、つく／＼其の方を見てゐる
 と、婆さんはやがておもむろに目をあいて、袂から何か取り出し
 た。そして端からかいては喰ひはじめた。見れば紙に包んだ握飯
 であつた。そこに私の幻想は破れてしまつた。

併し婆さんは其の握り飯を半分も喰べたころ、残りをもた紙に包んで袂に入れた。そしてまた元のやうに眼をねむつて瞑想しはじめた。其の様子があまりに物々しいので、私は傍へ行つて話しかけて見た。すると婆さんは、待つてゐたといふ風に愚痴をこぼしはじめた。すぐ下の町の料理店に奉公している娘に會ひに來たが、娘がろくく口も利かないで冷遇したといふのである。あの特色のある表情がこれだけの愚痴ではつまらない。やつぱり象徴は象徴のまゝにして、手をつけないうで置く方がよかつた。私はだまされたやうな氣がして、つまらなく町へ下つて行つた。

(三)

婆さんの話した料理店は此の大通りにある。料理店とは言ひながら、安旅籠兼帯で、かしはも天ぷらも料理も一緒にやる店である。其の前まで來て私はふと上つて見る氣になつた。遅れた晝食をそこで濟さうと思つたからである。

安普請の二階で、天井の低い、廣告びらで裝飾せられた一室に通ると、案内して來た女中が、斯ういふ家に特有なはずはな調子で訛を聞いて行つた。私は直覺的にその女中がさきの婆さんの娘だと思つた。まだ二十にはなつてゐないだらう、顔はちよつと愛

くるしいが、小柄のちよびくとした女である。入口の戸の蔭から顔を出して、ぼんやり外を眺めながら心は遠くにあるやうな眼つきをしてゐたのが、客と見てあはて、二階へ駆けあがつたのである。

誂への品を運んで、瓦斯の火に鍋をかけて、かしはを煮たり酒の酌をしたりしながら、女はぞんざいな言葉つきで私が問ふだけの事を答へた。

生れは能登のもので、今こそこんな見すばらしい身になつてゐるが、國では舞妓で賣つた事もあるといふ。言つて過去の華やかな夢を追ふやうな目附をした。それが十六の歳に大阪へ出た。ど

うして大阪へ出だかか問ふと、女は笑つて首を傾げたまゝ答へをしない。他の事を言つてごまかして了ふ。大阪へ出てからは□□病院といふ可ふり名の知れた病院に這入つて看護婦見習になつて一年ばかり居たといふ。それが或る春の夜、いつも二人づゝ寝る筈の宿直部屋に自分一人、電燈を消して寝てゐると、仕切のカーテンをまくつて、すうつと忍び込んだものがある。女はびつくりして刎ね起きると、一番に電燈をねぢた。すると自分の床のすぐそばに、黒い上着を被た、色の白い、髯の濃い副院長がちよこりとかしこまつてゐた。副院長は何か勝手の違つた様子で、眼をばちくさせながら見まはしてゐたが

「やあ、寢ぼろけてとんだ所へ這入つて来た」

と言ひながらこそくくと出て行つてしまつた。副院長でさへあんな様をするのだものと、それきり其の病院がいやになつて、とう／＼此の土地へ來ることになつたのである。では此の土地へはど／＼うして流れて來た？と聞くと、それも答へないで、首をかしげて笑つて見せた。

「さつきおつ母さんが來たらう？あれはどうしたのだ？お前が親不孝だといつて怒つてゐたよ」

と最後の問をかけると、女は不思議さうに私を見つめて、心持顔を赤め、

「どうして？あれがおつ母さんなものか。あれはほんとのおつ母さんぢやない。うるさいから追ひ返してやつた」

ははと笑ひすて、立つて行つて了つた。そしてそれきり上つて來なかつた。手をたゝいて茶の催促をすると、十三四の小娘があがつて來る。

(四)

其のうち、明け放した一間を隔て、あちらの方には、もう立ちかゝつてゐるらしい二人づれの客があつて、話が十分聲高にな

つてゐる。

「な、君、あの佐川を知つてお出でせう？ 縣會議員の」

「〇〇郡の佐川さんですか、知つてをりますよ、どうして、あれは中々の利者です」

「さうとも、どうして〜。佐川がうんと言へば、あんだ、〇〇一郡はみんなついて来るにきまつてゐます。あれは恐らい勢力なものです。それがあんだ、俺の親類ですが！ 俺の妻の里と縁ついきになつてをるが！

「さうですか、それは〜」

「だがら君のやうな着實な資本家が、あれをうまく抱き込んで利

用さへすれば、どんな仕事でも出来るのですよ」

「なるほど〜」

「俺もこの前の選挙にはうんとあれを助けてやるしな、それで、もう、今では俺の言ふことなら何でも聞くというて居ます。俺とは利害をすべて一にして、協同一致しやうといふ約束がちやんと出来てをります」

「結構な事ですな」

「それから、それ、△△郡の川井な、あれがまた大へんな勢力です。△△郡の川井、御存じでせう？」

「知つてをりますとも、副議長で」

「それは、あんた、あれ一人で縣會は掻きまはしてゐるやうなものですぞ。あれを副議長にするには随分骨を居つて、殆んど私ひとりで奔走しましたよ。それ以來、あれも、もうすつかり私には參つてしまつてな、私のためなら何でもしやうといふ。まあ、さう何でもして呉れいでもよいから、今に私が大に君に頼むから其のときうんと骨を折つて呉れい。さうすれば、君にもつまり儲けさせてやるし、私も儲けるのだから、誰の爲めといふことはない、みんな自分のためになるのだと、さう言うて別れたのですよ」

「なるほどね」

「そんな風でな、あれとも將來は全く利害を一にして、協同一致

で行動しやうといふ約束が結んであります。君も今度の事業には是非川井を賛成させないと嘘ですぞ。あれがうんとさへ言へば縣會はどうにでもなる。」

「いかにも〜」

「川井と私とは、極もう、ほんの親友でな、兄弟よりも仲よしですぞ」

階段口へ立ちあらはれた二人を見ると、先に立つたのは五十恰好の太つた洋服男で、一人はや、年下の二重マントを着た地主風の男である。洋服の方がちよつと下りかけてまた立ちもどり、一方の肩に手をかけて、

「でな、川井と私とは斯ういふ約束までしたのさ。それ、私の家の母が、もう長いこと思うてをりますぢやろ？もう、いつ死ぬかも知れませんが、其の時は新聞の廣告に、黒梓で母何々儀さ、養生相叶はず何月何日死去 仕候間、此段辱知諸君に謹告仕候以上さ、追て葬送の儀は、何日午前第何時自宅出棺云々として其のあとへ持つて来て、男、初瀬英十、親戚佐川新十郎、其のほかずつと并べて、其の次へは、友人として、川井正義と書かうといふことに、ちやんと極めてあるのですぞ。それは、もう、川井と私とはそれくらゐ親密な友人でな。君もいよく、今度の事業で懇親を結ぶことになれば、其の次へ名を并べることにして下さい」

「それはもう、勿論……」

言ひながら二人はおりて行つた。私も勘定をすませて、二人の跡を追ふやうにして店を出た。さつきの女は、また戸口の柱にもたれて、同じ目つきで、當もない空を眺めて居た。

書卓の上

今朝もテーブルに向つて腰かけたまゝ、懐手をして二時間以上ぼんやりしてゐた。何をする氣も出ない。かたはらの臺の上に取り散してある新刊の雑誌や書籍を、一つ二つ引き出して明けて見たが、一向に面白くない。またもとの所へ投げ戻して、まじくしてゐると、手は自然とまた懐に這入る。内懐で組み合はせた其の手が、シャツの上から汗ばんで来て、いやな氣持がする。片手

だけまた出して、テーブルの上に乗せて見た。他人のやうに煙草でも吹かすのだつたら、成程こんな時に、此の手一つぐらゐる持てあつかはずに濟むだらうと思つた。

テーブルの板の冷たさが、熱した掌に快よく感じる。じつと其の手を見てゐると、窓に曇り日の薄らさむい風が、かすかな氣合に觸れて通る。やるせないやうに降り瀧いだ昨夜の雨を、今日につなぐ知らせかと思つた。あゝと言つて手を引くと、軽い身顛が一つ出た。

自分の使つてゐるテーブルは可なり大きい方だが、それがもう手元のところ方一尺四五寸位しか明いてゐないまで、色々の書物

や書いた物やで押し詰められて来た。つい二三日前までは、まだ
餘程明いてゐたのが、何時の間にか一列に積まれた書物は二列に
二列は三列にと殖えて、四方から主人を包圍して来る。それが讀
まなくてはならないで讀む書物、書かなくてはならないで書く原
稿、みんな義務の塊である。

本籍から抜き出された書物、棚から取り下された書物、圖書館
から借りて来た書物、その中には、もはや用務を果たして腦を抜
かれた蛙のやうに静まり返つて横はつてゐるものもあるし、次の何
曜日にはまた用がある筈だと待ち構へてゐる風なのや、取り出さ
れて以來一度も開かれないで悄氣てゐる風なのもある。が、何れ

に眼をとめて見ても、今の自分の心には何等の交渉も起こらない。
何等の活きた興味も刺戟されない。たゞ其等のもの、後に繋がつ
てゐる義務——囚人の脚に附いてゐる鎖のやうな義務が、鈍角な
重い刺戟を誘うて来る。

左手に堆く積んであるのは、重に學校の講義に必要な参考書で
ある。用のある箇所だけインデックスで抜き読みをした哲學書を
見ると、著者に對して相濟まんと思ふ。此の作だけは全部細讀し
てと思つたのが、時間の都合か何かで下半分は飛び読みで間に合
せて了つた文學書を見ると、あれで果たして遺憾のない批評が下
されるかと自分ながら面目ない心になる。

其の前の列の上の所を見ると、英國の學會や俱樂部の綱領などを書いた書物が載つてゐる。其の下にはアメリカの演劇學校の規則書、其の下はロンドン劇場史、是等は皆二三日前に某協會の規則書を英譯する必要があつて、參考に引つぱり出したものである。用が済んで了へば、もはや其の表題を讀むのさへ懶いと思ふ。まして手に取り上げて元の所へ納めに行かうといふ勇氣などは全く無い。そこへ抛り出したまゝである。

正面のところを見ると、近世英文學史の古い講義草稿で今は不用になつてゐるのと、ロンドンの圖書館で書き抜いた拔萃帖の、所々に紙きれを挿んだのが、一緒に重なつてゐる。是れは英國

劇の歴史と、劇に關する英語のテクニカル、タームスとの講義をする必要があつて、其の下調のために取り出したのが、其のまゝになつてゐるのだ。

其のすぐ側には、原稿の疊んだのや廣げたのが、十二三も積んである。手紙、葉書、印刷物などの古い、新しいのが、それと伍して堆をなしてゐる。此の原稿の中には別に期限の無いのもある。期限と言つた所で、もつと先方が頼み手で此方は好意で讀んで見やうといふのだから、是非何時までと厳しくは言はない。じわ／＼と迫つて来る。淡い義務の苦味である。併し中には學生の論文などで、疾くに見てやらなくてはならないのがある。學校

の研究もので、三四回やつたきり、何うしても跡をつゞける氣力
 の出ないうち、今年も、もうまた學年の終りに近づいて來たのが
 此等の原稿を見ると、鉛を胸にあてられるやうに心苦しく思ひ出
 される。

手紙にも返事を出さなくては濟まないのが、一二箇月もたつと
 束になるほど積もる。甚だしいのは一年も二年も打ち棄てゝある
 のがある。それでも何時かは義務を果たさうと思ふ心から、裂き
 すてもし得ない。斯んな手紙が五通や八通は何時でも残つてゐる
 ビジネスライクに三錢切手を封入して、禮を盡して、頼ない事情
 を打ちあけて、種々の事を問うたり、頼んだりして來る。然いふ

未見の田舎人の手紙杯には是非近事をやりたいと思ふのがある。
 それでゐて容易に書けない。愈々思ひ立つて、五通三通と古いの
 から片づけて行くと、其のうちまた妨げられる事があつて、それ
 なり、當分は中絶して了ふ。其のあひだにはまた次が支へて來る
 往復葉書などの、期限をすぎて空しく討死をしてゐるのも幾枚あ
 るか知れない。不義理だと思ふと、堪えられぬ不快の感が胸を
 衝く。一體少し氣を張つて筆まめにすれば、斯んな事は何でもな
 い。西洋人などには、朝起きて一時間なり半時間なりを、きちん
 と其の日の通信應答に宛てる習慣がある。それは自分も千萬承知
 だから、他人に説法する場合には其の通りの事も言つて聽かする

併し今の自分には、たゞそれだけの實行が容易な事でない。たゞそれだけのきつかけを作るのが大事なのである。是れを思ふと、世の中の事は必ずしも思想が一々實行に伴はなくとも、思想だけでも意味を成す場合がある。あるところではない、多數はそれで運轉して行く。ちやうど紙幣と金貨の關係のやうなものだ。大藏省か日本銀行か何處かに準備金塊が積んであるとさへ極れば、それを當にして、しまひには其の當も忘れて、たゞ空な紙切が、それみづから實價のあるやうに取扱はれて、次から次へと運轉されて行く。紙幣を握つた奴が一々それを銀行へ金貨と換算しに行つた日には騒ぎである。世間の思想家が、兎に角善いと思つた思想

を思想だけで廣げて行く。當人は必ずしも實行家でなくとも、必ず何處かで何等かの條件の下に實行されると信じさへすれば、其の信念が準備金貨になる。勿論時としてはこの準備金貨の無い濫發紙幣も思想界には交る。それが世間である。それでゐて、我々は、一方世間なみに空な思想を運轉しながら、一方にはそれが一々自分の手で實行の黄金にならぬと言つてもどかしがつてゐる。茲まで考へてゐると、取次のものが來客だといふ。ぼんやりとして書卓を立つた。立ち際に今一度見廻すと、そこち中一面に漲つた頽廢の空氣——義務に疲れ、義務に老ひ行くもの、頽廢の空氣が、書冊の香ひに交つて漂つてゐる。

故郷の父

私の故郷は石州であるが、東京に出てから彼れ是れもう二十餘年になる。其のあひだ、母の死んだ時の外は、一度もしみぐと歸省したことが無い。従つて故郷の記憶も、大かたは遠い淡い夢のやうになつて了つた。たゞ所々馬鹿に際立つてはつきり想ひ出せる部分がある。

私の十ばかりの頃は、一家が久佐といふ田舎に住んでゐた。家

は、四五十坪ばかりの前庭を取つて、藝州境への小街道に浴うた瓦葺の一軒家で、後は深い谿合になり、そこから可なり水嵩のあつた小川が横手をめぐつて流れてゐる。街道といつても、人通りは極めて稀であるが、其の道を挟んで、向ふには青田が廣がり、其の向ふは又山になつてゐる。

或る夏の夕暮であつた。夕食を済ませた後、家内中前の縁側にでて涼んでゐると、何處からか蝙蝠が一疋飛んで来て、軒のあたりを高く低く飛び廻はる。私や二人の弟やは總立になつて騒ぎ出した。すると、今まで晩酌の微酔顔をわざとむつかしきうにして煙草盆を前に控へ、煙を吹かして居た父が、だしぬけに立ち上つ

て、長押しに懸けてあつた檜の丸扱の一間棒を小腋にかゝへ、尻端折で跣足で飛び下りた。びつくりして見てみると、父は撃剣をやるやうな身構へと、氣合をかけるやうな掛聲とで、頻りに其の棒を扱いたり、水車のやうにくるく廻したり、門の恰好に構へたりしながら、蝙蝠を相手に棒使ひを始めた。棒と撃剣とは父がこんなに零落して以後の、唯一の自慢藝であつたのだ。

上になつたり下になつたりして、暫く相手になつてゐた蝙蝠は何時か飛び去つて了つたが、父は尙盛んに空に向つて獨りで棒を使つてゐる。其のうち日は段々暮れて、夕月の光が一杯にそこらを浸して來た。其の月影の下で、磨いた檜の棒が、稻妻のやうに

きら／＼と光る。母はほゝ笑みながらじつと見て居た。私は強い豪い父だと思ふと同時に、何だか其の猛烈な勢が、幼心に物凄くて、慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな氣持を覺えた。

父はやがて棒の手を收めて、汗を拭きに小川の縁へ降りて行く其のあとをぼんやり見送つてゐると、遙かの筋向ふに二軒并んで立つた農家の前で、据風呂の火の赤く燃え立つのが見えた。二人の弟は其のときもう母と一緒に蚊帳の中に這入つて居た。

今から考へると、父はあの時、心に佐々木巖柳の燕返しや、寶藏院の水月の槍の傳説なぞを縁り返して居たのだらう。其の父が

故郷で不慮の死を遂げてから、今年は七年である。

宅地

君、三四年見えない間に、私の宅ももう以前のやうでは無くなつたよ。君の言ふ墓地は、去年からかけて、すつかり取り拂はれて了つた。今は其跡が立流な宅地になつて、貸地の札が立つて居る。墓の跡では、鳥渡借り手があるまいと思つて居ると、早速此の春から一軒の住居を普請し始めたものがある。一二ヶ月のあひだに、それがすつかり出来上つて、鬚のある主人と、妻君に子供

二三人の一家が越して来た。墓地が何だといふ氣勢で、續いて隣地へ二軒ばかりも貸家を建て始めた。昨今その工事中で、毎日調子な金槌の音が騒しい。

此の勢ひなら、残つてゐる明地も、一年たゝぬ内に塞がつて了ふだらう。萬一よい借り手が附かなければ、地主の方で、そこら一面に粗末な棟割長屋を建て、二年か三年、たゞのやうな家賃で細民に貸して置く。さうすると段々人氣が染みて来て、墓跡だといふ感じが薄くなる。其のあとで上等の宅地に直すのたといふ。斯んな次第で、君が氣にして居た、墓地の杉の樹は、一本残らず切り倒され、其の中から吐き出してゐた重い、濕つた空氣は、

最早感じられなくなつた。あの空氣の中に居ると、全く凡てのものが静止して了つて、身動きをするのも懶くなる。ちやうど今日此の頃のやうに、梅雨名残の雨が根よく降り注ぐ午後など、書齋の窓から、ぼんやり向ふを眺めてゐると、一番高い杉の茂みに、鳥の雨宿りをしてゐるのが見えて来る。其の姿が如何にも物ぐさゝうであつた。そして私も其のまゝ三十分でも一時間でもじつとして居ることがあつた。

墓地の樹を切り始めたのは一昨年の暮からで、去年の今頃は、盛に墓を掘り起してゐた。墓石を引き倒す、臺石を崩す、穴を發きにかゝる。屈強な人足どもが多勢かゝつてやるのだから、見る

間に一間や二間は掘り下げる。棺に届くと、小さい鳶口と蜜柑箱の明いたのを持ち込み、骨を鳶口に引つけて明箱に詰めかへ新墓地へ送るのである。時としては瓶に這入つたのを掘り出すことがあつて、明瓶の赤く黒ずんだのが、十五六も、片端によせて水瓶を伏せたやうに并べてある。其の側には、瓶の缺らだの、頭骸骨の一部だの、脛の片割だのが、掻き集めてある。人足どもはいつも伏さつた瓶に腰をかけて辨當をつかつて居た。

君、今では、私の書齋から覘くと、高臺の崖が新しい煉瓦や白い房州石の築垣になつて、寺の跡から墓地にかけては、新しい開墾地のやうに、ひろくと地ならしが出来、乾いた明るい空氣が

夏の日光を顛はせて居る。君の氣にかゝるものは無くなつた。併し私はまた其の内何處かへ引き移らうと思つて居る。

一 夜

此の頃の癖で、毎朝三時ごろから眼がさめて眠られない。蚊帳越しに電燈をともし、枕元に置いた『諸時代の藝術』といふ書物を開いた。早稻田の図書館から持つて来て、暫く抛つて置いたものである。著者はメーリー、ガルシエといふ婦人で、昨年の著である。第一巻であるから、まだあとが出るのであらう。紀元前四千年頃のエジプトの藝術からローマ藝術の少し後のところ

迄を歴史的に叙したものが、要するに教科書程度から餘り多くは脱出してゐない。

事實の備忘録として鳥渡便利なといふ書物である。ところ／＼に挿んである論断も先づ平穩無事と言つてよい。昔ギリシアの繪畫は線と形とを主とした。色彩の味は極めて幼稚であつた。此の理ほギリシア瓶の繪を見ても分かる。色彩のフエーション、ブレンドンキングを解し始めた以後と以前とで古代と車世との區別があつて、といふやうな議論でつないであるのだ。少し讀むと興が薄くなつて、始めの方の序文などをめくつて見ると、餘白のカット代りにラスキンの語を抄したのが目についた。「大なる國民は彼等の

自傳を三種の原稿に書く。彼等が功業の書、彼等が言語の書、彼等が藝術の書、この三書は、何れの一つを読むにしても、他の二つを読まなければ領會することは出来ない。けれ共三者の中で全然信用するに足る唯一のものは第三の書である。一國民の事業は好運で成功することもある。一國民の言語は其の子孫中少數の天才者によつて偉大なるを得ることもある。たゞ其の藝術のみは、其民族の一般的才能と共通的同感とによつて成立する」といふのである。例によつて面白い言ひ表はし方である。メーリー、ガルシエ嬢の一卷の書物よりも、此一節の方が印銘が深い。藝術上の最大真理も最大疑問もラスキンの此語で包有することが出来る。

斯んな事を考へながら書物を投出して、眼を眠つてゐると、眼蓋を透して電燈の影の見えるのが邪魔になつて堪えられない。また明りを消した。じつとしてゐると、家の隅々から、色々な微な物音が聞こえて来る。

今朝また出かけて行く文藝協會の『人形の家』の稽古の事を思ひ出す。舞臺面の細かい事までが、あり〜と眼前に浮ぶ。男主人公のあの臺詞の間が何分あつたらう。あれを測つて置かなければ女主人公が衣裳を替へる時間が定まらない。實際の舞臺はあの椅子と椅子との距離がずつと狭い筈だから、あの動作は出来にくからう。今日は本當の寸法だけに綱でも張つてやらねば駄目だ。

前まへから來くる光線くわうせんといふ事ことも今日けふは一つ實地じつちに研究けんきうさせて置くこと
 を忘わすれちやならない。あの事ことも忘わすれてゐた、此この事ことも忘わすれてゐた
 と思おもひ出すと氣きばかり急せいて來くる。兎とかくする内に夜よが明あけた。
 起おきて見みると冷つめたい雨あめが降ふつてゐる。例れいによつて八時頃じごうから研究けんきう
 所しよへ出でかけた。稽古けいこは大體だいたいに於おいてもう固かたまりかけてゐるのだから、
 全體ぜんたいの味あじといふ事ことの研究けんきうと、部分ぶぶん々々の機き械か的てきな點てんなどを一
 歩ほ々々實演じつえん的に定さだめて行ゆく事こととが此この頃ころの重おもい課業くわげふである。今朝けさ
 寢ねてゐて考かんがへた通とほり、舞臺ぶたいの寸法すんぽうを道具だうぐが係けいの人ひとから決きめて貰もらつて
 臺灣系たいわんけいで區劃くわくをして見みることから始はじめた、舞臺係ぶたいがも技藝員ぎぎいんも總りうが
 入りである。

今日けふは午後ごごから特とくに兒役こやくの練習れんしゆがある、衣裳屋いしやうやも來るといふ。
 一日いちにちがりと腰こしを据すゑて晝食ちゆうじきをしやうとすると、○○○雜誌ざっしのY
 君くんが原稿げんかうの事ことでやつて來る。玄關げんくわんで立話たちわなしをして用ようをすますと、今こん
 度は○○新聞しんぶんのT君くんが約束やくそく通り尋ねて來る。應接室おうせつしつで二十分許ふんはかり
 談話だんわをして分わかれた。晝食ちゆうじきに取り寄よせた辨當べんだうかはりのライス、カ
 レーがもう冷つめたく固かたまつてゐる。それを無意味むいみに搔かき込みながら
 心こゝろは限りなく先さきの仕事しごとをくくと走はしつてゐると、隣となりの事務室じむしつでは
 ひつきり無しに電話でんわのベルが鳴なる、事務員じむいんが驅かけ廻まはる。坪内會長つひうちんちやう
 が見みえて東儀幹事とうぎかんじと接待せつたいの事ことで折合せうらあはが始はじまる。土肥君どひくんが池田君いけだくん
 と道具衣裳だうぐいしやうの事ことで話わしをしてゐる。

あはたゞしかつた半日の事を思ふと、總しめ高は藝術プラス事務の味である。静プラス動の味である。其の中に私の執着もある。

私の好きな文章

近頃では特別な興味を繋いで書を読むといふ事もないから、愛読の書又は文章というやうなものはない。従つて、好きな書を求むるとなれば勢ひ過去の記憶の中から探出して來なければならぬ。過去に讀んだ書物の中、今でも最も明白に記憶して居るのは、次に掲げた西鶴の文章などである。此等は一時頗る愛讀したもので今でもその名文たることは疑はない。

世にわりなきは情の道と源氏にも書殘せし。爰に石山寺の開帳
 とて都人袖をつらね、東山の櫻は捨物になして、行もかへるも
 是や此關越て見しに、大かたは今風の女出立、どれがひとり後
 世わきまへて參詣けるとはみえざりき。皆衣装くらべの姿自慢
 此心ざし觀音様もをかしかるべし。其頃おさんも茂右衛門つれ
 て御寺にまゐり、花は命にたとへていつ散べきもさだめがたし
 此浦山を又見る事のしれざれば、けふのおもひ出にと勢田より
 手くり舟をかりて、長橋の頼をかけても短は我々がたのしみと
 浪は枕のよこの山、あらはるゝまでの亂髪、物思ひせし貌ばせ

を、鏡の山も曇世に、鰐の御崎ののがれがたく堅田の舟よばひ
 も若やは京よりの追手かと、心玉も沈みて、ながらへて長柄山
 我年の程も爰にたとへて、都の富士二十にもたらすして、頓て
 消べき雪ならばと、幾度袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我
 もなるべき身の果ぞと、一しほに悲しく、龍燈のあがる時、白
 髯の宮所につきて神いのるにぞ、いと身のうへはかなし。

西鶴の五人女の一節、おさん茂右衛門が情を通じてから後の條
 である。今の自然態の文章から見れば、已にクラシカルなもので
 ある。巧緻に過ぎ、マンネリズムもある。テニハ抜もあるし「行

もかへるも是れや此の關越て見しに」などは、古い掛辭を使用して居る。けれど、これとても西鶴が自身韻文としての必要上から粉飾したものとしてみれば、また止を得ない事であらう。同じ韻文脈のものでも、平家物語や馬琴の諸作に比較すれば、厭味もなく、あか抜けもして居る。さすがは西鶴の老手である。また、西鶴の文調には一種のリズムをつけて行つては、また自身でそれを突崩して行くといふ事が行はれて居る。「……あらはるゝまでの亂髮、物思ひせし貌ばせ」の亂髮、貌ばせなどはその適例であらう更にこの文を内容から檢べて見ると有ゆる人生の義理道德を擲つたおさん茂右衛門の兩人が、止めがたく慕る戀愛に感溺してしま

つた後、續いて來る心淋しさ、わりなさ、悲しさといふものが、何所となく巧みに表現されて居る。「都の富士二十にもたらずして臆て消べき雪ならばと。幾度袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと、一しほに悲しく」所謂快樂の後のペンス乃至センチメンタリズム——即ちかれ西鶴に特有なる情味は、この數句の中にシンミリと描出されて居る。而もそれが説明でなしに、描かれて居る。猶ほ、始めの「東山の櫻は捨物になして」以下に於ては、實に西鶴のリリズムの根柢をなして居る冷たい皮肉を遺憾なく看取する事が出来る。たとへ、世の中に佛があらうと、神があらうと、所詮人生は色慾二道に支配されるものでは

ないか。「観音様もをかしかるべし」と軽くユモラスに笑つて言つた所に、かれの著しい面目も見え、その全人生觀が發現せられて居る。即ち、これを外形よりすれば西鶴の韻文的技術、内容よりすればその人生觀并びに情味がそれ／＼に見本となつて現れて居る。短文ながら、全西鶴の縮圖ともいふべき名文である。

ミロー、ヴェーナスの秘密

事は少しく舊聞に屬するし、且つ其の後の成行を知らないから確たる判断は出来ないが、去る頃のニローヨトクの新報に、パリのルーヴルにある夫の有名なヴェーナス女神の彫刻に關する重大な記事が出てゐた。若し是れが本當とすれば、ヨーロッパの美術界に取つては大事件である。世界の美術史上に一大發見を加へたことになる。

ヨーロッパの美術界で、女性を題にしたもので最も顯著なのは繪でイタリーのラファエルが筆を中心にした聖母像、彫刻でギリシヤのプラキシテレスが作を中心にしたヴキーナス像であらう。此の二つは、古代の畫家彫刻者が幾十百となく題材に取つて飽くを知らなかつたものであるが、其のヴキーナスの像について先づざつと説明して置くと。

ヴキーナスは人も知る如くギリシヤの神話中で最も波瀾に富んだ女神の一つで、戀の神、美色の神、歡樂の神、笑の神、肉的快乐の神である。ギリシヤ名で之れをアフロダイテーと呼び海洋の浪から生まれたとせられてゐる。天成の美色の上に、一種の魔

力を有してゐて、美麗の容色は益々加る許り、それが爲天の神々の間に種々な嫉妬騒ぎが生じ、ヴキーナスみづからも幾多の神々と關係して、父親の違つた子供を澤山生んだ。夫のキュピッドと言つて、戀の弓矢を携へてゐる兒神なども彼の女の子である。ドイツのヴキーナス山でタンホイゼルといふ樂手の騎士がヴキーナスと肉の歡樂に耽溺した中古の傳説は、ワグナーがオペラになつて人の知る通りである。要するにヴキーナスといふ名は戀、歡樂美色の標象である。

斯やうなヴキーナスであるから、ギリシヤで早くから彫刻の題に取られたのは固よりの事だが、茲に注意すべきことは、ギリシ

ヤの彫刻と言へば其の全盛期たる紀元前五世紀、フキデアスといふギリシヤ最大の名手を想ひ出す。然るにあれ程、普通になつたヴキーナスの像はフキデアスの作よりも一世紀後れた大彫刻家プラキシテレースの作の方が名高い。ヴキーナスの像といへばプラキシテレースを連想すること、恰もマドンナの像といへばラファエルを連想するやうなものである。

是れには種々の理由もあらうが、其の重要な一つは、成る評家も言つた如く、時尚の變遷である。紀前五世紀といへば所謂ペリクレーヌ時代でギリシヤの文明が正に満開の絶頂に達した時であるが、此の頃を代表するフキデアス等の藝術には、不思議に道徳

の殻が一皮つゝかゝつてゐる、それが次の四世紀頃から。デカダンになる端緒とでも言ふのか、一方に因襲道徳の皮を破ると共に、他方には肉の方面が漸く大膽に藝術と調和せんことを求めて來た。ヴキーナスの活動すべき時代となつたのである。此の變遷は最もよく女神像の服装の上にはあらはれて來た。

ギリシヤの彫刻と言へばすぐ裸體像を連想する人が多いが、其の全盛期たる紀前五世紀のものには、却つて裸體が少ない。あつても多くは男性であつて、女性の裸體は少ない。即ち女性が肉體を見はすといふことは殊に女神であつて見れば、威嚴を損する恐れがある。肉に對する羞恥の感が尙鋭敏であるから、大膽に裸體

の女神像を刻む勇氣が無かつた。此に於いてか此の期のヴキーナスは殆ど凡て緩衣を全身に纏うてゐる。又其の顔の表情の如きも端巖一方に傾いてゐる。然るに次世紀を代表するプラキシテレスになると、今まで着物を着てゐたヴキーナスが赤裸々になつて來る。此の時代が正にヴキーナスのヴキーナスたるを得る時代である。

プラキシテレスのヴキーナス像では最も有名なのがクニードスのヴキーナスといふので、小アジアのクニードス市にあつたもの、今は失はれて其の模造品がローマの法王宮にある、但し之れは腰から下半身を緩衣の彫り物で繕つてあつて、原形では無い。

原形は錢印に寫したのから發見せられて、全裸體である。其の圖を見るに、例の通り體を頸、胸、膝の三段で文を取り、右の手を臍下に垂れ、左の手に着物を掴んで居り。其の着物はだらりと垂れて瓶の口にかゝつてゐる。今湯に入らんとする所だといふ。顔面の無邪念にして而も僅に羞耻の氣を帯びながら自らの美色に満足した女神の歡樂の相に於いて、乃至肉體の曲線にあらはれた驚くべき生命に於いて、凡て此名手の手法を遺憾なく發揮してゐると稱せられる、昔其の町の一青年が、夜中此の像に近づいて戀慕の情を満たしたといふ逸話がある。またプラキシテレスが此の像と今一つ着物を纏つた像と二つ作つて、友人に何れか一つを選

び取れと言つたら、友人は裸體像を以て女神の威嚴を害するものとして着物を着た方を持つて行つたといふ話も傳つてゐる。所が西暦千八百二年に至つて、更に驚嘆すべきヴキーナス像がギリシヤ沖のミロー島から掘り出された、此の方は模造でなく、原作であるらしい上に、其の出來の見事なことは、從來のあらゆるヴキーナス像に比して拔群である。三千圓許りで購はれて、今ルーヴルの最貴重品の一となつてゐるミロー、ヴキーナスは即ちそれである。世界の古代彫刻の遺物中で、最も美しいものとして言はれてゐる。半身裸體で、兩手が缺けてゐる。又此の像は作者が今以て知れない。即ち此のヴキーナスには發掘以來作者が誰れ

であるか従つて何年代のものであるかと言ふことゝ、其の手が何にをしてゐたらうか、従つて何の分類に屬すべき像であるかといふことの二大疑問が斯界に残つてゐる。此の問題を論ずる爲には種々の著述も出來て、論難は今尙絶えず、疑問は今尙解けない。ミロー、ヴキーナスの秘密と呼ばれるのが是れである。今アメリカの新聞から紹介して見やうといふのは、此の秘密の一つが解けたといふ騒ぎなのである。

右の如くミロー、ヴキーナスは世にある女神像中の最高位に置かれるもので、嘗に女神像のみならず、凡ての古彫像中最美のものとする許す人が少くないのであるが、此の像の美は姿勢、全身

の釣合等の外、通例顔の表情、裸體の肉、下半身の緩衣の襞彫の
 三點から其の卓絶した技倆が認められる。顔の表情に紀前五世紀
 式の端嚴と其の後の様式である艶色と、つまり神的人的、若し
 くは靈的と肉のところが完全に調和せられて、生々とした個的な味が
 出て而もそれが獸的に墮らず、女神としての神々しさもあるとい
 ふ事に歸する。又其の裸體は肉の曲線が明に模型の域を脱して生
 きた肉を現はしてゐる。鏝で撫たやうなクラシカルなものでなく
 なつた。又その下半身の緩衣は襞の彫り方が遙にフキデアス時代
 の特絶した妙趣を髣髴させて、あれ程細かくは無いが、其の單純
 な線に複雑な襞や皺を自在に自然に刻み出し、硬ばつた所が無く

總て柔軟な線の具合など石に彫つたものとは思へない程である。
 凡そギリシヤの襞彫では、紀前五世紀のフキデアス等が作と推定
 せられて今イギリスの博物館に在るパーセノン宮の遺物の三女神
 像のそれが古今に獨歩すると稱せられるが、此ミロー、ヅキーナ
 スの衣襞も或る度までそれに較べて論せられる。たゞ此の作の缺
 點は全體の態度に一點不自然な所があつて、氣取つた、他處行の
 姿勢が見え、自然の生命を弱くしてゐることである。
 殊に面白いのは、半身に着物を着て陰部を隠してゐるといふ點
 から此の作の時代を推測する説で、前にも言つた如く、初は却つ
 て着物を着た像が多くて、プラキシテレース前後から全裸體が行

はれて来た。併し此の時代はまだそれが甚だしく肉刺戟を伴はず、作る者も観る者も無邪念で之れに接し得た、言はゞ肉體に對する感想が純潔單一であつたが、段々時代が進むと共に、其の底の矛盾した刺戟力が表面に出て来て一方に強く羞耻の感が伴ふやうになり、何等かの方法で其の肉刺戟の意義を和げる必要を感じて来た。此に於いて件の紀前五世紀式と四世紀式とを折衷して下半身にだけ着物を着せることにした。此意味からいへばミロー、ヅキーナスは何うしてもプラキシテレース以後、即ち紀前三世紀から一世紀頃までの間の作であらうといふ。其の癖半裸體時代から後の作を見ると、局部を隠してゐるに拘らず、其の緩衣から透け

る下半身の肉付とか顔面筋肉の表情とかに、女性のコケツトな一面は益々強く暗示され行つて、細工を施せば施すほど反對の結果になつた。つまり意識して隠さうとすればする程獸性の半面が皮肉に見はれて來るといふ一方の眞理を證據立てたものであらう。そこで斯んな來歴のある女神像の秘密か何う解けたと騒ぐのであるかといふに、時代の方は今以て分らない。始め座石の一片に彫刻者の名のやうなものを彫つたのが、像と共に掘り出されたが、有意か無意かでそれは紛失してしまひ、専らプラキシテレースの作だと稱してゐたのを、後の學者等が種々の點から研究を積んで、もつと後の作とまでは鑑定した。併し確たる年代と作者の

名とは今以て分らない。

両手で何をしてゐる姿勢かといふ問題が今度解けたといふのである。新聞によると去る頃ロンドンへ達したアゼンスからの報によると、ギリシヤのラコニア州で、圖らずもミローヴキーナスの模造と見える一女神像が掘り出された。是れによると、右の手に鏡を持ち左の手で着物を掴んでゐる。百年來甲論乙駁の難問題であつたものが、斯うなつて見ると、たわいも無くなる。すらくと分かることになつた。

從來の諸説の中には右の手で楯を膝に載せて持ち、それを鏡にしてゐる在來の傳統に従ふのが一番多く、左の手は着物を掴んで

るのであらうといふ説と、夫の美人競争に勝利を得て貰つた金の林檎を捧げてゐたといふ説、他人の肩に打ち懸けてゐたといふ説等がある。然るに今見る所では此等の何れでも無くて、右には鏡を持つてゐる。成程斯うして見ると今まで不自然で氣取つたやうに見えた首の姿勢は餘程自然になつて來る。併し鏡といふことに對しては有力な學者が反對してゐる。其の理由は、鏡を持つといふのが非常にコケツチツシユな態度であるから、此の像の他部の威嚴と釣り合はない。作者がよもそんな不調和な作意は立てなかつたらうといふのである。此の理由で今回掘り出したものなどもミローヴキーナスの模造とは信じ難いといふ。如何にも尤もな事

であるが、併し理屈といふものは案外穿ち過ぎてあり易いことがあるから何とも言へない。

要するに眞偽はもつと研究が進んでからでなくては分からないが、此の報道を事實とすれば、近頃有興味な美術史上の出来事である。報道が虚構であつたり、作品が偽作であつたりすればそれ迄であるが、兎に角彼の地の新聞では、専門家の意見を集めたりなどして、騒いでゐる。鏡のヅキーナスか楯のヅキーナスか、どちらでも可いやうなものゝ、そこが研究上の興味といふものであらう。

明治文學と徳川文學の交替

此の頃出版せられた『紅葉遺稿』を讀んで、久しぶりに、あの重くるしい文章の中に詰め込まれた江戸文學の遺響を味ふと共に胃を病んで瘦せざらばつた著者が、一步步に五體の亡び行く心細さの情を、讀んでゐて胸苦しくなるまでに強く感せさせられた終りの方には下らないのも載つてゐるが、日記類の中には矢張り活きた紅葉が髣髴としてゐる、或る意味に於いては却つて彼れの

他の著作よりも此の本地のまゝの眞實に、色々の意味で一層多くの味がある。

江戸文學の遺響といふ事から、溯つて徳川期末の文學を想ひ、是れが明治初期の文學に遺響を傳へて段々に消え行く跡を考へて見た。徳川期末の文學、殊に小説は、明治初期の小説に三筋か四筋の際だつた影を曳きながら消えて行つたと思ふ。

文學史を見ると、何れの國に於いても、或る時代の文學には著しい教訓的の色を帯びたものゝ生ずることがある。小説にせよ劇にせよ、其の中に訓誡又は啓蒙の空氣の多分に漂つてゐる時代がある。而して此の教訓的な空氣の發生するにはおのづから一つの

源と二つの途がある。二つの途とは、内發と外發である。一つの源とは其の文藝の外に存在する社會的勢力である。此力が如何なる場合に於いても文藝に影を投げかける時、教訓的の空氣となつて見はれる。而して其の所謂社會的勢力とは大體に於いて宗教上の教權か國家上の政權かである。ヨーロッパ中世の文藝は、殆どすべて教權の影響から生ずる教訓的空氣を漂はせてゐた。日本に於いても、足利期の代表文學たる謠曲の如きは、佛教々權の力から發する此の香氣を中心としてゐる。

併し此等の場合に存在する教訓的氣分は、言はゞ内發的である畢竟するに文藝みづから種々の理由によつて先づ其の外在勢力に

没入して了ひ、之れと同體一心になつて、今は却つて之れを熱發向上の生命にしてゐるといふ有様に入り、而して後そこから自然にそれと相應する教訓的香氣を發して來る。故に内發的と名づけよ。

之れに反して、外發の途を経て來る教訓的傾向は外在勢力の壓迫から生ずる。従つて多くは中心に於いて藝術の生命と結合したものはなり得ない。或るものは文藝をたゞ假りに教訓の蔭に隠さうとするし、或るものは之れによつて全く藝術的生命を捨て了ふ。假面的になるか非藝術的になるかで以て、僅に其の教訓の空氣を保留する氣の毒な文藝である。

例へば之れを政權の場合に見る、就中其の政權が道德權にまで立ち入つて居る場合に於て、此の事例はしばしば起る。我が徳川期の文學は、初期からして此の種の教訓の色を帯びてゐた。切に言へば徳川政府又は儒教の教訓の聲を傳へてゐたのである。彼の最も奔放自由なるべき元祿期の近松、西鶴の文學ですら此の空氣を持つてゐた。けれども彼等に於いては、まださまで外からの壓迫の烈しからず、且つ自家の大手腕で巧に此の教訓的氣分を假面に用ひ、其の背後に廣大自由な藝術の天地を開拓することが出來た。

憫むべきは徳川期末の文學である。彼等の時代に及んでは、最

早教訓の蔭に眞の藝術の花は咲かなくなつた。假面の背後に潜むものは、卑しい動機に本づいた性欲の挑発か、然らずんば術學浮誇の架空談かになつて了つた。人情本の爲永春水、讀本の曲亭馬琴は即ち此の氣の毒な文學の代表者である。

馬琴の作に教訓的空氣の充滿してゐる事は言ふを待つまゐ。爲永春水は夫の淫書と言はるゝ『梅曆』の作者であるが、自ら狂訓亭と號する如く、其の劣情挑発の目的を偽善的な教訓の假面で糊塗しやうとしたものである。斯やうな順序で、兎も角も教訓的といふことが徳川期末の文學の一特色となつた。

而して此等の徳川期末文學は、初期と違ひ、主として江戸に發

達した。其の結果所謂江戸趣味の要素とも見るべきものが更に之れと并んで他の特色をなすに至つた、其の一つは洒落の趣味で、一は官能主義である。江戸趣味の洒落は複雑なものであるが、少くとも軽い皮肉と、滑稽又は茶番氣といふやうなものと、それ為例の通人氣質とが色々の度で結合したものと見てよい。初期の徳川文學にも、近松の滑稽、西鶴の皮肉はあつたが江戸に完成した洒落の趣味とは手障りを異にしてゐる。所謂洒落本を経て三馬一九に極まつたのが、後者の趣味である。而して又此の洒落の趣味は、他面に江戸の官能趣味と密に結合して存する。

江戸趣味の官能主義は、勿論三百年の文明に培はれたのだから

五官何れの方面にも相應の鋭敏な發達を遂げてゐるが、其の眼、すなはち色彩の上では衣裳に元祿の派手な色模様を遺たまゝ、段澁く細かくすんで來た事と、錦繪に、強くてそして明るいといふ見れば明るく、沈鬱と見れば沈鬱な、色調を見はした事との外、江戸の色彩趣味といふものにさしたる特色を認め得ない。昔の江戸の市街といふものを想像して見ても、また芝居の中を想像して見ても、江戸民族の色彩趣味が特に強く動いてゐた事實は少いと思ふ。又其の、耳すなはち音樂の上にならぬ程上方の淨瑠璃以外、長唄、常磐津、清元、新内乃至一層凝つたものが發達したには相違ないが、之れを以て直に江戸趣味が特に耳に於いて發

達してゐるとは言ひ得ない。江戸民族が音樂に於いて特殊の發達をしたとは見られないであらう。官能主義をなすまでには至つてゐない。

ひとり、口に於ける官能は江戸趣味の立派な特色として格外に發達したやうである。一方から言へば、江戸兒は喰ひ意地の張つた民族である。彼等の食味識は非常に精妙であつて、舌の感覺は二六時中、彼等の官能の中心として最も鋭敏に働いてゐた。

今一つの官能は性欲方面にあつた。之れは勿論強ちに江戸特有の趣味といふべきでなからうが、之れを前に言つた通人氣質や皮肉滑稽と連絡せしめて、此の種の官能に伴ふ羞耻隱蔽の情を消し

て了しまひ、言いはゞ艶つや消けしの、さびた、澁しぶい、露ろ骨こつな滑こつ稽けいな官くわん能のうにし
た所ところが其その特色とくしよくとなつた。オーデーシアス、センジュアリズムと
もいふべき味あじのものにして了しまつた。

一九の『膝粟毛』を見ると、如上にじやういみの意味いみでの性せい欲よく、食しょく味みの官くわん能のう
主義しゆぎと茶番ちやはん的な洒落しやれ趣味しゆみとの結けつ合がふは最もつとも明あきらかに讀よまれる。半産はんさんで
死しんだ婦人ふじんを誤あやまつて倒さかさまに棺桶くわんをけいを入いれた滑稽こつけいや、先まづ食膳しょくぜんの椀わん
の身み、平ひらの中なかを詮せい鑿さくする趣味しゆみが得意とくいに描ゑがかれてゐる。

以上いじやうの如ごとき状態じやうたいで、馬琴ばきん等に代だい表へうせられる教訓けうくん的てき傾向けいかうと、一九、
三馬はら等に代だい表へうせられる洒落しやれ趣味しゆみ及および官能くわんのう主義しゆぎは、徳川とくがわ期き末まつの文ぶん學がくの
高下かうげ二面めんを總括そうくわつするに足たる三特とく徴ちゆうであると信しんずるが、それが明めい治じ

初期しよきの文ぶん學がくに遺響あきやうを傳つたへて漸次ぜんじに消きえ行ゆかうとする。馬琴ばきんに見みえ
た教訓けうくん的てき氣分きぶんは縦たと其その形かたちは換かへても之これを明めい治じ文ぶん學がくの開祖かいそたる春はる
の舍やおぼろの諸作しよさくに或度あるどまで求もとめられる。而しかして後漸次のちぜんじ亡ほろび去さつ
て、今日こんにちの新文しんぶん學がくに此この氣分きぶんは殆ほとんど全まったく求もとめられなくなつた。洒
落れの趣味しゆみは饗庭あえはくわう篁村せんの『むら竹』諸篇しよへんに之これを遺のこして消きえ行ゆかんと
しつゝある。

江戸えどの官能くわんのう主義しゆぎは、其その露骨ろこつ滑稽こつけいな性欲せいよく趣味しゆみに於おいては、流石さすが
に今日こんにちの時勢じせいが其その存在そんざいを許ゆるさない。たゞ食味しょくみの方面ほうめんに於おいて其そ
の衣鉢えはちを傳つたへたものは故人にじん紅葉こうえふである。彼れかれの作さくに於おいて、また
日記類にっきるゐに於おいて是も活いきて精彩せいさいを放はなつ部分ぶぶんは食物しょくもつの條じょうであつて、

作者みづから口に唾液を湧かせながら書いたらうと想はれる程の妙がある。果然、彼れは胃を病んで死んだ。而して後、文壇また食味を描いて彼れに及ぶものが無い。斯くして徳川期末から直接傳襲したものが亡びて行く。固より食味の官能、性の官能、滑稽諷刺、教訓、みな更に新代のものとして生ずることあるは論を待ぬとしても、それらは既に別のものである。

題 言

眞 我

人間は自ら飾り自ら偽る動物である。眞我に達するの困難は、必ずしも無我に達する困難に劣るものでない。切に眞我の人を想望する。

冷氣ある個人、温氣ある個人、熱氣ある個人、要するに夫が眞實でさへあれば、何れでもよい。困難は其の冷を冷とし、温を温

とし、熱を熱として傳へる點にある。熱を以て冷を議し、冷を以て熱を議する謂れは無い。

今日の如き時世にあつては、百人寄れば百個格別の世界である。共通同感の頼みは如何にも果敢ない。各人はたゞ黙々として其の行かんとする所に行く外はない。

我等が思議言説の底には、たゞ黙の一字があるのみだ。それをお互に斯うして口を動かし筆を動かすといふのは、多分に外から強ひられる結果である。苦しいながらに絞り出す叫聲に外ならぬ。

植木屋

植木屋といふものはよく煙草を吹かして休むものだ。庭でも造らすると、二三分もそこの石や木をいぢくつて居るかと思ふと、軒先に腰を卸して、脚へ煙管をしながら、ぼかんとして庭を眺めてゐる。半時間でも一時間でも眺めて居る。併しあれが庭造りの人生である。石を動かしたり土を返したりして居る忙しい間が彼等の實行の世界で、脚煙管でさも閑さうに見える間の頭の中が彼等の宗教であり、哲學であり、文藝である。茲に人生の縮圖があると思れば、面白いでないか。

眞の生活

次の一年のあひだ、私は如何なる瞬間に於いて、眞の生活を經驗する機會に出會ふであらうか。一毫の見えも無い、偽りも無い恐れも、遠慮も、無理な緊張も、だらけた單調も無い、大地から生えぬいたやうな生活に、大膽な満足を味ふ機會が、せめて瞬間たりとも幾たびあり得るであらうか。我々は之に渴して居る。

生命

眞と妄、美と醜は、共にたゞ有と無、生と死、の別名である。生命のシムボルは美となり、死のシムボルは醜となる。生命を味はんとする心が、美の要求である。

對句哲學

理想を視てゐる心は宗教である。
理想を尋ねてゐる心は藝術である。
彼れは夢幻であり、
此れは事實である。

攝取せられた満足と感謝とから宗教が生まれ、
 求めて得ざる不満と絶叫とから藝術が生まれる。
 昔の藝術は宗教の下風に立ち。
 今の宗教は藝術の下風に立つ。

藝術の底には常に真理の認識が一粒のダイヤモンドの如く埋んである。

之れを感情に求めれば、唯はつと思ふ驚きである。
 之れを智識に求めれば、終に窮極する所を知らない。
 畢竟千古不填の深淵を認めたのである。

即 興

『人形の家』開演の第一日には招待客が多かつた。ノラとヘルマ

相手が犠牲になつて聽いてゐると思へば、話すのがいやになる。
 自分が犠牲になつて合槌を打たねばならぬ對話は尙いやである。

犠牲を拂はせても、犠牲を拂つても、何とも感じないやうに神
 經を馴らすのが世渡りの道である。

一との對決以後になつて笑ふ人は殆ど無かつた。

第二日からは大多数が普通の會員であつた。其の中には又傳手の勧誘を受けて義理に入會したやうな見物も可なりあつたらう。踊りのお浚へを見に行く心持で來たものも勿論あつたらう。ノラがヘルマーに對して、話したい事が澤山あるから坐つて下さい、といへばげら〜と笑ふ。私はあなたの前で藝當をしてゐたのですよと、言へばげら〜と笑ふ。何よりも第一に私は人間です、と言へばげら〜と笑ふ。斯ういふ見物が二三分はあつた。さうかと思ふと、すぐ其隣席では、若い奥さん連で、急所々にそつと涙をふくのも見られた。年をとつた婦人では、あんな女が本當に居るでせうか、とさゝやいて居るのもあつた。

デューゼ及サラ、ベルナールのマグダ

ズーダーマンみづからも、デューゼのマグダを見なかつたら、自分がどんな風に書いたのだから知らなかつたかも知れない。デューゼのマグダを見たら、前に見たサラ、ベルナールのは記憶から消え失せて了つた。もつとも貴婦人訪問の場と始めて牧師と話して大笑する場とはサラの方がよかつた。

今一つ印象を残してゐるのは、ケラーを戸外へ逐ひ出さうとす

る場で、齒を喰ひしぱり虎のやうな唸り聲をする得意の藝である併しデューゼはそれに比べて如何に單純に、如何にいきくと、如何に意味深く、あの言ふべからざる侮蔑心の閃きを唯一句に現はし得たことよ。此第三幕の終りに於ける時ほど英國の見物が魂を奪はれて了つた例は嘗て見たことが無い。(ウキリアム、アーチヤー氏)

沈黙の藝

あらゆる存在の原始と終極とは沈黙である。それが展開して動

作となり、更に展開して言葉となる。言葉は表現の頂點を示すものであると共に、最も多く深奥な根本存在と遠ざかつてゐる。

俳優の技藝を見るに、言葉の表情は第一歩である。動作の表情は第二歩である。沈黙の表情は第三步である。完全な沈黙の表情に達した瞬間は最も深い意義を發揮して来る。

チエスタトンとショー

十一月二十二日、夜半ペンを握つたまま、呻吟してゐる、題言など、書けさうな気分は湧いて來ない。頭の底が微温を帯びた鉛の

板で張りつめられたやうである。

チエスタトン氏はロンドン兒を以て誇りとしてゐる人である。

其のユーモアもたしかにコクニー式だ。廣く言へば英國式だ。「成功術の書は書物を書くことにすら成功し得ない手合によつて書かれる。第一世の中に成功なぞといふ事はない筈だ。成功とは唯有るといふ事に過ぎない。富豪は富豪であるのが成功だし、驢馬は驢馬であるのが成功だ。生きてる人は生きる事に成功し、死人は自殺すれば成功する」など、言ふ所はとぼけてゐて、それでおとなしい所がある。其のチエスタトン氏が別の書物でシヨール氏を評すると、「トルストイもシヨールも戦争と戀愛が嫌ひだが、トルスト

イはそれ等が實際であることを嫌ひシヨールはそれが理想であることを嫌ふ。シヨールは戦争は構はないが戦争にあこがれるのが反對だ、彼れは戀は厭はないが、戀を戀することに反對だ。トルストイは一切戦争を断て、戀より遁よと叫ぶ。シヨールは、戦争はよいが戦争を讚美する歌はいけない、戀はよいが戀に魅せられるなと叫ぶ」といふ意味の事を言ふ。チエスタトン氏がシヨール氏を解する、其配偶がおもしろい。シヨール氏が英國人を罵るのを聞くと、「彼れは何をするにも主義を擔ぎ出す。愛國主義で君等と戦ひ事業主義で君等のものを盗み、帝國主義で君等を奴隷にし、男兒主義で君等に亂暴をする、彼は忠臣主義で國王を扶け共和主義で國王の頭を

刻ねる」是れはアイヤランド人たるシヨ一氏の滑稽である。

四十歳

二十歳が所有してゐるすべては Love である。

三十歳にはまだ其の色香は残つてゐる。併し肉の方がまじつて来る。最も花やかなのは功名の心である。

四十歳にはもう Love は無い。たゞ其の追憶がある、羨望がある、悔恨がある。功名の心にも、最早空想の花は咲かない。不安の影がさす。

Love と ambition の残軀！四十歳のすべてには臆病な打算の心が息をしてゐる。

四十歳に至つて、無邪氣を暗示する顔の筋肉が全く隠れて了ふ表情の何處かにふてぐしい、物凄線が浮び出て来る。呪ふべき四十歳よ。

二 途

言葉は最も具體的なものか最も抽象的なものか、最もおもしろい。中間のものは總てだれる。

藝術はこの二つの言葉の何れかを求めやうとしてゐる。
眞理は最も個々のものか最も統一的なものか、最も正しい。
哲學はこの二様の眞理の何れかを假定して立たうとする。

田舎の友人

——君、田舎に老い行く寂しさとはもつとももの事ながら、せめて斯う思ひ直して見給へ。我等都會に住むものは、却つて都會の眞の生活を味ふことの出来ないものである。それに對する感受神經が鈍くなつてゐる。また家庭がそこにあり、職業がそこにあつ

て見ると、それらの周圍が到底自由な夢の世界に這入ることを許さない。また旅の心で人生を味はふ、あの甘い淋しさは都會の常住者には得られない。また、即いてゐては都會も散文的になつて了ふ。離れて理想化してゐればこそ、詩的である。

身は田舎にゐて都會にあこがれる心を失はない人、そんな人が年に一度か二度づゝ都會に出て、其の渴いた心と新鮮な感受性とで、心ゆくまで都會生活の杯を吸ひ乾して行く。家と職業との散文から去つて、都會の旅の詩に這入る。田舎にゐる君等こそ、まことは都會の生活を餓ゑたるものゝ如く味ひ得る、幸福な人である。

心の影

心の影に情の眞實はあつても事實の眞實はない。此の集の中の二三の歌が世間の一部から事實の記載であるかのやうに批難せられたのを私はかなしむ。

○

窓の外は、たゞ眞つくらな
夏の夜の八時すぎ。

雨のざんざとそゝぐ音、

その闇の中から

ひらりと抜けて来た一羽の蝶が

わびしく照す電燈の笠に、

すがりつき、すがりつき

濡れた羽を顫はす、

やるせない夏の夜の八時すぎ。

○

通り雨、通り雨、

戀の邪魔して通る雨、

それで思ひ切られる仲ぢやなし、

晴れて行け、晴れて行け

跡には濡れた青桐の

夕日の蔭のつばくらめ。



部屋の隅に据ゑた石膏像、

その上からふはりと

白い薄絹が覆うてある、

薄絹の襞のいろく、

青い瓦斯の光がそれを傳つて

流れたり淀んだり、

あるか無いかの夜風が

窓から手を出してなぶる、

柔かな襞の揺れ、

かすかに揉める光線の戯れ、

音もない書齋の夜の心

○

眞つ白な綿雲と青い空とを遮つて
 まがつみのやうに垂れ下つた灰色雲、
 じつと淀んで動かず、
 下には憂鬱の森が黒く、
 夏の薄日に蒸されてゐる
 森から吐き出す重い息は
 鈍い空気に流れ込んで

○

私の心臓を壓して来る、
 あゝ眞夏の午の沈黙、
 いつまで續く沈黙。
 どんよりとした薄曇り、
 霧に包まれた目白の森を
 今日も夢のやうに見てゐる。
 森の輪廓を破つて、

一本立つた煙突、
つぎ／＼に吐き出す煙の
いつまでも盡きぬ想ひ。

○

名も知らぬ信越線の停車場に小娘ひとり立つ雨の暮。
河原あれて月見草咲く夕ぐれを汽車の窓より見る漂泊の人。
上野を去る數驛にして眼に涙あり何とも知らぬ今日の心よ、
頬を打つ大粒の雨ひや／＼かに我が魂を貫くと見し。

青田煙り遠山黒く限りなく雨に籠りて憂き日暮れ行く。
旅にありし一筋町の夜を想ふたゞ赤かりし祭禮の灯よ。
なつかしき城下町なり衰へし軒にたゞしくあかり掛けたる。
廢滅の香ひを秘めて古濠に溜みたる水のゆるく漂ふ。
瘦畑に雑木林のつききたる其蔭に立つ頬の蒼き人。
旅人の秋に感じてうなだれし襟元さむし信濃路の風。
桔梗咲き女郎花咲き百合咲いて空淺黄なる信濃高原。
或時は二十の心或時は四十の心われ狂ほしく。
いたづらに此世を過ごすまでもなし我が身亡びよ天地崩れよ。
ともすればかたくななりし我心四十二にして微塵となりしか。

いつまでも斯くてあらんと願ふなり敗れたるわれ傷つける我。
 われ強しわれ大なりと思ふ時我が詩まことの詩を成さざりき。
 くれなゐに黄金に燃えて水色にさめてはまたも燃ゆる君かな。
 その花に香ありあらずと争ひて君まづ折りし河原撫子。
 かりそめに結びし紙の誓ひにも末をかけたたり住吉の宮。
 住吉の塔の東の窓に倚り人の世狭しと君かこちしか。
 住吉の赤き社と白き砂君がバラソル水色にして。
 むらさきの空いつとなく薄れ来て月しろくの秋の朝たち。
 長岡のいでゆの旅よござんなれ江馬の小四郎天野遠景。
 こしかたの三十年は長かりき沙漠を行きてオアシスを見ず。

秋風のさらく渡りばつた飛ぶ野にひとり立てば人の戀しき。
 メレアスがメリサンド戀ふそもくの不思議を思ひ思ひ寝たる夜。
 セリセット死にぬ哀れの妻なれど妻に代へたる戀もたふとし。
 こしかたの幕はとぢたり美しき夢のはじめのモンナワンナよ。

トルストイの藝術と思想

近代の文學者でトルストイ程明白に思想家と藝術家の兩面を用ひ分た人は無い。彼れは一面に於いてあの通りの藝術家であると共に、一面生れながらの人生哲學者であつた。一方に鋭く感じ具體的に描く人であると共に、一方深く考へて抽象的に分解する人である。此の二面の對立は、彼れの一代を横に見ても明、縦に見ても明である。「我が懺悔」を書いた五十歳を分水嶺にして、前半

生を純粹な藝術に捧げ後半生は態度を一變した哲學者——若し哲學者といふのが不穩當なら説教者——といふ風思想家になつたまた前期後期を通じての彼れの重なる作品——何となれば、彼れは其の自ら藝術を棄てると宣言した以後死ぬまでの半生涯に於いてすら、結局藝術家たるの一面を脱し切ることとは出来なかつたから——其の藝術的作品で殆ど毎篇目につく特色は、描寫の一面と人生觀の議論の一面とが繩のやうに縋ひ合はされてあることである。此の意味から、彼れの小説はいつでも一篇を二篇に分けることが出来る。一方に自然描寫や女性描寫や少年描寫が、獨得の感覺的でそして男性的な精彩を恣にして行くと共に、必ず其傍に

主人公其の他の重要な男性が、作者みづからの面影を髣髴させる態度で自家の人生觀を論究討議して行く。作は劃然として此の論究と描寫との両面に分かれるのが常である、蓋し作中に思想を求め、人生觀を求め哲學宗教を求めめるのは、近代藝術の已みがたい傾向である。藝術は其のまゝ哲學であり度い。近代の大なる藝術家で心の底に此の要求を持つて居ないものは殆ど無からう。トルストイはすなはち此の二元的要求を最も露骨に作中に見はしたものである。

トルストイは五十歳で懺悔して、自己革命を遂げた。前半生の彼れは肉體の人、自我の人であつた。革命後の彼れは、無我、博

愛、光明を理想とする人であつた。而して其の無我、博愛、光明の世界を現出せんための實行手段として説かれた晩年の説教そのものは却て博愛、光明に異存の無い筈の一派からすら批難せられた。此の奇なる現象は要するにトルストイが晩年の思想と實行との關係問題であつて是れだけでも頗る興味ある研究事項である。併し茲ではそれを批評しやうとするのでは無い。

彼れの作品を『幼年時代、少年時代及青年』の始から順に讀んで行くと、所謂自己革命が實は革命で無いことが分かる。トルストイは初めから晩年のやうな人であつた。其の少年時代からして既に自己分解、自己批評の非凡な内省力を示してゐる。其の當然

の結果として彼れは常に人生觀に頭を悩ます人であつた。また其頭の底は明な理想家光明家道德家であつた。併し同時にあの容貌が示してゐる如く、肉性の力も決して尋常以下では無かつた。其の結果若い間は随分罪の生活もしたらう。けれども其の罪は決して大膽な耽溺性のものでは無かつた。彼れは不圖惡處などへ踏み入つては、後で煩悶し追恨するといふ青年であつた。彼れが小説の中で疑ひ、惑ひ、論じ、而して最後に到達する結論はいつでも光明的宗教的のものである。彼れが前期生活の頂點と見るべき小説『アンナ、カレニナ』の副主人公でやがてトルストイの思想の權化と見るべきレヴキンが最後の結論は、「我等は自分の欲望の爲

に生きるのでは無かつた、神の爲に生きるのであつた。といふに歸する。信せよ、愛せよ、我を棄てよ。之れが解決である。即ち自己革命以後の代表作、『クロイチェル、ソナタ』の結末も、『復活』の結末も、全く之れに外ならない。よし、其の間に多少の展開進歩はあつても後期を通じて、彼れの根柢思想は同一といつてよい。ヨーロッパの評論家は、彼れをナイヒリストとするかビリーパーとするかに就いて論争してゐるが、信じて得る人たることは始から明白だと思ふ。たゞ彼れは、前期に於て此の思想を直ちに實行に移すの勇氣と方法とを有してゐなかつた。思想と實行と、「理想」と現實とを、靈肉二界に分けて、分裂し矛盾した生活を營んでゐ

たのである。彼れも亦た、我等と同じ凡人であつた。それを『我が懺悔』期以後、一元にしようといふ大願を發した。即ち實行を思想の方へ引き寄せて、肉を靈に攝取し盡さうとした。此の點から言へば此の時が彼れの回轉機たるは論を待たない。彼れの自己革命は、思想其のもの、一變で無くして、本來固有の思想で實行を統一しようとしたものに外ならない。而して此の變革が彼れ自身の上に何んな結果を呈し、また世間に對して何んな結果を及ぼしたか。言ひかへれば彼れが思想と實行との連結方法は何うであつたか。是れが重要な問題だと思ふのである。

藝術家としてのトルストイは『幼年時代少年時代及青年』に、

感じのよい清鮮な自然描寫、少しひねくれては居るが如何にも小供になつた少年描寫、深い人性解剖と純樸な客觀描寫の筆といふやうなものを味ひ、『コサツクス』のロシアの自然『セバストポールの戰場記を経て、『戦争と平和』に行けば、ナポレオンを中心にした普佛の大戦争を、ロシアの裏口から見た大パノラマが眼前に展開せられる。而して『アンナ、カレニナ』に作者の最も藝術らしい藝術を見ると思ふと彼れは態度一變の宣言をして、『闇の力』を書き、『クロイチエル、ソナタ』を書き、『復活』を書き、神學者となり、美學者となり、説教者となり、社會改良家となり、お伽噺作者となつて死んだ。『復活』を以て代表せられる後期の彼れの藝術

は、一言で言へばゲーテの『ファウスト』と相並んで贖罪の文學であるが此の事は他で述べたから、茲では藝術らしい藝術『アナカレニナ』に關して今少しく述べて見る。此の作は人も知る如く女にアンナとキチー、男にフロンスキーとレヴキンの四人を經とした長篇小説である。レヴキンといふ健實な青年がキチーといふ十八歳の娘に想をかける。娘は却つて交際場裡の花形たる若い男フロンスキーに意を寄せる、フロンスキーは既に夫ある美人アナと熱烈な戀に陥る。是れだけの事柄が、至當の發展をして、茲通後のアンナは種々複雑な心理から、終に所謂自己復讐を遂げて鐵道自殺をする。一旦絶望したレヴキンとキチーとは一緒になつ

て平和の生活に入る。要するにアンナの罪の生涯とレヴキンの煩悶疑惑の生涯とが此の作の二中心で、並行して全篇を貫いてゐる。一は描かれ、一は論せられ、一方は藝術であり、一方は哲學である。而して今若し此の中からアンナ物語のみを取り出して見れば此の方は情緒の濃い、人を酔はせるやうな藝術を成してゐる。小説らしい小説である。けれどもそれと同時に淺く古い。アンナも陳い淺い女、フロンスキーも其の通りの男で、其間に成り立つ悲劇も、陳い型をトルストイの新しい筆で埋めたといふに過ぎぬ。言はゞあり來りの哀れな物語で、何時誰れが讀んでも面白くはあるが、特に現代の我々に訴へるといふ深い新しみが無い。其の深

い新しきは他方のレヴキン物語で補はれてゐる。

作中のレヴキン物語は、此の篇の思想的興味を中心である。凄愴を極めた兄の死、戀の絶望等からして、レヴキンが心の底に顫へわたつた大煩悶は、彼れが終生の人生問題を呼び起こし、其のあひだに作者得意の田園其の他の素樸な境遇の活描寫が纏綿して本體は議論ながら、議論であることを忘れて讀んで行かせる力がある。たゞ、此の方の筋と、アンナ物語の筋と、二つの小説を強ひて一つに結び合されたやうな不満足之感を讀後に残すのは遺憾であるが、兎に角トルストイの作中最も藝術的なのは此小説である。夫の英國十九世紀末の大批評家マシウ、アーノルドは、丁度小

説家ヘンリンリー、ゼームスが英米批評家で最も早いツルゲーネフの知己である如く、最も早いトルストイの知己であるが、彼れは此の作を評して、藝術といふよりも、人生其のもの、一片であるといつた。なるほど當時の英國批評家の立場から言へば、此作の現實味は驚嘆に値したであらう。今日といへども現實でないとは決して言へない。併し今から見ればトルストイの作中最も圓みのある藝術らしい作たることは争はれまい。従つて藝術家としてのトルストイの長短が、此の作で最も多く窺はれるのは言ふまでもない。

國字の前途

今日の文明が新舊の過渡期だとは、何につけても人の謂ふ所である。勿論其通りに相違無い。それと同時に、過渡期は過渡期として一種の面目を有してゐるものが多い。過渡期といふ語が、直に醜惡、不便といふ語と同意味だとは必ずしも言ひ難い場合が多い。衣食住の事にしろ、趣味好尚の問題にしろ、後年全く過渡の狀態を脱し得た時から振りかへつて見たら、能くもあんな有様に

満足して生きて來たと驚く程かも知れないが、少くとも現在に於いては其の過渡的狀態に一種の満足もあれば趣味もあるものが多い。更に一步を進めて言へば、人生は長へに過渡期にあるものとも見られる。舊きを棄て新しきに就かうとする努力の裏面は、永久に新舊過渡の不安定不満足である。必ずしも今日のみが新舊の過渡期であるのでは無い。唯要點は程度問題にある。其の點から見て、今日は特に過渡的狀態が激しい。それと共にまた過渡そのもの、便利な點、面白い點も際立つて認められる筈である。人のよく言ふ如く、西洋の帽子を冠つて、日本の浴衣を引つかけるのは、成るほど過渡期の醜態とも見られるが、同時に過渡期の恩惠

も其の中にある。此の理は思想上の問題に於いて殊に重大な結果を生ずると思ふが、今こゝで言はうとするのは其の事ではない。斯やうな諸現象の中で、過渡期の弊害の一面の一面を最も明かに露出してゐるのは、國字問題である。漢字問題、假名問題、ローマ字問題にわたつて、實は現下の最も緊切な事件でありながら、案外に平穩無事で弊害を弊害のまゝに引きずつて行つてゐる。では、今のまゝで、もう一段落ついた積りで満足してゐるものがあるであらうかと言ふと、それは決して無い。便益の上から言つても、趣味の上から言つても、現在の日本の字面を結構だと言ひ得るものは天下に一人もあるまい。たい姑息に馴れて半無自覺に

やつてゐるに過ぎない。

併し、姑息な平穩無事の間、おのづから、自然の大潮が傾き流れて行く方向は極めて明白である。何ものを以てしても抗することの出来ない大勢は、徐々として其の歩を進めてゐる。其れは言ふまでも無く漢字が段々に棄てられて行くといふ事である。何が最後の文字になるかといふ事はまだ分らない。併し漢字が次第に減退して、差しあたり假名が其の空虚を埋めつゝあるといふ事は、何人も否むことの出来ない事實である。此の事實の前に立つて、區々たる争ひをするのは愚な話である。

此の頃教育界で屢々耳にするのは、學生の漢字の知識の減じた

といふ事である。私なども其の事實を常に目撃する。そして現在に處する途としては、それが其の學生に極めて不利であることを認め得るから、他の當事者と同じやうに、何とかして出来るだけ其の缺を補つて置いてやりたいと苦心する。けれ共其の効果は甚だ微弱なのが常である。是れは畢竟吾々はじめ眞に活きた心で教へる側の人には、根本に於いて既に漢字といふものに對する價值と尊重との心が失せてゐるからである。昔は文字そのものを神符と同じやうに見て、足にかけけるな、不淨に委てるなとまで教へた。此の心を推しひろめて學ぶ漢字であるから、單に字を記憶するに便利のみならず、種々精神上の興味も附隨して來た。併

し今日の智識程度の人で何うして漢字を教へ漢字を學ぶに右のやうな心持が起こり得やう。それは到底無益である。今日の吾々が漢字に對するのは、單に一種の道具としてである。而も眼前に將來の音字といふやうな一層便利な道具を眺めて居るのであるから、漢字はほんの一時の道具、當座の方便といふ以上に何等の價値をも感じ得ない。此の心で教へたり學んだりする漢字が昔と同じ効果を生じ得ないのは異しむに足らない。勿論漢字を教へ漢字を説く人の中には、心から昔ながらの尊敬を此字體に拂ひ、又は拂ふべく説く者もあらう。併しそれは今の吾々の眼中には置いて無い。要するに吾々は、漢字を一生懸命で教へたり習つたりする

氣持が無くなつたのである。此の根本の氣持が動かされない限り幾ら教育制度を更へても教科書を改めても、漢字漸亡の大勢は如何ともすべからざるものである。學生の漢字智識は日一日と衰へ荒んで行くに違ひない。たゞそれに代るべきものがまだ基礎を定めない。従つて亡びるもの、亡びた跡の不便は夥しい。此所に於いてか或者は無智な漢字を強ひて用ひやうとする爲に滑稽な結果に陥つたり、或者は強ひても亡び行かんとする漢字を引き留て、舊き力の袂にすがらうとする。所謂過渡期の弊害と混亂とは是れから生ずる。

近來世間の教育上の論者が、唯眼前の必要から、異口同音に、

如何にして學生の漢字知識を回復すべきかといふ事をのみ論じて其の根本に漢字は果たして回復すべきものなりやといふ問題の横はつてゐるのを閑却したやうに見える中で、『時事』の社説がひとり此の根本問題に溯り、同紙一流の立場から、痛快に之れを否定し去つたのは注目し値すると思ふ。

「幾ら學生の漢字智識が減退しやうが騒ぐには當らぬ。抛て置けそれが大勢である、決して悪いことの無い大勢である。」斯う言ひ去るのは別に何等の奇も無いが、而も幾多の準備を要する結論である。

元來私みづからが、漢字を多く使ふ方である。又漢字に伴ふ

漢語の趣味をも捨てない方である。而も自分ながら近年益々漢字を忘れることの多いに驚く。そして其の缺陷は假名で補はれてゐる。文字に縁の多い吾々ですらさうであるから、是れが、やがて世間一般の風潮であることは論を待たまい、此の勢で行けば、差しあたり此の缺を補ふ途としては、漢字の回復よりも、假名の利用法を確實にするのが教育上最も當然の施設である。例へば假名文の句讀の切りかた書きかたなどいふ事が最も手近な研究事項である。吾々が假名で充分の所にまで漢字を使ふのは、一つは句讀の不便な爲である。其の他斯ういふ事項は多いであらう。斯うして 先づ假名に移つて、それからローマ字に行くなり新字に行

くなり、假名に止るになりを決するといふ、十年前の漸進論が今日の實勢であるやうに見える。私は依然として幾多の漢字を使用せざるを得ない、又學生にも依然必要な限り漢字の知識を精確にせよと教へざるを得ない。而も私みづから漢字を忘れて行く、また理論としては漢字漸亡の大勢を認めざるを得ない矛盾である。

翻譯劇の事

〇〇兄足下、此の前お別れしたのは帝國座のマグダの舞臺裏であつたと記憶します。其の後かれこれ半年近くの今日、僕は頭の保養のため再び此の邊へ出て来て、奈良の對山樓の西日のさす一室から此一文を呈します。早稲田文學への御寄稿が延々になつてゐるのと同じく、僕の寄稿も今日まで延びくくになりました。東京の文藝壇も御覽の如くあまり變つた事がありません。劇につ

いて言つて見ても、もうそろそろ翻譯劇ばかりでもあるまい、日本ものが見たい、といふ要求は方々にあるやうだが、併し日本ものは容易に出さうにない。一幕物で新しい人々の作る氣分劇にはちらくくと影のさすやうなのが無いでもないが、あの種の劇を舞臺に上すには、やはり先づマーテルリンク物でも仕こなして見た上でなければ、俳優が堪へ得まいと思ふ。一方から言へば脚本はやはり舞臺に上らなければ作るに張合が無い。讀むだけでは讀者の方が身を入れて呉れない、だから出来るなら此等の新脚本も成るだけ多く舞臺にかけて見る機關がほしい。之は劇そのものよりも、作家を奨励し提醒するに必要である。けれどもまた一方に、

舞臺は浪費的な藝術機關である。其のために右の目的は容易に達せられない。何とかして此の中間を行く方策はなからうか。是れが今の演劇壇の識者側の念頭に往來する一問題である。

西洋物で既に彼の地で定評のあるものなら、之を十分にさへプロデュースすれば必ず相當の効果を收め得る。且つ俳優でさういふ新劇の手心をおぼえるには、西洋物が便利である。だから新しい俳優が社會劇の腕を練るには、先づ西洋のすぐれた社會劇から始めるがよい、氣分劇もさうである、新史劇もさうである。今は要するに翻譯劇によつて俳優が腕を練るべき時である。

文藝協會などと言ふと、まづ社會劇の上に經驗を重ねて來たの

だから、此の次日本劇にかゝるなら社會劇から始めるべきである併し社會劇として今すぐに演ずるには何の作がよいかと言はれると、結局もとの經濟問題浪費問題と衝突して來る。社會劇方面では殊に其候補者が乏しい、氣分劇の方に却つて監督者の見込一つでやつて見やうといふ作があるかも知れない。併しそれには俳優の方が不安である。やはり少くとも初め一度や二度はたしかかな定評のあるものをやつて、自分の腕で其作の定評まで届くか否かをとめた上でなくては、困難である。されば此の點では文藝協會などもそろゝ演じ難い氣分劇に其の指を染て行く必要がある。

新史劇に於ても同様である。日本の新史劇で今の程度のものをや

るよりは、眞しんに新あらしい形式精神けいしきせいしんで西洋せいやうの新史劇しんしげきをまづやつて見るのが得策とくさくである。そしてそれから日本にほんの眞しんの新史劇しんしげきを探さがし、それに這入はひるのが順序じゆんじよである。日本にほんの舊史劇きうしげきからすべり出た程度ていどの新史劇しげきでは、作さくとしても優技いうぎとしても大したものにならない。

斯かやうにして翻譯劇ほんやくげきは今いまのところ優技いうぎを練ねるものとして最も適もつと當たうだと信しんずるが、觀みる者ものの側がはから言いつたら何どうであらう。よく人ひとは西洋物せいやうものでは味あじが十分ぶんでないから日本物にほんものがほしいといふが、僕はくは此この説せつに疑うたがひを挿はさむものである。充分じゅうぶんに演えんじこなされた西洋物せいやうものと日本物ほんものとの間あひだに、吾々われくはさう大たいした味あじの厚薄こうはくを感かんずるであらうか。作さくと演出法えんしゆつぽうさへよければ、衣裳いしやう、動作どうさ、固有名詞こいうめいしの西洋せいやうであると

日本にほんであるとは、殆ほとんど問とはない迄まにコスモポリタンなのが今日こんにちの吾々われくの趣味しゆみではないか、勿論もちろん愛國的精神あいこくてきせいしんから言いへば日本にほんのものであつて欲ほしい、日本にほんにいゝものが産さんしたい、併ししながら實際じつさいの趣味しゆみの上うへから西洋物せいやうものでは堪たへられない、日本物にほんものでなくては補おぎなはれないといふ程ほどの強つよい要求えうきうを日本物にほんものに對たいして持つてゐるのであらうか此この種しゆの要求えうきうは却かへつて多數側たすうがはの人々ひとぐで、西洋せいやうの固有名詞こいうめいしや衣裳いしやうの邪魔じやまになる方面ほうめんに屢々しばしば起おこつて來くるやうである。上うへの方ほうでは、むしろ趣味しゆみといふよりも、愛國あいこく的てき若じやくしくは作者獎勵さくしやうれい的てきの意味いみに基もとづくのが多い、僕はくも其意味そのいみで一日いちにちも早はやく眞しんに藝術げいじゆ的てきな日本物ほんものの上場じやうちやうを望のぞむと共に、翻譯劇ほんやくげきが尙なほしばらくは日本にほんの劇壇げきだんを支配しはいすることの

已むを得ざる形勢である事をも承認せざるを得ない。そして可なり満足してそれらの翻譯劇を鑑賞し得るものであることをも自期せざるを得ない。

〇〇兄足下、これで當座の責を塞ぎます。其うち一夕の歡談を期してあとの事も申し上げます。

桐一葉の藝の印象

先年文藝協會で試演した際の外、自分は今度はじめて「桐一葉」を舞臺の上に見るのであるから、参考のためと思つて、十日目と十七日目に二度くり返して見た。前に不充分と思つたものが二度目にはすつかり調つて居た點なども多かつた。殊に二度目に自分の興味を集めたのは菊五郎の銀之丞を主にしたエピソードである。豊國神社前の場から、長廊下の場にかけて、銀之丞といふ人

物の點綴せられる限り、老木の茂みに鮮かな若緑の葛が斷續として懸つて居るやうな感じを與へる。殊に後の場、舞から、蜻蛉の死を聞くあたり、狂氣して女の幻を追うて、ふわくと煙の消えるやうに引つ込むまで、劇中第一の詩であると思ふ。阿呆から狂氣に移る變り目がはつきりせぬなどの非難も加へればあらうがそれは元來が餘程の困難であらうし、下手に角などを立てられると、あの微妙な味が荒らされて了ふかも知れぬ。兎に角自分は此一節を以て、近頃の歌舞伎劇に稀れな美しい藝の一つだと信ずる藝の中に巧に自然の息が通はせてあるだけ 何處か型にならず、固着しないで、いゝ氣持の所のあるのが新味である。此の上を望

めば、あそこは今すこしホロリとさせるまで見物を感じに入らせなくてはなるまい。併し之れは銀之丞よりも寧ろ周圍の誇大的な藝風との不調和が累をなすのかも知れない。之を思ふにつけても舞臺上の監督統一といふ事の必要が切に認められる。今後劇壇の實際問題の一として、此事は最も多く考究せらるべきものであらう。同じく若手連では猿之助の本村清藏と、吉右衛門の主膳の事を想ひ出す。猿之助の注進は、文句が型に入るやうに出来てゐるのを、新工風で、素で言ふのだから、そこに矛盾が残つたのは已むを得ぬとしても、たしかに新藝風の可能を豫示してゐる。よし抑揚に多少の習癖はまじつても、概して素直に若々しい氣分が流

動的ない、感じを與へる。たゞこゝでも周圍との不調和は言ふを待たぬ。吉右衛門の主膳も、馬の鼻づらにつかまるまでの藝に、多少の自由性が調味されてゐるかと思つたが、此の方はさして明な印象を留めなかつた。

要するに此等二三の若い人々は、其の若いといふ事に争ひ難い新光 明を持つてゐる。此處らで慢心したり固定したり腐敗したりさせないで、藝と共に頭の中を如何にもして修養させて見たいものだ。

劇全體としては、仁左衛門の且元、芝翫の淀君、羽左衛門の木村、この中でも木村はもう既にさして複雑な性格には出來てゐな

いやうだから、其の以下は勿論一通りの性格といふべく、稍複雑な正榮尼すら、松助の解釋でも一通りは出てゐると言つてよい。中心はやはり且元と淀君である。

元來此の劇は、男主人公の上に見はれた悲劇の動機が在來多數の史劇の如く花やかでなく、大阪城末路の動搖の空氣の中に於る知慮分別の悲劇とでもいふべき、質素な内攻的のものである點に新着意を有すること、又従つて且元の性格が從來の非凡性から平凡性に近づくと共に、深さ複雑さを増し、之れに對する淀君の性格も、あの通り複雑な眞の女性に描き出されたといふ點に新着意あること、又結末で主人公を埋没の中に残し、豊臣家衰亡の未來

を暗示のまゝにして細く筆を引き去つた點に新着意あること、此等を内容にして、形式は専ら舊劇の長所を集め用ひやうとした、新舊調和の試みから出來た作である。之が十五六年前の劇壇及文壇の一傾向であつたと共に、作者が當時の用意も此にあつたらうと察する。

而して此の新しい内面と舊い外面との統一は、主として且元と淀君の藝の上に現はれ、之れが基調になつて、他の諸人物の藝の調子も定められなくてはならぬ。然るに諸役の藝の調子を整調するなど、いふ事は、今の歌舞伎には殆ど全く望まれぬことであるから、勢ひ俳優の頭次第で、ばらばらの藝になるのは是非もない

此の意味で且元、淀君、重成と單獨に見れば、右の新しい幽微な内面の精神で、舊い誇大的な外面の臺詞や表情を誰れが最も多く征服し得たか、此の兩面を誰れが最もよく統一し得たかといふのが、主要の批評點である。而して芝翫の淀君に於いて此の距離が最も多く接近させられたといふのが、一般の見るところでまた妥當の見であらう。且元に於いては、内面の理解が不確實だといふ感を感じ起す。重成は舊いがまゝに單純にやつてのけたといふ感である。

演劇の保護

時節柄、文藝院の問題が何う展開するかは知らないが、假りに政府なり私人なりが文藝保護といふことを積極的にやつて見やうとする、而して其の保護が専ら金銭上の助力であると豫想すれば我等は如何なる案を提出しやうか。

たゞ漫然と貧乏な文藝家に金銭を給するといふのなら、受ける方でも餘り快くない場合があらう。仕給する方でも、利害は容易

に見定められないことが多い。保護といふことを絶對的に呪咀するのは一種の虚榮であり擬勢であつて、眞實の聲では無いと信ずるが、要は其の方策如何に存する。中にも個人の將來を擔保にして之れを保護する場合は、愈々此の困難が多くならう。單に過去の事業を目安として尉勞金又は賞金を贈るのなら困難は餘程減ずる、唯人選が面倒だといふに歸するが、是れは案外うまく行くかも知れない。

夫の懸賞案の如きは全く望の無い事である。全體眞面目な懸賞の時代はもう過ぎ去つたといつてよい。

それよりも最も緊急で且つ有効確的なのは演劇の保護である。

目下の我が文藝壇で、最も明白に物質上の保護を要するものは是れを措いて他にあるべしとも思へぬ。其の代り資金は稍々多分に入るかも知れぬが、筋道が如何にも明白である。凡そ藝術の發表方法中演劇ほど贅澤な金のかゝるものは無いと共に、其の効果の及ぶ所が最も平民的である。單に社會風教といふ如き立場にある者から見ても注意は却つて夫の小説などよりも先づ此の方に向かねばならぬ筈であるのに、保護問題が他の藝術には起つても此方面に起らないのは奇である。固より保護と言つても、脚本作家を保護せよといふのでもなければ、俳優を保護せよといふのでも無い、或種の演劇興行を保護するのである。つまり一般多數の見物

の來ない、收支の償はない劇を演じて見させることである。假りに茲に名脚本が出来たとしても、名俳優が見はれたとしても、それが文藝的に眞價のあるものなら、それだけ多く世俗には受けないに極まつてゐる。夫の善いものさへ出れば、見物は之に順應してついて來るといふ説は進んだ後の話である、取りつきは必ず其反對であらう、而うして演劇の起つと倒れるとは實に取りつきの難易にある。思ひ切つて進んだものを出さうとするには、取りつきから丸で一般には受けもしなければ、分かりすらしないものを行ふ覺悟でなくては無益だ。生中折衷の工風なぞして、多數趣味にもはまり、それで文藝的にもよいものを作らう演じやうなぞと

慾よくの深ふかいことを考かんがへるために墮だ落らくしたり失しつ敗ぱいしたりする劇げきが少すくく
 ないと我われ等らは考かんがへる。こんな仲なか間まのやり口くちも、出で來きれば一しゆ種しゆの方はう
 便べん機き關くわんとして面おも白しろい。我われ等らも嘗かつて演えん劇げきの第だい二に種しゆ第だい三さん種しゆといふこと
 を説といたことがある。けれ共ども劇げきの革かく新しんといふ見けん地ちからいふ時ときは斷だん
 じて之これが妙めう案あんでは無ない。それで無なければ成なり立たないからといふ絶ぜつ
 望ぼう的てきの意い味みが多た分ぶんに籠こもつてゐる。矢や張はり出で來きれば思おもひ切きつて今いまの
 世せ俗ぞくの演えん劇げき趣しゆ味みと懸けん絶ぜつしたものをやるに限かぎる。始はじめは面おも白しろく無ない
 もの、つまらないもの、譯わけの分わらなないもの、それが骨ほねを折をつて見み
 て行ゆく内うちに結けつ構こうなものと合が點てんせられるやうな劇げきを演えんじたい。新しん文ぶん
 藝げいの興おこり始はじめは常じょうにさうである。小せう説せつ然しかり、詩し歌か然しかり、今いまの我われが劇げき

壇だんも必かなず一ど度どは此この關せきを通とほり越こさなくてはならぬ。一ど度ど通とほり越こし
 て兎とも角かくも獨ひとり立たちが出で來きるだけの新しん見けん物ぶつが附つきさへすれば、跡あと
 は順じゆん潮てうになる。たゞじり／＼と何いつ時つともなく通とほり越こすか、一おも思おもひ
 に乘のり越こすかの問もん題だんである。此このまゝ、やつて行ゆく中うちには何いつ時つかは
 自し然ぜんの勢いきほひで通とほり越こしもされやうが、併しかしまだるつこい、心こころ細ほそいこ
 とだ。そこで何なんとかして一きよ舉ぎよに此この難なん關くわんを抜ぬく工く風ふうは無ないか。
 革かく新しんも何なんも實じつ行かうしないでは話はなしにならない、それかと言いつて、行やら
 うとすれば算そろ盤ばんが立たたない、經けい濟さい上じやうから先まづ崩くづれてしまふ。何なんと
 かして、損そんをしてよい芝し居いを演えんじて見みる工く風ふうは無ないかなあ。是こ
 れが演えん劇げきに關くわんする、我われ等ら念ねん頭とうの常じやう套たう語ごである。茲こゝに物ぶつ質しつ上じやうの保ほ護ご

が極めて適切のものとなる。初の内は所謂シレクト、フューにのみ分かる、従つて收支相償ふなどいふものでなく、損をするに極まつた劇を演ずる工風のつく迄は、とても目ざましい劇壇の革新は出来ない。眞に劇壇の爲を謀るものがあつたら、此の點に保護を與ふべきである。

翻つて其の保護方法を考へて見るに、從來あつた國立劇場などいふ案はもつと後の事であり。今は幸に小形のものでは有樂座も出來、大形のものではやがて帝國劇場も出來るのであるから、場所の設備はあれ丈でも澤山である。劇場建築の費用で以て演ずる劇そのものに金銭上の保護を與へる。そして観客も成るべく識者

招待の範圍を廣くすると共に一般觀客の入場にも、學生以上の新教育ある方面の爲に便宜を圖るがよい。而して又其の演ずる劇や俳優の選擇及び演じた結果の審査批評乃至賞典附與の方法等は即ち之を文藝院なり其他の特設團體に委託する。斯くの如くして始めて文藝保護の實が擧がると共に、劇が立派な文藝壇の一現象として活路を開き來たるであらう。我等は之を以て所謂文藝保護の最も急要な一つとする。

同時に文藝壇みづからは傑れた脚本を出し、新しい俳優を出す責任があるが、脚本の方は必ずしも保護を要せずして出る望がある。又保護したから出ると極まつたものでも無い。一方に右のや

うな保護があれば、それを當てに善い作も出る。唯俳優教育の事は、一面右の保護と連続した事業として考へる必要があるかも知ぬ。之については又我等に別案がある。

藝術になつた劇

六月の劇壇は寧ろ意外の所に焦點を作つた。満目荒涼の中にたゞ一つ、歌舞伎座の『宵庚申』だけが光つて居る。微薄ながらも生きた血の通つてゐるのは此の芝居ばかりと言つてよい。

市村座に黙阿彌の『髮結新三』がある。此の芝居などが黙阿彌では最も得意な代表作だと聞いては居るが、故菊五郎の舞臺でそれを見る機會の無かつた自分は、今あわて、市村座を見に行く志も

起こらない。併し是れから、見に行くなら、まづあれかとも思ふ。黙阿彌も最早そろ／＼時の節にかゝつて、後に残るべき眞生命の部分だけ選り分けられる必要がある。明治の過去に於ける劇作家は、たしかに黙阿彌を以て掩ふことが出来る。櫻痴學海の史劇は亡びても、黙阿彌が世話物の或部分は亡びてはならぬ。若い菊五郎が何れだけ此の老練な作者の生命を活かし得るか。想つて見れば満ざら興味が湧かぬでもない。

併し自分はやつぱり『髮結新三』よりも『宵庚申』を見たことを幸福とする。あの柔でそして遣瀨ないやうな情味を、乾からびた五三桐や、活動寫眞のやうな女浪人や、乃至愚にもつかぬ新派劇で

立て切つてゐる此の月の劇壇に見出だし得たのは意外である。お千代の姉が妹婚半兵衛への挨拶『去り状さま……』と投げ出したやうな一句、何でもないが所謂手元を離れた句である。近松得意の手法である。之れを聞いて始めて、はつと思ふ。あの瞬間だけでも五三桐や女浪人には無い境地である。固より今日から見れば、近松の原作にも、舞臺に切りはめられた彼の作にも、無理こじつけの義理人情が少くない。又芝翫の藝にせよ、仁左衛門の藝にせよ、門之助、卯三郎の藝にせよ、決して何れが一つ圖抜けてよいといふ程の出来ではない。而も脚本にしる、優技にしる、みなそれそれに練れて纏つた藝術である。中にも作者近松の藝術が三百

年の過去から最も多く光明を放つてゐる。是れに比べれば、周圍に並んでゐる他の芝居は全然藝術ではない。卑小、猥雑、無意義、よくもあんな物を眞顔で此の芝居と一緒に演じられると思ふ程である。勿論興行師の眼からは、此等は初めから藝術でなく、たゞの商品である。儲ればそれが即ち最上の品である。それと共に氣の毒なのは、新聞紙に職責を有する劇評家諸君である。興行市場の商品を、何か藝術界の大事でゝもあるかのやうに、やれ甲の藝が何うの、乙の藝が何うのと、興行毎に物らしい評を書かざるを得ない諸家の苦痛は嘸かしてあらうと察する。本來から言へば、此の種の芝居こそ藝術の上には副産物であり、素人物である

筆の序に一言噂して、折角勉強するがよいとでも言つて置けばそれでよい筈のものである。眞に藝術的意義のあるものを本位とし其の方をこそ劇評壇の黒人扱ひにして、眞面目な批評の對當とすべきである。然るに今の新聞紙の劇評は此の輕重を顛倒せざるを得ない事情の下に立つてゐる。此の事情が一變して、新聞紙の劇評から、もつと痛切に劇壇の開發の促される日が一日も速に來んことを我々は期待する。

聞けば歌舞伎座は其の後、客があまり這入らぬさうである。而も『宵庚申』は此の月の劇壇で最上の藝術たるを失はない。帝國劇場の出物に就ても望みたい事は多い。あれ程の大營業物であるの

と、俳優に限りがあることで種々の必要上已むを得ない點もあらうが、山門を出し菊畑を出す傍には、近松を生かし黙阿彌を生かすと同じ心持も常に加へて置いて欲しい。

西野博務は或席上で、日外私が提議したオペラ招聘のことを考案の中に入れて談してゐたと聞く、願はくは一日も早く其の話の進んだ模様を聞きたいものである。帝國劇場といひ歌舞伎座といふ以上一面、興行市場であると共に、他面には常に藝術の心と香ひとを如何なる程度にか保留することによつて、其の大劇場たる威嚴と品格とを保持することは、最も必要である。

歌舞伎座問題

歌舞伎座問題は中々の騒ぎになつた。曩には力士の相生の事件といひ、近くは芝翫と雁次郎との歌右衛門争ひ、續いて松竹會社と田村成義君との歌舞伎座の達引、不思議に是等の問題が大阪と東京との争ひになつて、そして何時も結局は東京方の勝利になる。何か一點、大阪よりも強い後頼みが東京にあるのであらう。大阪方も然う思つて諦める外はあるまい。今度の事件も、此の文章を

書いてある日までは、まだ破談の結局がつかないやうであつたが斯うなつた以上、要するに歌舞伎座は松竹會社のものにはなるまい。松竹會社としても、斯んな形勢の中で強てあの座を買ひ取つた所が、何うなるものでもない。一種の折衷的調和策でも成り立てば知らぬ事、さうで無い限り、歌舞伎座は田村君の手に残つて、松竹會社との依然たる對立になるであらう。

假りに田村君が新關係の下に歌舞伎座を支配するとすれば、其の未來は何うなるであらうか。私は此の騒動を機會に、田村君が何よりも先づ竦腕を揮ふべき問題が一つあると思ふ。而も舊劇に取つては重大な問題である。案外に善く解決されるのも此の際で

あるし、悪ければ動きのつかぬ程の痼疾になるのも此際である。此の問題に取つては、今日が一種の分水嶺である。

問題といふのは、興行法の一部、茶屋、出方制度の斷廢に外ならない。元來今日の舊劇は、切言すれば、劇乃至俳優そのものよりも、劇場制度のために亡ぼされつゝある。劇場制度のために亡びつゝあるのである。明治四十年代に於て、あの馬鹿氣茶屋や出方や、それらの者のマーシーにすがつて、始めて自分の坐る席の甲乙まで定まるといふ、無法な事のあるべき筈でない。此等の陋習が牛蚤の様に舊劇の體に喰ひ入つて、生血を吸ひ干すまでは離れない。今日舊劇の爲に試むべき唯一の振興策は俳優の改名

披露でもなく、劇場外觀の修理でもなく、實に此の茶屋出方制度の一新にある。此の理を明快に示して呉れたのは最近帝國劇場の事例であること、言ふまでもない。此の陋習の續く限り、舊劇は如何にあがいても次第に衰へ行くに違ひない。一方に舊藝術の面影を保存するといふことは面白い。併し茶屋出方は藝術ではない。少なくとも其れが金銭上、感情上に實に不快を人に與へる限り、藝術の外野に附屬するを許さない。時に或は劇場の色彩をも燈火をも音響をも凡て昔のまゝのイリュージョンに戻して見たい。随つて出方も木戸番も茶屋も昔のまゝが面白いといふことがあらう。其の場合ですら、其の茶屋、出方は昔の茶屋、出方の不快な

實質を脱した、形ばかりの茶屋、出方でなくては駄目である。歌舞伎座が今日に於いて最も考ふべき問題は此れである。先頃新聞に出た歌舞伎座修繕の廣告文は、近來見た廣告文中、最も傑れたものゝ一である。恐らく田村君乃至其の帷幄から出たものであらう。圖を添へて、改修後の殿堂風な建築で、先づ人の好奇心をそゝり、同時に帝劇の純西洋式なのに對して、萬事純日本式で立つといふ主張を極めて鮮明に標出して帝劇の光彩の一面を奪ふと共に、暗に帝劇のやうな餘興式の雜藝は遣りませぬと、胸中の霸氣を吐いた所、見上げた廣告文である。そして其の末に劇場附の案内所を設けるといふ一項があつた。私は最初、是れが

即ち茶屋に代るもので、茶屋は同時に廢するの知らん、それにしては簡単に運んだものだ、半信半疑で居た。すると『朝日新聞』演藝欄の記者が其れを打ち消して呉れた。あれは唯在來の茶屋以外に設けるのだといふ。それでは何の益にも立たぬ事勿論である。新案内所の無いのが不便なのでなく、舊茶屋の在るのが不便なのである。設けるといふ事よりも廢するといふ事が重大なのである。さう思つてゐると、近刊の『新小説』かで、石橋思案君が劇場の茶屋廢止を説いて大氣焔を上げられた。今日眞に舊劇の前途を慮るもので、此の點に同意を表せぬものは恐らく一人も無からう。而もそれで居て此の改革は何時行はれやうとも見えない

急所だけ、そつとよけて行つてゐる。畢竟積弊の墮力、如何とし難いからであらう。理窟で説いた所が、此等の頑力を動かし得やうとは思はれぬ。之れを破る途は、劇場の收利を彼等に頼つ組織にするか、それになくば、初めから全く彼等の關係の無い所で、新たに出發するかの外はあるまい。後者は即ち帝劇の例であるが、今回の騒ぎに就ても、菊池君といふ田村側の後援者が新劇場建築の案を持ち出してゐた。田村君の爲に計れば、あれなぞが此の點では正に新しく且つ比較的容易な道であつたかも知れぬ。私も初め、あの邊に落ち着くのかと思つた。然るに形勢は逆戻りをして丁つた。今とな

つては、最早舊形の中に新活路を求め外はない。然るに此際更に一つの困難を加へたのは、逆戻りの原動力が一部、茶屋、出方その他之れに近い方面にあつた事である。是れで益々、今後の歌舞伎座經營者は此等の方面に頭の上らぬ事になつた。こゝが即ち一步を誤れば身動きの出来ぬ痼疾に陥る所以である。老練家には之れを切り抜ける成竹もあるか知らぬが、當分此等に對して斧鉞を下すといふ如き英斷的の事は出来さうにもない。さうとすれば一そ此の際禍を轉じて福とする案がありたい。即ち之れを機會に、何等かの方法で、座の休戚を彼等と分かつたしめ、其の代りに茶屋出方を斷廢する。其の跡の設備は凡て帝劇乃至洋風に則つて

も少しも耻づべき事ではないと思ふ。而して後、内容たる劇に於て、及劇場建築に於て劃然帝劇と相對したものをを見せて貰へば吾々の田村君に對する要求はそれで充たされる。

現代の青年に與ふる書

現代青年に與ふると言つても、自分自身が中年者で、青年老年の何れに屬するか解らないのであるから、青年に教ふべき道があるとするれば、それは直に自分自身にも教ふべき道である。だから此處に話すのは、人に與ふるといふよりも、自分で行はうとし又行ひつゝある道に外ならない。

思ふに現代は正しく『新に作る可き時代』であると思ふ。これが

吾々の行く可き道でないか。

イブセンの劇『幽霊』の中に、人間は單に眞實の幽霊のみならず遺傳の上にも、思想の上にも、習慣の上にも、不知不識の間に昔の人の幽霊にとりつかれて居る。吾々は日々の新聞記事の一行一行の間にも常に此の種類の幽霊の出沒して居るのを認める、といふやうな意味の事が書いてあるが、今日の社會には此の言葉を思ひ出させることが多い。

例へば文藝のことなどでも今の新しいものが面白くないといふ不平の尠くとも半分は、此の幽霊に取りつかれて居るのであらう。此の取りつかれて居る幽霊が出ないから面白くないと言ふ風

のが多い。吾々の力むべきことは、此の幽霊以外の面白いものを作り出すことで、此のことは又あらゆる社會現象の上に持つて來ることが出来るのである。即ち『新創造』といふこの言葉が吾々の題目である。

元來新らしく作るといふことは、いろく言ひ換へられる言葉であるが、道德宗教の實行方面から見ると結局又新價値の發見、開拓といふことである。従つてそれが必ずしも根本から舊來のものとは全然異つたものになると限つた意味ではない。特に歴史的連鎖を重んじて居る實行の社會に於てはそれは容易に出來ないことであるが、それで少しも差つかへはないと思ふ。多くの場合に於

ては舊來持ち傳へて來た價値なり標準なりを其儘受けついでも一向差つかへはない、寧ろさうせねばならぬ場合が十中の七八である。

併し此等の場合に於て、其の價値となり、標準となるものは必ず其の現在に於ける其の人自らの獨立した而てて全人格の活動した自己判斷によりて再認せられた價値標準でなければならぬ。即ち自分の其の現在に於ける眞の要求との距離の多少によりて其の價値の大小が定まるのである。此の意味で其處に新らしく價値に認定を與ふれば、其の瞬間からして自己の新らしき所有物となるのである。新價値の發見とは此の謂に外ならない。

要するにあらゆる周囲の事情や、無理な注文から押しつけられた古い財産を其のまゝ盲從的に守ることが現代青年にとつて禍であるといふことになる。世人の稱へる自覺といふことは要するにこれである。

仁義博愛は結構であるが、唯これが遠い祖先から傳はつて來た幽霊であるから尊敬するといふのでなく自己の眞の要求に合するといふ點から價値が出て來たものでさへあれば、初めて其處に權威があるのである。而して斯様な意味で新しく價値を作るには、其の判断の主たる自己其の者が、先づ新しく眼を開いて居るものでなくてはならぬ。所謂ワイド、オープン、アイで世界を見詰め

て居る新人でなくてはならぬ。

即ち今日に於て最も必要なことは、教育者側即ち人を作る地位に在る人々に向つてもこれが眞の修養の方法であると言つてよいのであるが、被教育者即 作らるべき青年にとつてもまた廣く眼を見張つた新人に自分になると共に、成るべく廣くお互にさういふ人に成らせ合ふといふことが根本ではないか。

何故なれば假りに此處に一人の青年があり、自分は新らしい眼を、見張つて世界を觀る新人と信じて、在來の道德宗教の價値に對して其の新しい眼から批評を加へて見るとした處で、思想に於ける夫等の根本的新創造は、現實の社會に於ては何時も周囲の實

際とは調和しない、即ち思想上の新價値を眞實に實行上の新價値に移さうとする時に矛盾を起し、種々の悲劇を生じて来る。

此の場合に於て何故汝は新思想を懐きながら、進んで其の犠牲者となり殉教者とならぬかといふのは、無法の注文である。犠牲を強ひ殉教を強ふる所に既に舊窩を見、不自然を見る場合が多い。されば何等かの經世的見地から、是等の悲劇なり犠牲者なりを救はんとするには、何うしたらよいか、思ふに是等の新人に向つて其實行と思想との間に一時の區劃を設け、先づ其の思想上の新社會を廣く造り上げよといふより外は無いのでないか。言葉を換へて言へば、實行の人より離れて思想の上に新價値の生活を固める

のが我等の務である。新人は先づ思想に生きて實行に死ぬる二重人格の生活を工風するより外はない。そして周圍の大勢が歩調を或る程度まで合せて呉れるやうになつたら、其の時に至つて實行に移つても差門へはない。

これは一方から言へば、現代の青年に説く道としては餘りに温和に過ぎるやうに見えるかも知れないが、事實實行し得る道としては此の他にないと思ふ。

此等の意味から吾々は、彼の政治といふやうなものと思想上の根本問題との間に出来る丈の距離を置いて、思想上の自由なる活動をさして見たい。さうすればそれが實行に移らない範圍に於

て、先づ周圍の様々の異分子と接觸して、若し其の思想が過つて居たり、又は有害なものであるなれば、自然の制裁として變形を
 するか或は滅して了ふに極つてゐる。つまり思想を思想として實
 行に移る前に先づ十分の展開をせしめるといふことは、おのづか
 ら思想を鍛錬せしめることになるのである。

而して天下の有識者が擧つて、其の思想に同意し、賛成した時
 は、其の思想は毀つ可からざる其の時代の新價値になる譯である
 から、實行に移しても差つかへなく、又さしたる犠牲者、或は悲
 劇を生じないで社會は進歩して行く。

此等の理由によつて、吾々は最も穩健な實行し得る途として教

育者は自分の眼で世界を見る新人を作るべく、社會經營者は夫等
 の新人をして思想の上に十分の自由を興へ、自らの發展自らの鍛
 錬を受けしむべく、而して青年自らは此の道によつて思想の上に
 新らしき眼を開き、新價値をあらゆる方面に自ら作り出し且つ布
 及して行かんと努力すべきである。

新らしき我とか、人格とかは如何なる程度まで行けば完全する
 かといふことは分るべきものでない。只其の時々迄の自分の全
 精神の聲を聞いて、自分の力の及ぶ限りに於て統一し、其の瞬間
 に於て自分に最も満足を持來すと思はれるものに、價値の標準を
 立てる他はない。而してかくして立てた標準をば、實行に移して

可いか悪いかは即ち前述の如く、一人のみを守らずして、先づ周圍に其の信ずる價值を思想の上から關係せしめて見るのである。さうすれば自ら新標準が安心して實行に移るか否かの試験がそれによりて出來やう。而して是等の場合の多くの非難である處の客觀的確實性も其處から生じて來る。

是れを要するに今後の青年の行くべき道は充實したる新價値に生きんとする努力一つである。而して其の實現方法は先づ思想上の新人たれ、而してこれが周圍の實行と衝突する場合猪突することの出來ないものは、沈潜して先づ思想の世界に客觀的保證を得よ、或は思想のみの新人として終るかも知れない。其の時に遺憾

の無いだけの覺悟をして置け。目指す處は結局新なる人生の創作にある。(談話筆記)

(終)

大正二年十一月廿二日印刷
大正二年十一月廿五日發行

(定價金三十五錢)

著者 島村抱月

發行兼印刷者 高倉嘉夫

東京市神田區今川小路二丁目十七番地

印刷所 忠誠堂印刷部



不許
複製

發行所

東京市神田區今川小路
二丁目十七番地

忠誠堂

電話本局四九六六番
振替東京二〇四三一番

芳賀文學博士 解題
 青木久保 兩校
 學士 訂
戰記叢書

第一編

曾石義筑

我田 我經
 軍軍 軍軍
 物物

語記記記

菊版一
 クロ一ス綴千
 定價金一圓五十錢
 送料金十六錢

義經記、曾我物語の二書が、義經、曾我兄弟の事蹟を記した英雄譚的敘事詩なるは誰も知る所であるが、石田軍記が關ヶ原戰役の顛末を敘したものは、筑紫軍記が大友宗麟を中心として、島津、龍造寺等との交戦を記したものであるは、之を知らないものも少くあるまい。本書は、芳賀博士指導の下に、右を第一編とし、引續き我國戰記物の主なるもの珍なるものを續刊して、古武士の氣風漸く消磨せんとする現代一斑家庭の讀本に供せんとするものである。校訂の嚴、製本の美、而して價格の廉なるは夙に弊堂の誇るところ。乞ふ一本を机上に具へられんことを。

第二編

太平記

(刊未)

第三編

星月夜顯晦錄
 多田五代記
 難波戰記

(刊未)

發行所 東京今川路 忠誠堂 振替電話 東京本局 四九六六 〇四六六 一三四六

